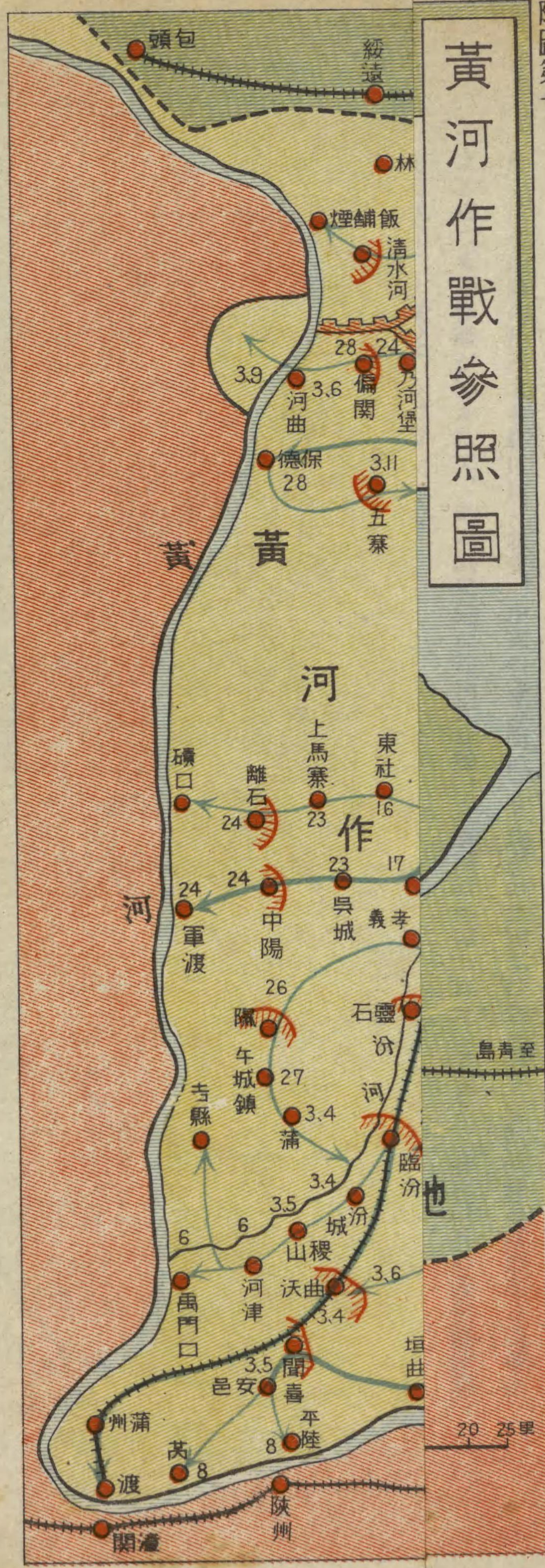
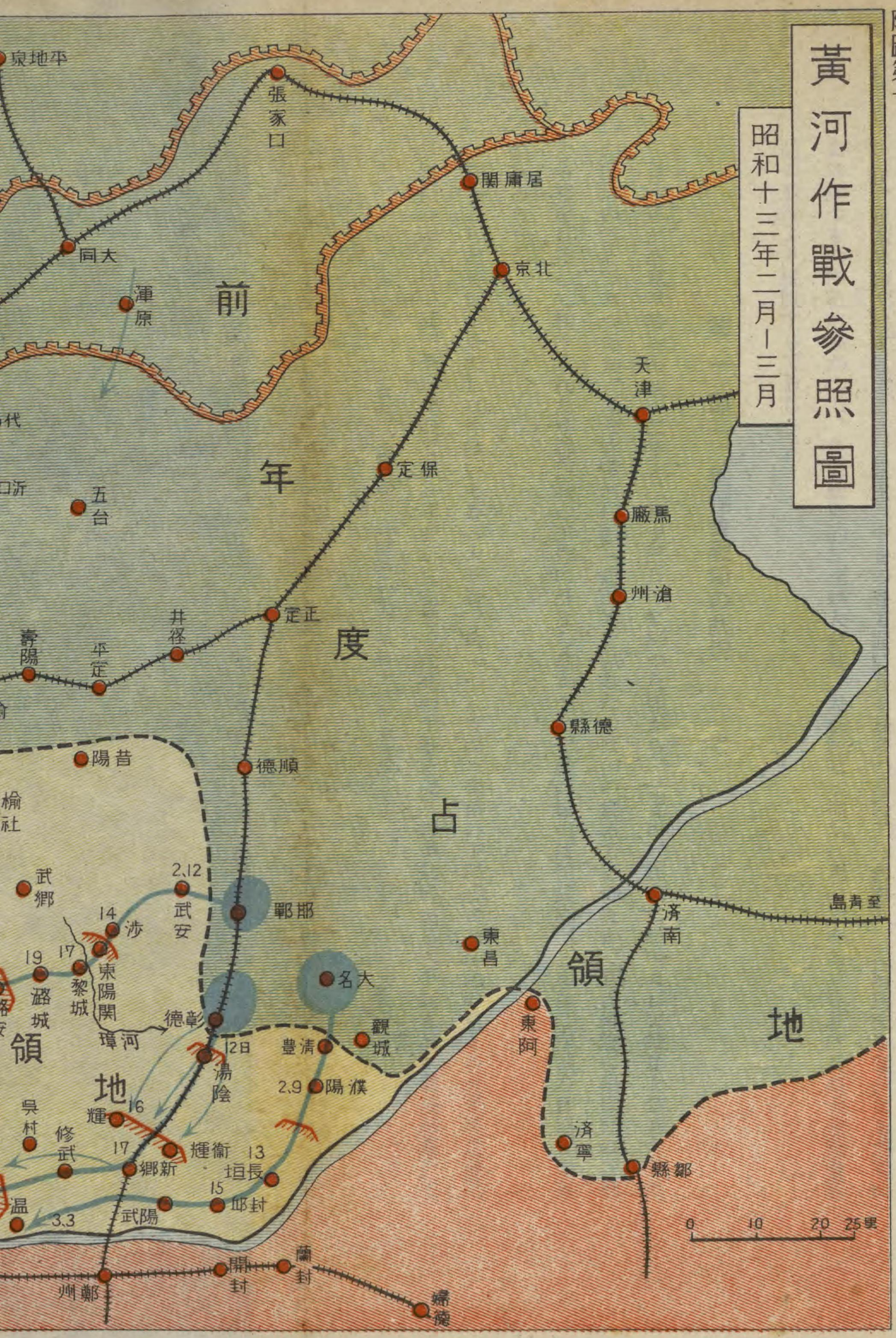
附圖第七

黃河作戰參照圖

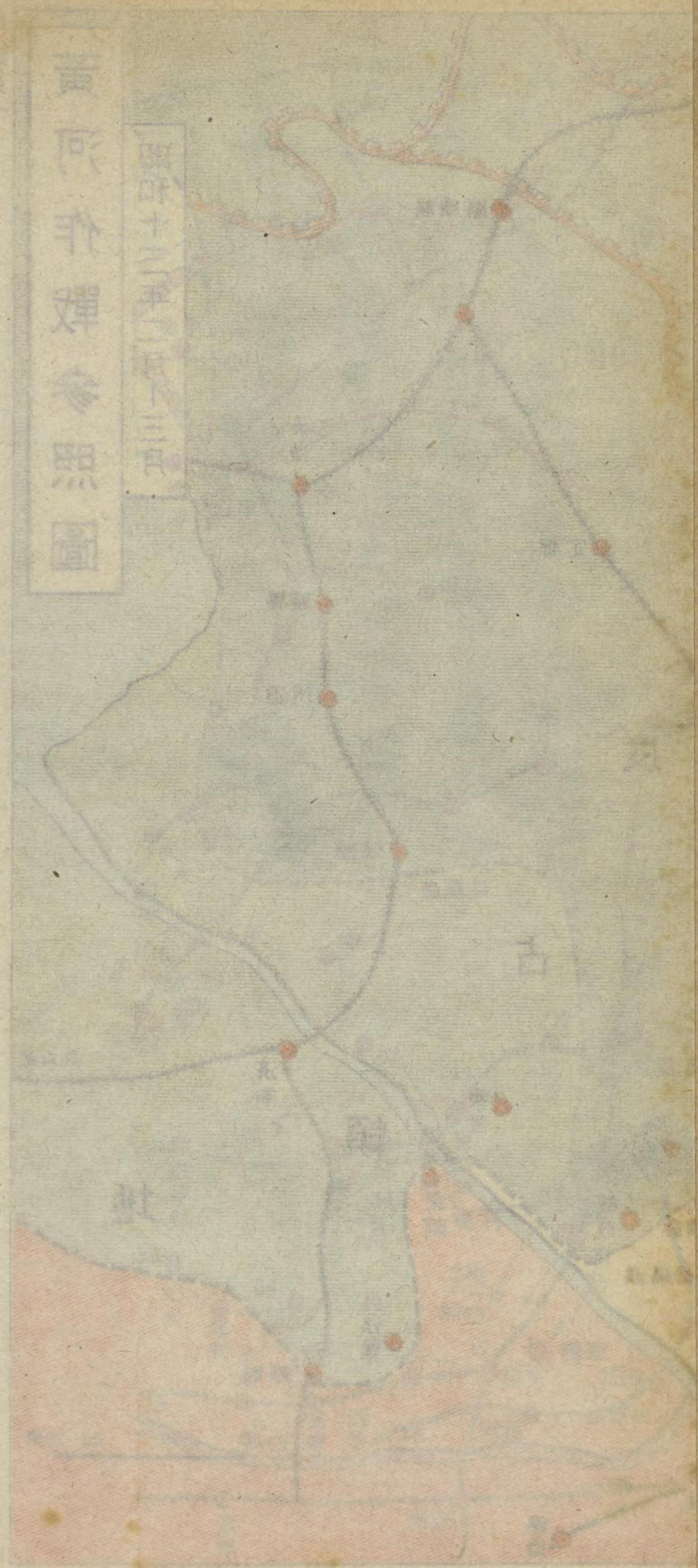


黃河作戰參照圖

昭和十三年二月—三月



頭包
綏遠
泉地平
張家口
林和
關廟居
煙舖飯
口虎殺
清水河
同大
京北
魯平
井坪鎮
渾原
前
河曲
偏關
乃河堡
朔
德保
神池
代
寧武
五寨
黃
年
鎮口沂
五台
定保
沂
河
定正
井陘
原太
壽陽
平定
次榆
礦口
離石
上馬寨
東社
交城
文水
汾陽
呉城
中陽
軍渡
孝義
遙平
陽昔
德順
榆社
休介
作
戰
占
石靈
汾河
武鄉
武安
2,12
鄲邯
午城鎮
蒲
臨汾
曲亭鎮
沁河
涉
東昌
名大
領
潞安
潞城
黎城
東陽關
德彰
漳河
觀城
東阿
穆山
沃曲
河津
禹門口
沁水
沢州
陽城
清源
呉村
修武
湯陰
豐清
陽濮
縣德
濟寧
聞喜
邑安
垣曲
懷慶
温
輝衛
新鄉
長垣
邱封
武陽
州蒲
芮
平陸
渡
陝州
洛陽
州鄭
開封
蘭封
關潼
歸德



乙徐州會戦（昭和十三年三月—五月）

乙　徐州會戰（昭和十三年三月—五月）

徐州の大會戰は昭和十三年五月五日端午の佳節に始まり同十九日徐州陥落を以て一段落を告げたのであるが、此の大包圍陣の進展する迄には、北支、中支の各方面に亙り幾多の作戰工作があり、又陥落後も猛烈なる追擊による幾つもの作戰が導かれて、此の歴史的な徐州大會戰、大殲滅戰が描かれたのである。されば其の大包圍會戰前の狀況より逐説するであらう。

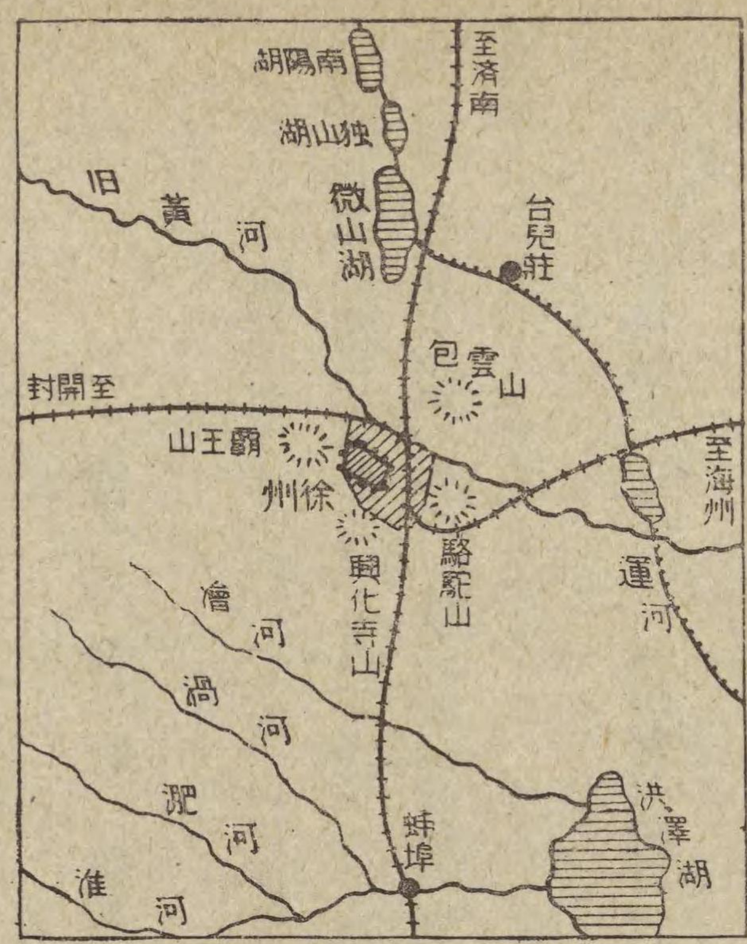
第一節　徐州會戰前の狀況

日本軍が南京攻略（昭和十二年十二月十三日）を終つた頃から、北支に、江南に默々として征馬を進めてゐたのは何の爲めであつたか、又今春黄河作戰（前説）を試みたのは何の爲めであつたか、是れ皆陰に陽に此の徐州大會戰を目差して續けられた序幕作戰の工作に外ならなかつた。此の徐州は何故に、そんなに作戰の目標となるのであらうか。

青々とした麥畑が果てしなく續いてゐる大平野、山一つなく處々楊柳の下に小さな部落の見える大平原之が世界屈指の大平原、徐州平野なのである。昔から支那では此の平野を支那の中部にある大平野と云ふ意味からして

中原と呼んでゐる。徐州城は此の中原の眞中に在り、舊黃河に臨んだ人口八萬三千の小都會で、城廓の周圍約一里半である。

徐州は春秋時代の彭城であつて左程大きい都會でないが、非常に惠まれた地形にある。其の北方を眺めると、凡そ五里の所に琵琶湖よりも大きい微山湖が横はり、それに續いて獨山湖、南陽湖などゝ云ふ澤山の湖が例の大運河によつて連絡されて遠く黃河にまで延びてゐる。



徐州の地位

此の大運河は其の昔、人工によつて作られた世界の一名物で、北は北京の東の通州に始まり、白河を過ぎ、黃河を渡り、山東省の南部から江蘇省を縱斷して揚子江に出で、更に揚子江を横ぎつて鎭江、杭州を經て寧波にまで、蜿蜒として實に數千粁に達し、其の河幅は凡そ三十米、深さは六月から九月まで增水期で四米、十二月、一月、二月の減水期でも一米餘もある。此の大運河は徐州の東北から東南方に流れて、幾多の湖と共に徐州をどつしりと守つてゐる。

又南方には澮河、渦河、淝河、淮河等の河川が幾筋も横はつてゐて敵の攻略を阻み、尙ほ市の周圍には獅王山、包雲山、駱駝山、興化寺山等ありて複廓の用を爲してゐるので、實に徐州は天然的な陣形の要地である。

筋も横はつてゐて敵の攻略を阻み、尙ほ市の周圍には覇王山、包雲山、駱駝山、興化寺山等ありて複廓の用を爲してゐるので、實に徐州は天然的な陣形の要地である。

蔣介石は三、四年も前から日本と交戰する準備の爲めに、此の徐州の丘と云ふ丘、部落と云ふ部落に、十重、二十重の大塹壕を築き、トーチカを設け、自ら蔣介石ラインと名づける大陣地を構築して「之を破れるなら破つて見ろ」と豪語した。彼が、なぜ徐州を是程までに堅固に防備したのであるか、それは云ふ迄もなく軍事上其の他色々の點から支那に取つては非常に重要な土地であるからで、「中原を失ふことは國を失ふことである」と、昔から云はれてゐた位である。それだけに徐州は歷史的にも有名な所で、かの有名な項羽と劉邦（漢高祖）と帝位を爭つて大激戰をしたのを始めとして、英雄豪傑共が、度々天下を爭ふ爲めに戰をした土地である。かの「中原の鹿を逐ふ」と云ふ言葉があるが、鹿とは皇位に譬へたので、此の徐州を陷れたものが、支那の皇帝になる資格を得るのだと云ふ意味である。項羽と劉邦の戰に就いては後述する。

上海陷り、濟南、南京枕を並べて陷落するや、蔣介石は漢口に最高軍事會議を開き、日本軍の北支と中支との二方面に分離しあるに乘じ、其の中間の徐州附近に主力を進めて日本軍を反擊し各個に之を擊破殲滅せんと謀つた。之が爲め三十萬（後には五十萬となる）の大兵を集中し李宗仁を軍司令官として之が指揮に當らしめた。其の配置の大要は

一、徐州南方の地區には

廣西軍、四川軍、舊東北軍、馮治安軍等約十個師

一、徐州西北方の地區には

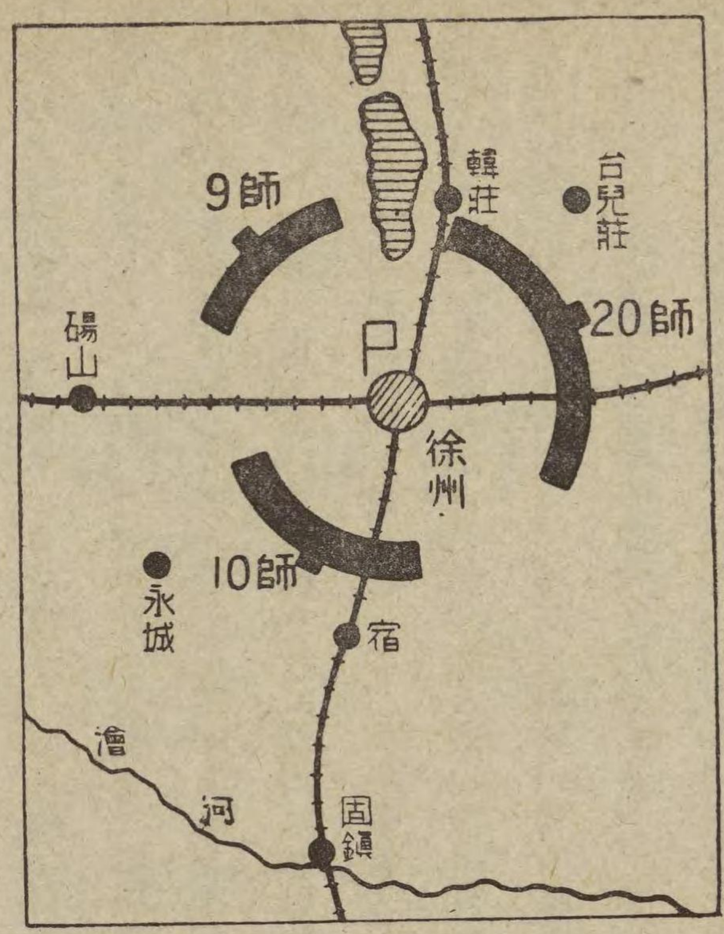
劉汝明軍、孫桐萱軍、曹福林軍、谷良民軍、中央軍等約九個師

一、徐州東方一帶の地區には

四川軍、孫連仲軍、張自忠軍、中央軍、龐炳勛軍、舊東北軍等約二十個師

以上の如き計畫であつた。此の作戰計畫は形式としては戰理に合したものである。しかし彼は失敗した。

日本軍に在りては寺內將軍の指揮する北支軍と、畑將軍の率ゐる中支軍との合作により此の徐州大包圍作戰が導かれた。從つて其の前衞戰とも云ふべき戰鬪は各方面に行はれた。先づ徐州の東北方に起つた臺兒莊の戰から述べよう。



徐州の支那軍

其一　臺兒莊の戰　（三月—四月）

臺兒莊の戰は徐州戰の前哨戰であつて、上海に於ける大場鎭の激戰にも劣らぬ壯烈無比なものであつた。

昭和十二年十二月二十七日濟南を陷れた日本軍は其の勢に乘じ、津浦線に沿ふては南進し、膠濟線に沿ふては東進して、右は濟寧より鄒縣、蒙陰、沂水を經て左は青島に亙る線を占領し、暫し其處にじつと待機して虎視眈

臺兒莊の戰は徐州戰の前哨戰であつて、上海に於ける大場鎭の激戰にも劣らぬ壯烈無比なものであつた。

昭和十二年十二月二十七日濟南を陷れた日本軍は其の勢に乘じ、津浦線に沿ふては南進し、膠濟線に沿ふては東進して、右は濟寧より鄒縣、蒙陰、沂水を經て左は青島に亙る線を占領し、暫し其處にじつと待機して虎視眈眈と徐州を睨んでゐた。鄒縣より徐州まで約三十五里である。

昭和十三年三月に至るや、支那軍の戰線は頓に活氣を呈して來た。之が日本軍に向ひ反擊を試みんとの前兆と知られた。制先の雄たる日本軍は、なんで之を許すべき、三月十四日俄然鄒縣南方の守備線を出發して津浦線に沿ひ活潑なる進擊を開始し、當面に在る敵の四川軍を擊破し、破竹の勢ひを以て十九日には早や韓莊、嶧縣の線を占領して敵に殲滅的打擊を與へ、大運河以南に潰走せしめた。

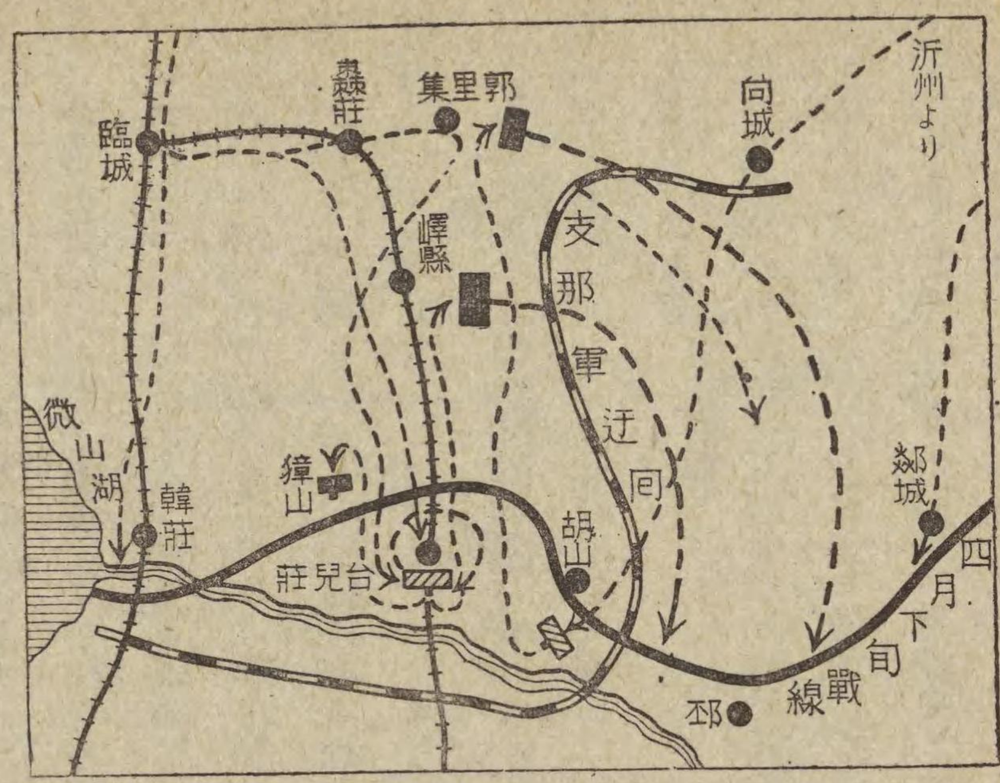
支那軍は此の慘敗せる四川軍を救援せんが爲め、湯恩伯の率ゐる四個師を蠡莊方向に派遣した。之を見たる日本軍は直ちに主力を以て此の敵を攻擊し、一部を以て南進して臺兒莊を占領せしめた。是れに於て臺兒莊の血戰が起るのである。

此の日本軍の一隊は三月二十四日臺兒莊附近に在る約六千の敵を攻擊し其の團長以下約三百を斃し大打擊を與へて臺兒莊に逼つたが、敵は益々增加して我に數十倍の優勢となり、我は遂に重圍の裡に陷りたるも屈せず奮戰して二十七日に至り臺兒莊の一角を奪取した。此の時に於ける敵の兵力は孫連仲の指揮する約五個師であつた。

蠡莊方面に進んだ日本軍の主力は、三月二十六日より二十八日にかけて同地東方の地區に於て湯恩伯軍を擊破して潰滅に歸せしめた時、臺兒莊の戰況急なるを聞き三十日同地に向ひ急行し、三十一日先づ臺兒莊西側地區の

敵を猛擊し、之を擊破して大運河の南岸に壓迫するや、直ちに廻れ右して臺兒莊の北を廻はり四月一日其の東側地區に突進して更に當面の敵を擊破し同三日神武天皇祭の祝日を以て臺兒莊の南門を占領して殆んど同市を收めた。唯僅かに敵の一部が堅固なる圍壁に據つて頑强に抵抗を續けてゐた。

此の時、日本軍の左翼に有力なる友軍が來著した。此の友軍は三月十四、五日頃莒縣方向から運動を起し途中、張自忠麾、炳勛軍約三個師を擊破しつゝ、沂州、向城を經て四月三日臺兒莊東南約二里に在る胡山を攻略して臺兒莊占領部隊と相連絡した。斯くて臺兒莊、胡山に亙る線は日本軍の有に歸したのである。



臺兒莊の戰
（三月一—四月）

【日本軍の反轉】　然るに前面の支那軍は益々增加し、それが溢れて遂には臺兒莊附近に在る日本軍の左翼を迂回して遙かに其の背後に迫まり嶧縣の東方に現出するやうになつた。

是れに於て日本軍は先づ此の敵を反擊するの心要を認め、四月六日夜窃かに兵力を北方に轉用するに決し、臺兒莊に在る部隊をば後方の嶧縣に、胡山に在る部隊をば蠡莊の東方郭里集附近に集結せしめた。是等の諸隊は四

つた。

て遙かに其の背後に迫まり嶧縣の東方に現出するやうにな

是れに於て日本軍は先づ此の敵を反擊するの心要を認め、四月六日夜窃かに兵力を北方に轉用するに決し、臺兒莊に在る部隊をば後方の嶧縣に、胡山に在る部隊をば蠡莊の東方郭里集附近に集結せしめた。是等の諸隊は四月九日を以て各々其の所命の地點に達して攻擊を準備し、やがて其の用意の成るや四月中旬運動を起し、當面の敵を擊破席卷して四月二十六日頃には韓莊、獐山、胡山、鄒城の線に進出した。爾來此の線に在つて敵の主力を牽制抑留し、而して此の間に於て日本軍は魯西（徐州西北方面）及び津浦線南段方面より各々軍を進めて、南北より敵を挾擊し、以て敵の大軍を一擧に覆滅せんとしたのである。此の作戰計畫は果して圖に中りて敵を包圍圈中に入れ、歴史的の殲滅的打擊を與へ得たのである。

此の時のことである。支那側は、臺兒莊の戰を日本軍の敗退と見なし、「日本軍大敗、中華軍大勝」と大々的な戰勝デマを放送し、漢口に在る蔣介石は大得意になり、外國新聞記者を招待して大勝利の快報を傳へて乾杯し、作戰本部の陳少佐を案内役とし特別仕立の列車に乘せて徐州軍司令官李宗仁大將の許に遣はし戰況を視察せしめた。然るに是等の一行が戰線を視察したる所、支那軍の勝利どころか、意外にも何萬と云ふ支那兵の死屍は累々と折り重なつてゐたので、陳少佐は面目を失し、是れ日本兵が支那兵の服を着て誤魔化したのであると記者連に苦しい辯解をしたと云ふ笑話が傳へられてゐる。

當時列國殊に日本人でさへも、此の支那一流の戰勝放送のデマを過信したやうであつたが、日本軍に於ては之に對し何等の應酬反駁もせず、大目的達成の爲め、殊更に之を是認もせず、否認もせずに、支那側を自己陶醉に

躍らせつゝ其の虛に乘じ諸準備を整へ、光輝ある戰捷を期待したのである。

前述の如く四月下旬韓莊、獐山、郯城の線に進出して敵を牽制してゐた日本軍は、（此の方面を魯南正面と云ふ）他方面卽ち魯西及び津浦線南段より前進せる諸軍の包圍態勢の成るに及び、之と連繫すべく五月中旬蹶然戰線を躍進して臺兒莊以南に進出し徐州會戰に參加したのであるが、此のことに就いては後述する。

要するに臺兒莊の血戰卽ち山東省南部（魯南）の戰は支那軍の攻勢を打破したものだけに、敵に與へた損害は頗る大にして遺棄屍體のみにても約二萬を下らず、湯恩伯、孫連仲、張自忠、龐炳勛、王仲廉等の諸軍は其の兵力の大半を失ひ祁縣方面の局地に僅かに餘命を存しあるの窮狀に陷り、敵の總帥李宗仁は其の副將白崇禧と共に大勢の挽回に焦慮したが臺兒莊方面の戰況旣に斯の如くであり、又第一線と督戰隊との間に同士討の悲喜劇を演じ、漸次內部の無統制と、連繫の缺陷とを暴露しつゝあつたので、彼等の企圖した反擊作戰は此の臺兒莊の失敗によつて一大打擊を蒙むつたのである。

其二　江南方面の戰（三月—四月）

此に云ふ江南方面の戰とは上海と南京の中間に在る太湖の西方廣德附近に起つた戰のことである。何故に此の戰が起つたかと云へば、それは支那軍が徐州方面に攻勢を取るに當り、南京附近に在る日本軍を成るべく多く南方に牽制せんが爲め江南の廣德、蕪湖、杭州方面に遊擊戰を企圖したからであつた。

日本軍に於ては此の五月蠅く蠢動する敵軍を徹底的に掃蕩せんと、五方面から包圍的に太湖西方の三州山系の中央部に壓縮して殆んど殲滅に歸せしめたのである。

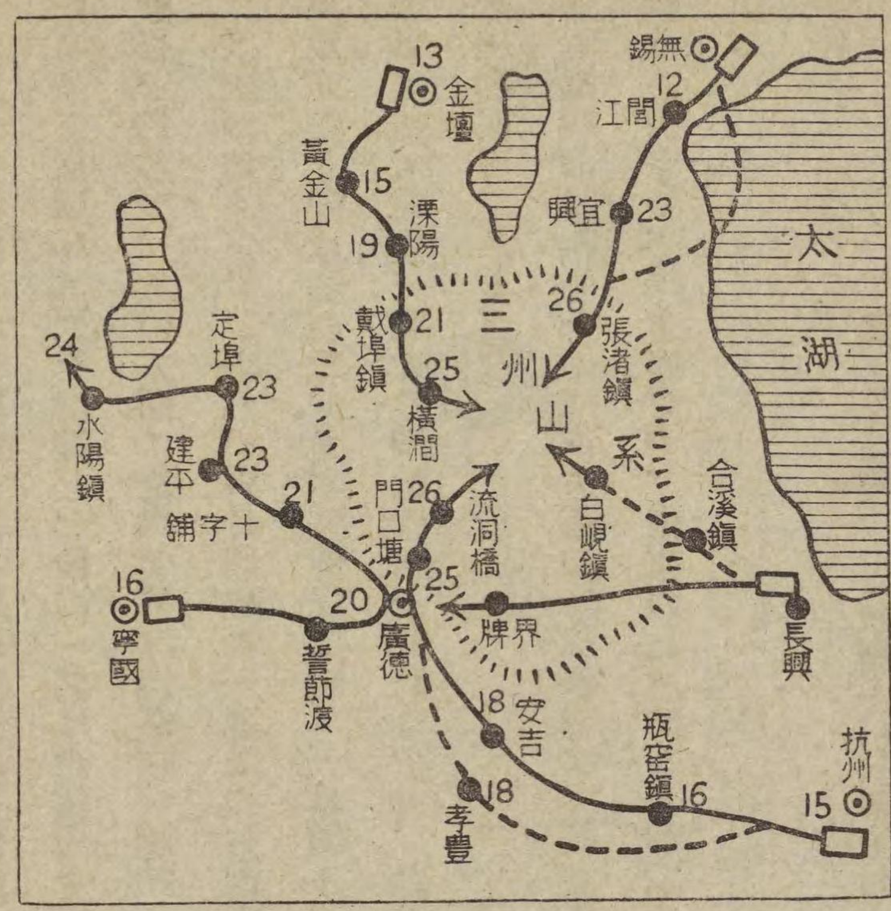
其一　無錫附近に在る部隊は三月十二日主力を以て閭江を出發し一部を以て湖上を渡り二十三日宣興を取り、

方に牽制せんが爲め江南の廣德、蕪湖、杭州方面に遊擊戰を企圖したが、日本軍に於ては此の五月蠅く蠢動する敵軍を徹底的に掃蕩せんと、五方面から包圍的に太湖西方の三州山系の中央部に壓縮して殆んど殲滅に歸せしめたのである。

其一　無錫附近に在る部隊は三月十二日主力を以て閭江を出發し一部を以て湖上を渡り二十三日宣興を取り、二十六日張渚鎭の陣地を攻略して同高地を占領せる敵を殆んど潰滅に歸せしめた。

其二　金壇附近に在る部隊は三月十三日同地を出發し、十五日黃金山附近の敵を擊破し、十九日溧陽に進出し、二十一日戴埠鎭に在る敵を粉碎し、二十五日橫澗を攻略して此の方面に進出せる、前記の無錫部隊と連絡した。

其三　寧國（宣城）附近に在る部隊は三月十六日同地を出發し、二十日誓節渡を攻略して廣德に進入し、それより西北方に鋒を轉じ二十一日十字鋪、二十三日建平（郎溪）、定埠を、二十四日水陽鎭を占領して此の方面の敵を一掃した。



江南方面の戰
（三月）

其四　杭州に在る部隊は三月十五日同地出發、二縱隊となりて前進し、十六日瓶窑鎭、十八日安吉、孝豐附近

の敵を掃蕩し、二十五日廣德を過ぎて其の北方門口塘を、二十六日流洞橋附近の敵を攻擊して之を擊破した。

其五　長興に在る部隊は十八日同地出發、二縱隊となり、主力は二十五日界牌に進入して其の附近にある有力なる敵と交戰して之を潰滅し、他の一部は含溪鎭を經て山地に進入し、二十一日白峴鎭附近の高地に據る敵を擊破し、然る後、其の方面に進出せる無錫部隊と連絡した。

以上の如く三月二十五、六日頃迄に一應此の方面の敵を掃蕩したが、殘敵は尙ほ三州山系の山奥に籠據し時々出沒蠢動を續けるので、日本守備隊は四月三日頃より再び行動を開始して是等の殘敵を擊滅した。此の江南方面の戰に於て前後交戰せる回數は三十餘回に上り、敵の兵力約三萬にして其の遺棄屍體は約七千に達し、日本軍の死傷約四百である。

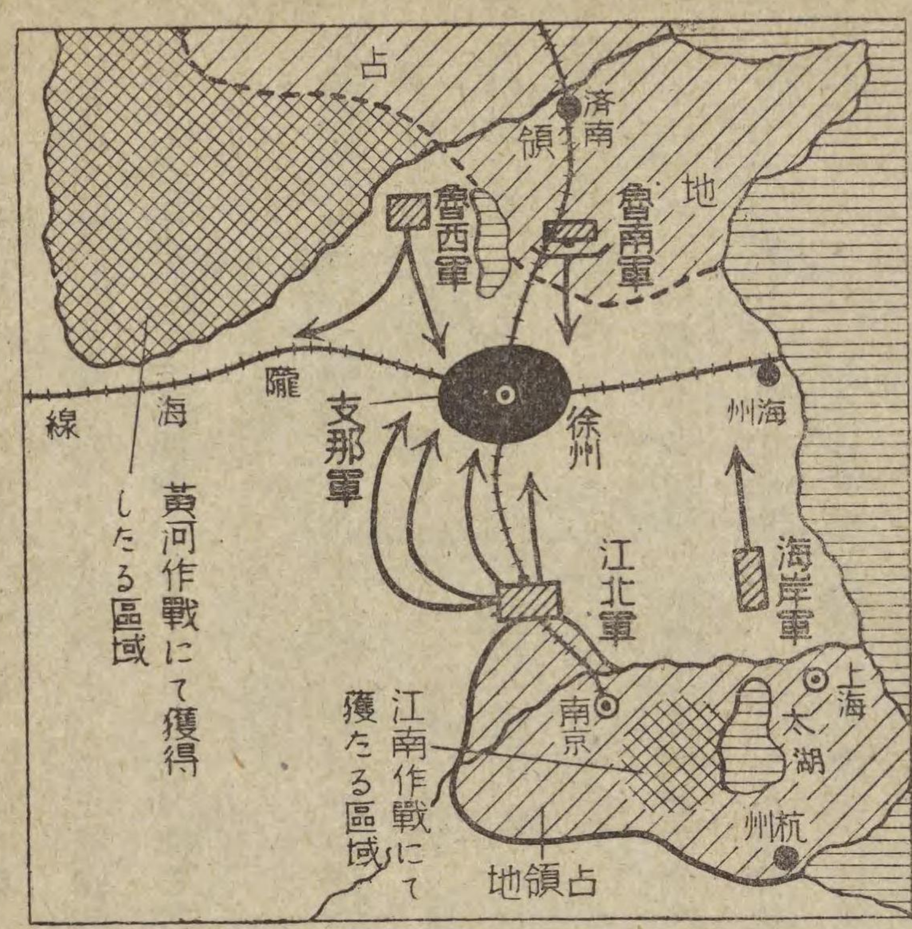
支那軍の試みた此の江南方面の牽制運動は、統制なきゲリラ戰法の蠢動に過ぎずして、日本軍の徐州作戰は之が爲め何等の痛痒を感ぜず、南京の北岸にある部隊は南京――津浦線をグン〳〵と徐州に向ひ北上猛進したのである。

第二節　徐州大包圍陣の進展（五月）

北京、天津、太原、濟南を占領した日本北支軍と上海、南京を攻略した日本中支軍との間に地形上自然に約束される作戰上の問題は、中原の徐州を占領して此の南北二軍の連絡を圖り津浦線、隴海線の支配權を掌握して政略、戰略上の利を收めんとするにあつた。

北京、天津、太原、濟南を占領した日本北支軍と上海、南京を攻略した日本中支軍との間に地形上自然に約束される作戦上の問題は、中原の徐州を占領して此の南北二軍の連絡を圖り津浦線、隴海線の支配權を掌握して政略、戰略上の利を收めんとするにあつた。

之が爲め日本軍は先づ第一には今春（昭和十三年）紀元節の佳日をトし黄河作戰を試みて黄河以北の河南、山西省を收め、以て北支に於ける後方の地位を磐石たらしめ、第二には臺兒莊の戰即ち魯南作戰を敢てして敵を此の方面に牽制抑留し、第三には江南作戰を行ひて中支に於ける後方の憂を除き。以上三箇の準備工作を終つた所で愈々徐州に向ひ大包圍陣の幕を切つて落したのである。之が爲めには中支軍をば南京方面から津浦線に沿ひ徐州に向ひ北進せしめ（江北方面軍）、北支軍をば濟寧西方地區から徐州に向ひ南進せしめ（魯西方面軍）、然る後是等南北兩軍の進展に伴ひ、臺兒莊の線に在る魯南方面軍と、新たに津浦線の東方海岸地區を北進する海岸方面軍とが之と相策應して徐州殲滅戰が成立したのである。



徐州攻圍作戰

其一　江北方面軍の進擊（五月）

江北の地とは揚子江の北岸地方のことで、川一つ隔てた南京に較べると、全く別種の風土であつて其の汚穢さ加減はひどい。人口三十五萬の鳳陽でも、滁縣でも、皆泥壁と赤土で固めた貧民窟其のものである。此處に二箇月も前から南京總攻撃に赫々たる武勳を立てた我が貔貅と、覆面の快速奇襲部隊とが、淮河の線に機の熟するのを待つてゐたが、愈々大進撃の命令下り、五月四日夜行動を起して徐州包圍の新作戰に從つたのであるが、少しく其の以前のことを概說するであらう。

【進撃前の狀況】 前年十二月十三日南京攻略の勢ひに乘じ日本中支軍は揚子江の北岸に進出して同月二十日津浦線上の滁縣を占領し、暫く此處を根據として駐止し、天長、肝胎、嘉山の線に前哨を張つて警戒してゐた。該方面の敵は約三萬にして定遠、臨淮關、鳳陽、蚌埠の地域に陣地を構設し、尙ほ盧州（合肥）、淮安附近にも有力なる部隊があつた。

然るに日本軍は一月下旬に至るや疾風電撃的に北進を開始し、同二十日には明光を陷れ、二十九日には池河驛を、二月一日には臨淮關の嶮を拔き、翌二日には定遠、鳳陽、蚌埠を猛攻强撃して之を奪取し、同三日には懷遠を攻略して各々城頭高く日章旗を飜へし爾後暫く此處に駐まり新作戰を準備して五月に及んだ。

以上の行動間、十二月二十日より三月三日迄に於ける大小の戰鬪回數約三十回、敵に與へた損害は遺棄屍體のみにて約八千三百餘に達した。

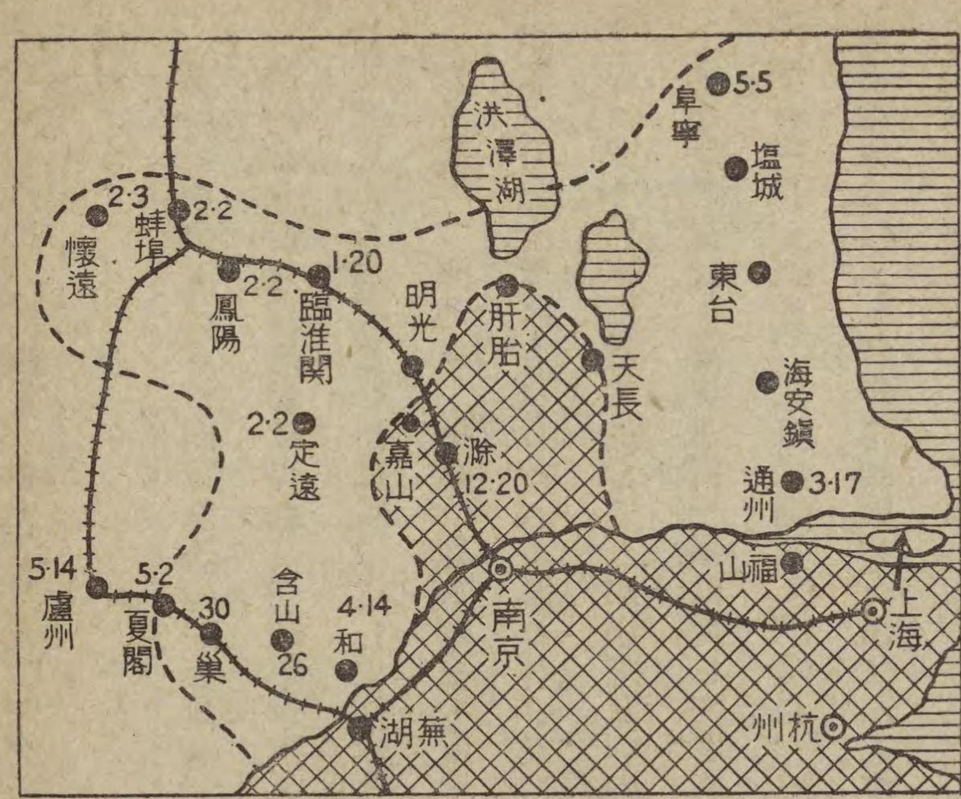
【海岸方面軍の狀況】 三月十七日日本軍の一隊は海軍と協力して福山附近より揚子江北岸に上陸し直ちに北進を開始し、江蘇省の要衝たる通州を攻略し、又他の一隊は十八日崇明島に上陸して之を占領した。

通州攻略の部隊は波竹の勢ひを以て海安鎭、東台を陷れ四月二十七日には鹽城を奪取し、五月五日には阜寧を

みにて約八千三百餘に達した。

【海岸方面軍の狀況】 三月十七日日本軍の一隊は海軍と協力して福山附近より揚子江北岸に上陸し直ちに北進を開始し、江蘇省の要衝たる通州を攻略し、又他の一隊は十八日崇明島に上陸して之を占領した。

通州攻略の部隊は破竹の勢ひを以て海安鎭、東台を陷れ四月二十七日には鹽城を奪取し、五月五日には阜寧を占領して海州方面に向ひ作戰した。此の行動は徐州會戰に多大の貢獻を爲した。



江北方面軍の狀況

【巢縣占領】 又他の日本軍の一隊は南京の上流に於て海軍と協力の下に和縣附近に敵前上陸を敢行し、大なる抵抗を受くることなく四月十四日午後早くも和縣を占領し、直ちに西進を續け二十六日和縣西北方約九里の含山に迫りて一擧に之を陷れ、更に猛進して三十日巢湖東岸の要地たる巢縣を占領し、次いで五月二日には夏閣を、同十四日には盧州を陷れた。

以上の如く江北に於ては百五十里の正面に、右からすれば海岸線、津浦線、淮南線（盧州—巢縣）の三方面に各々一軍を進めたのであるが、其の中堅は云ふ迄もなく中央の津浦線に沿ひ北進する所謂江北軍なるものであつた。

【江北方面軍の北進】 此の軍は大體に於て三縱隊とな

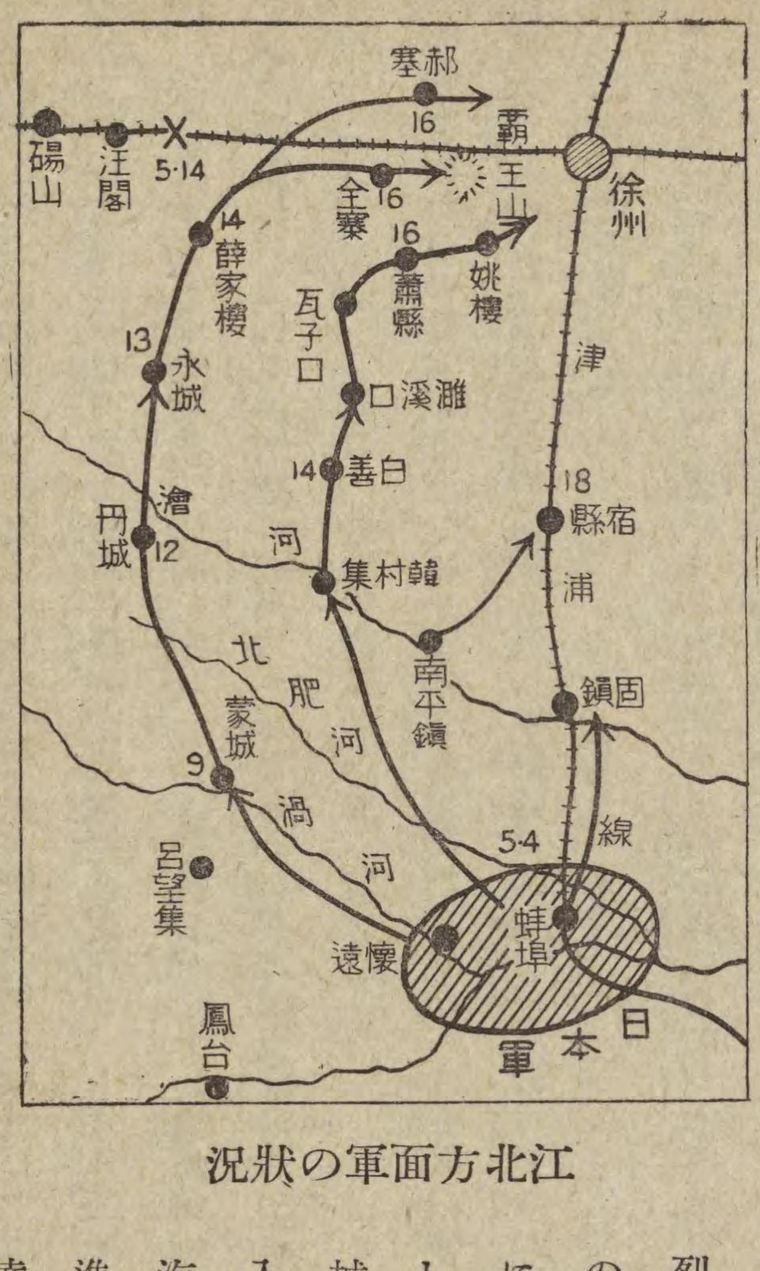
り、右縱隊は津浦線を、中央縱隊及び左縱隊は其の西方地區を迂回して徐州の西方に向つた。先づ中央の隊より述べよう。

其一　中央隊は五月四日怒濤の如き感激を以て淮河北岸を發し北肥河に沿ひ果敢なる北進を開始した。淮河以北の地は進むにつれて、敵軍が到る所に陣地を設けて猛烈な抵抗を試み、戰線は次第〳〵に擴大されて行く。しかも只見る平野は荒涼として伸びるに任せた麥だけが蓬々と繁つてゐる。そして猛烈な驟雨が日に何回となく襲つて來ると、道路は忽ち膝まで沒する程の泥濘となつてしまふ。そして日が照り出すと、急に溫度が昇つて、百三十度にもなると云ふ蒸し暑さで、迚も日本などでは經驗することの出來ない苦熱である。それで軍のトラックや戰車は迚も進むことが出來ないので、わざと道路を避けて麥畑の中を進軍して行くと云ふ有樣である。

途中此の隊は一部隊を南平鎭に出して右方を警戒せしめ主力を以て北進を續け韓村集附近に於て澮河を渡り、十四日白善を拔き、更に北進して濉溪口、瓦子口を占領し十六日蕭縣城內に突入して敵を屠つた。此の時恰も同城西南方地區より我が包圍圈を脫出せんとする約一萬の敵を橫擊して多大の損害を與へ、更に姚樓の敵を擊破して徐州に向ひ前進した。又南平鎭に進出せる一隊は十八日宿縣を奇襲して之を占領した。

其二　左縱隊は同じく步武堂々懷遠附近より渦河の線に沿ひ猛進を始め、逐次敵陣を突破しつゝ五月九日蒙城（南北朝時代に後魏と齊と梁との激烈な爭奪した所で著名である。市街の周圍に深き濠あり壁の高さ約五間あるも大ならず、人口約五千、附近は古來匪賊の荒掠多き所としても有名である）を攻略した。此の時南方鳳臺方向より蒙城救援の爲め來襲せる敵の一軍を呂望集附近に迎擊して之を潰滅せしめ、更に鋒を北に轉じて十二日丹城を陷れ、此の日早くも鬼部隊長の率ゐる戰車鐵牛部隊は敵の大據點と賴む永城の東門に殺到した。此の時敵は幅

（南北朝時代に後魏と齊と梁との激烈な爭奪した所で著名である。市街の周圍に深き濠あり壁の高さ約五間あるも大ならず、人口約五千、附近は古來匪賊の荒掠多き所としても有名である）を攻略した。此の時南方鳳臺方向より蒙城救援の爲め來襲せる敵の一軍を呂望集附近に迎撃して之を潰滅せしめ、更に鋒を北に轉じて十二日丹城を陷れ、此の日早くも鬼部隊長の率ゐる戰車鐵牛部隊は敵の大據點と賴む永城の東門に殺到した。此の時敵は幅三十米の濠を挾み、高さ十五米の城壁から機關銃、手榴彈を猛烈に亂射して來たが、我が鐵牛隊は少しも萎まず、城壁に向ひ一列横隊の陣形を取り、各車、大日章旗を揭揚して物凄い體當り戰法を取り、遉がに堅牢を誇る城門をメリ〳〵と粉碎してしまつた。此の猛烈な肉迫戰に、敵は一時巨獸を襲ふ數萬の蜂のやうに群り鬪つたが、遂には潰亂に陷り約二千の屍體を殘して後方に敗走した。斯くて蔣介石ラインの一大要地永城は日本軍の手に落ち、十三日歩兵隊が入つて之を占領し、快速鐵牛隊は更に隴海線遮斷の重大任務を佩び疾風の如く北進し、十四日午後三時半遂に隴海線上に達し碭山東方四里にある汪閣東方の鐵橋



江北方面軍の狀況

此の頃より敵は全線をあげて退却を開始（百五十米の長さ）を爆破して眞二つとなし隴海線を完全に遮斷した。

せるものゝ如く徐州附近は大混亂を呈するに至つた。

左縱隊の主力は永城占領後直ちに北進して途中劉汝明軍を擊滅し十四日薛家樓附近に達し、更に一部を以て隴海線を遮斷すると共に、主力を以て同線南側地區を東進し、十六日全寨、郝寨南北の線に進出し、更に當面の敵、張自忠軍及び中央軍約二個師を擊滅しつゝ急進し、十七日徐州西方約二里半にある覇王山の陣地に達して之を猛攻奪取し、そして徐州城に突入したのであるが、之は後段徐州陷落の條に於て詳述する。

其二　魯西方面軍の進擊（五月）

魯西方面からの日本軍は三つに分かれて前進した。其の一は中間の濟寧から、其の二は濮縣附近からの黃河渡河部隊、其の三は夏鎭から微山湖を渡つた部隊であつて、其の一、其の三の部隊は徐州に向つたが、其の二の部隊は開封方面に向つた。

【濟寧からの前進部隊】　五月九日濟寧附近に待機してゐた日本軍は行動を起し、先づ敵の第一線を突破し、十二日には大義州を奪取し續いて十四日金鄉、魚臺の堅陣を陷れ勝に乘じ隴海線に向ひ進擊し十七日舊黃河の線及び唐塞に據る有力なる敵を擊破して同地を占領し、更に碭山東方地區に於て敗走する敵大部隊に殲滅的打擊を與へ、次いで徐州に向ひ前進し、十九日徐州西北方九里山の堅壘に據る敵を攻擊し、次いで徐州に突入するのであるが、之は後述に讓る。

【黃河渡河部隊】　黃河北岸地區に待機中であつた日本軍は、濟寧方面から鄆城附近に出でたる部隊の掩護により五月十二日濮縣南方地區より黃河を渡河するのであつた。此の鄆城部隊は十二日鉅野西方地區を南進、十五日城武附近に於て約三千の敵を擊破し、然る後內黃方面に前進して同方面の部隊と協力した。

るが、之は後述に讓る。

【黃河渡河部隊】 黃河北岸地區に待機中であつた日本軍は、濟寧方面から鄆城附近に出でたる部隊の掩護により五月十二日濮縣南方地區より黃河を渡河するのであつた。此の鄆城部隊は十二日鉅野西方地區を南進、十五日城武附近に於て約三千の敵を擊破し、然る後內黃方面に前進して同方面の部隊と協力した。

十二日の夜半午前一時頃である。月は大陸の中天に高く照り映え、支那三大河の一なる黃河は千古の歷史を秘めて悠々と流れ、月光が漣に碎けて雄大なる夜景を展開してゐる。今しも渡らんとする堂々たる大部隊は林の如く河の北岸に整列し、皇軍の英名を中原の野に永久に殘さんと、此の美しき月光を仰ぎ、無限の感激を抱いて互に用意の水盃を交はすのであつた。やがて工兵隊の渡河準備は完了し、數十隻の渡河船は舳を並べ既に敵を壓する如く浮んだ。決死の白襷隊の第一梯群は靜肅に乘り込み、サツと黃河の流れへ滑り出た。鞭聲肅々夜過河、曉見千兵擁大牙。その昔武田信玄の陣營を一擧に突いた上杉謙信の、川中島の大合戰も正に斯くやありけんと、そぞろに胸を躍らす許りであつた。一列橫隊の軍船はエンヂンの爆音と共に、恰も水中を躍る黑龍の如く銀波を飛散せしめつゝ中流へと進んだ。

今や寂として一言も發せず、全員悉く肅々只大空には月光のみが、いまや興亡四千年、支那の歷史を大轉換せんとする此の世紀の進軍を知るや知らずや、只皎々と照つてゐる。之に對し敵は油斷してゐて知らないのか、あるひは知つて態と引寄せて猛然と射擊する策略か、不氣味な程、射擊もせず敵陣亦寂としてゐる。川幅は約一千米、水の深さは三米、やがて漠然と敵岸の見える頃、始めて敵方より數發の銃聲起り、次いで非常呼集の喇叭が慌だしく鳴り響いた。此の時の有樣を支那軍の參謀が書いた手記によると、

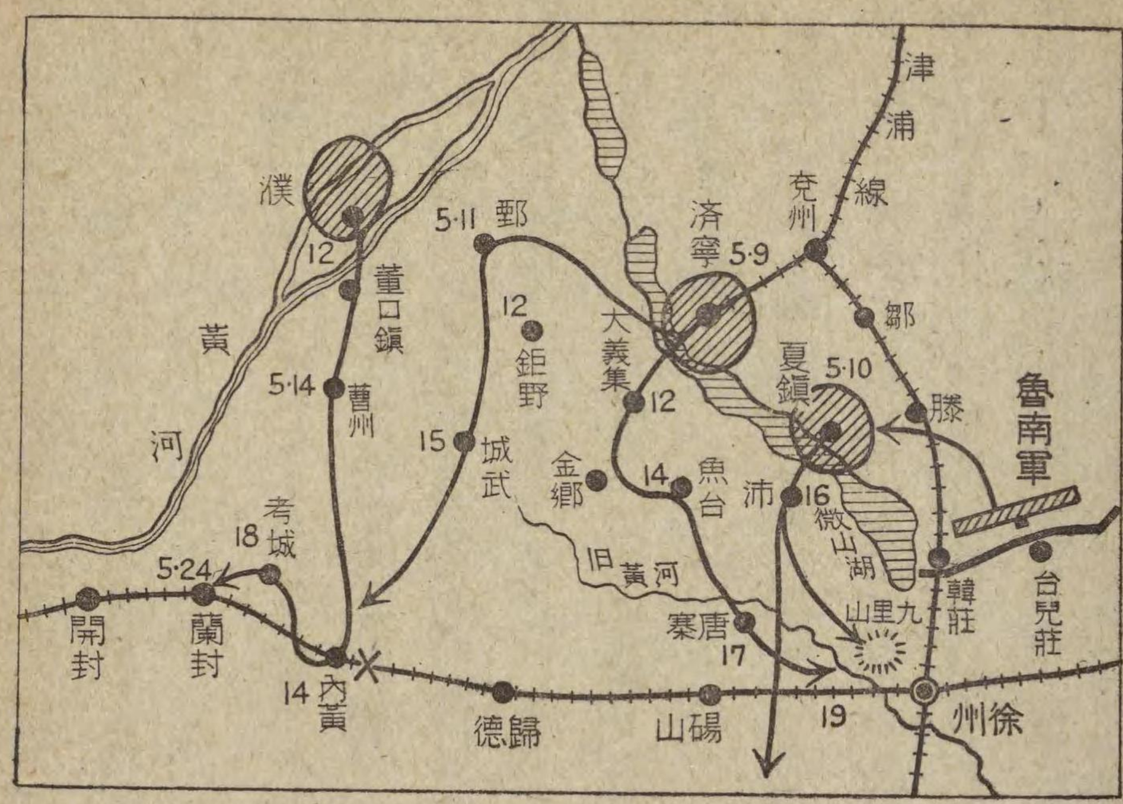
「支那軍は毎日毎晩、何時日本軍が渡河するか知れぬと云ふので、不眠不休の警戒に努めてゐた。すると何時までたつても日本軍が攻めて來ないのに安心して其の夜はぐつすりと深い眠に落ちてゐたのである云々。」

そこへ突然日本軍の來襲で周章狼狽一齊に猛射を始めたのである。之により忽ち曉闇の靜寂は破れたが、日本決死隊は一發の應射もせず、敵彈雨飛の中を矢の如く船を敵岸に飛ばし、一同銃劍を月光に光らせつゝ軍船を捨てゝ水中に躍り込み、隼の如く敵陣目がけて猛進し一氣に斷崖を乘り越えて勇敢猛烈なる突擊を以て遂に敵陣を奪取し、後岸に待機しある本隊に電氣信號を發した。午前二時十分出發してから僅か十分間の神速果敢さを以て一千米の大黃河を渡河征服したのである。此の渡河に、戰死者八、負傷者五十二名を出したゞけで未曾有の大成功であつた。第一次世界大戰の塞耳維戰場に於て獨軍がドナウ河の敵前渡河に約六萬の犧牲を拂つた。之には勿論兵力の差異もあるが、比較研究の要がある。

以上決死白襷隊の渡河成功により、本隊は直ちに敵前渡河を敢行し對岸にある李必番の率ゐる中央軍一個師を擊破しつゝ午前中に全部の渡河を完了し、怒濤の如く敵陣に雪崩れ込み、河岸の要害、董口鎭を陷れて十三日夕刻曹州城外に殺到した。

曹州は山東省西境の要衝で、商震の率ゐる二個師約七千の敵が頑强に抵抗してゐた。此の地は山東、河南、河北、陝西に通ずる大道を扼するので、春秋戰國時代既に曹の國都となり會盟、征討殆んど寧日なきほど、多事な地として知られ、秦末に於ては項羽、劉邦の激戰地となり、唐代には黃巢の賊に荒された。清時代には軍事的要地として曹州鎭總兵官を設け軍隊を駐屯せしめた。一八九七年獨逸宣教師が此の地の暴民に殺害され、それが獨逸の膠州灣占領、次いで租借の動機となつたので著名であ

北、陝西に通ずる大道を扼するので、春秋戰國時代既に曹の國都となり會盟、征討殆んど寧日なきほど、多事な地として知られ、秦末に於ては項羽、劉邦の激戰地となり、唐代には黃巢の賊に荒された。清時代には軍事的要地として曹州鎭總兵官を設け軍隊を駐屯せしめた。一八九七年獨逸宣教師が此の地の暴民に殺害され、それが獨逸の膠州灣占領、次いで租借の動機となつたので著名である。城壁の周圍約二里、人口約六萬あり、古來黃河の氾濫に惱まされ、人情慓悍、匪賊の巢窟である。



魯西方面軍の狀況

日本軍は五月十四日拂曉決死工兵隊の勇敢なる爆破によりて北門を破り、次いで步兵決死白襷隊の突擊を以て之に侵入したが、敵兵頑强に抵抗するので、遂には砲兵陣地を何一つ隱蔽物のない城壁近くの畑の中に設け、敵砲火の集中下に血煙を吐いて猛射を續け、其の彈下に更に猛烈なる突擊を敢行して遂に同夜之を占領した。敵は參謀長黃景東の戰死を始め約三千の屍體を戰場に遺棄して潰走した。

日本軍は次ぎ〳〵と息つく暇も與へず敵を急追し、騎兵隊は十四日夕には早くも內黃附近に挺進して隴海線を爆破し、主力部隊も之に續いて、十七日同線上內黃の西北方圈頂附近に達して完全に之を遮斷し、徐州方面よりの退路を

斷ち、十八日には考城附近に於て敵の一師を粉碎し又漢口及び鄭州方面よりの敵の增援大部隊、戰車を伴ふ約三箇師の敵と遭遇して之に殲滅的大打擊を與へて蘭封方向に擊退し、更に敵の背後を攻擊して二十四日蘭封に入城した。

蘭封は一名東昏と稱へられた。是れ秦の始皇帝、東巡の時此處に至つて四面昏霧、進み得なかつた故事に因む。此の地黃河に近きを以て屢々氾濫に遭ふが、交通上の便あるにより南北抗爭すれば兵火必ず見舞ふの地として著れ、最近の第一、第二奉直戰爭、國民軍の北上等に際しても有力な兵爭地であつた。城廓の周圍約一里、人口約一萬である。

蘭封を占領せられた敵は、開封より屢々恢復攻擊を企てたが悉く失敗に歸した。此の事に就いては徐州陷落後の狀況の章に讓る。

【夏鎭からの西進部隊】　臺兒莊附近大運河北岸地區に在つた日本軍は主力を以て五月十日頃より逐次秘密裡に夏鎭附近に轉進し十五日夜半を以て微山湖橫斷を開始した。同湖は我が琵琶湖より數倍の大さである。此の夜恰も盆の如き滿月が背後の泰山々脈の連峯上から昇りかけたと思つたのも束の間、忽ち大陸の空に墨を流すが如き黑雲が一點、二點と現はれたと見るや、颯と風が起り、大粒の雨が襲來し、しかも稻妻が湖上に渡ると思ふと、天地を憾かす如き雷鳴が響いて來た。此の雷鳴は天佑なるぞと將兵の勇氣は百倍し、定められた鐵舟、木舟にそれ〴〵打ち乘り舳を一齊に並べて西に向ひ進航した。

絕えず光る稻妻は靑白く閃きて、櫓を漕く勇士の姿が、現はれては隱れ、隱れては又稻妻の光りに浮び、實に形容の言葉もない壯觀であつた。對岸の敵陣から射ち出す機銃が狐火の如く明滅し、其の中を軍船は矢の如く走

天地を憾かす如き雷鳴が響いて來た。此の雷鳴は天佑なるぞと將兵の勇氣は百倍し、定められた鐵舟、木舟にそれ〴〵打ち乘り舳を一齊に並べて西に向ひ進航した。

絶えず光る稻妻は青白く閃きて、櫓を漕く勇士の姿が、現はれては隱れ、隱れては又稻妻の光りに浮び、實に形容の言葉もない壯觀であつた。對岸の敵陣から射ち出す機銃が狐火の如く明滅し、其の中を軍船は矢の如く走り、殆んど犧牲者を出さずに、對岸に上陸し、息つく暇もなく翌十六日沛縣附近の敵を攻撃すると共に一部を徐州方面に進め、主力は沛縣を完全に占領したる後、南方永城方面に前進した。

其三　徐州陷落（五月十九日）

日本軍の巧妙なる作戰に氣づかず、支那軍は徐州東北方の臺兒莊附近魯南方面に主力約二十箇師の大軍を集結し、他方面の微山湖西方（魯西方面）に約九個師、徐州南方に約十個師を配置し、今度こそ日本軍を殲滅し呉れんと、其の優勢を恃み、い〻氣になつて浮かれてゐたのも束の間、前述の如く五月初旬、西から、南から、北からと犇々と詰め寄せた精鋭日本軍の、神出鬼沒の猛電擊に、嗚呼、遂に支那軍は自らの危險を感じ、五月十四日頃より全線を擧げて退却を開始した。しかも此の十四日には隴海線は三箇所に於て日本軍によつて破壞遮斷せられ非常な混亂を呈するに至つた。其の十四日に於ける兩軍の狀態は挿圖の如くであつて、支邦軍は既に包圍されてゐたのである。

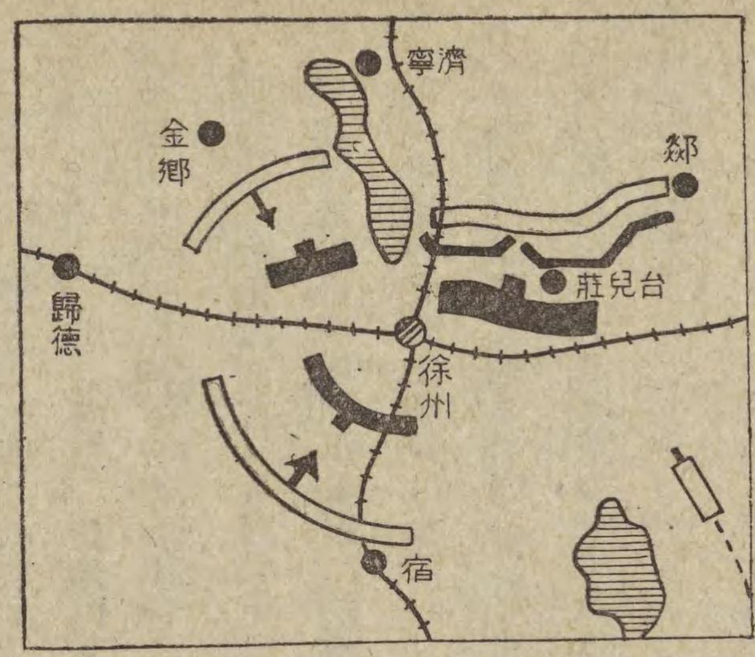
敵軍退却の兆あるや、日本軍は益々奮進し、其の海陸の荒鷲飛行隊は猛烈なる爆彈攻撃を徐州城並に其の附近の敵堅陣に行ひ到る處黑煙朦々、此の物凄い空の猛爆擊に呼應して、地上部隊の攻撃も亦實に壯絶を極めた。

戰陣に功名を競ふは、日本軍人の古來尙ぶ所の武德であれば、江北方面からの北上軍と、魯西方面からの南下

軍と、臺兒莊方面に一時守勢に立つてゐた魯南軍とは孰れも皆、徐州城の一番乘りを心に期して勇躍奮進するのであつた。然るに其の一番乘りの榮冠は北上軍の兩角部隊の手に握られたのである。今其の戰況を概說するであらう。

【北上軍の徐州進入】　北上軍の右軍にして濰溪口を通過して前進した部隊は徐州西方約二里にある敵陣地の司令塔とも云ふべき覇王山要塞の敵陣に猛突擊を行ひ、五月十七日の正午頃遂に山頂を占領し、直ちに其處に放列を布いて敵が最後の陣地と賴む臥牛山や徐州城內に向ひ猛烈なる集中砲火を打ち込んだ。

同じ北上軍の友軍にして永城を通過して前進した部隊は鐵道線路に沿ひ徐州に向ひ東進して臥牛山の堅塞に迫り猛攻强擊して十八日夕刻遂に同山を占領した。此處より徐州へは約一里であれば大混亂に陷つてゐる徐州城內を足下に見下ろして巨彈の雨を容赦なく落下させた。



徐州の包圍
（五月十四日頃）

明くれば五月十九日、之ぞ世界戰史に不滅の金字塔を刻んだ日である。此の日早朝から猛烈なる突風吹き卷くり、黃塵萬丈、寸前暗黑を極めた。所が此の突風は我が陣地より徐州へと吹き付ける追風であつて、我軍に取つては天佑の神風であつた。此の機を利用して突つ込めと精鋭は喊聲を揚げて城內目がけて殺到して行つた。

此の時先陣を承はつたのは有名な岩仲戰車隊であつた。同隊は去る十四日碭山の東方に於て隴海線上の鐵橋

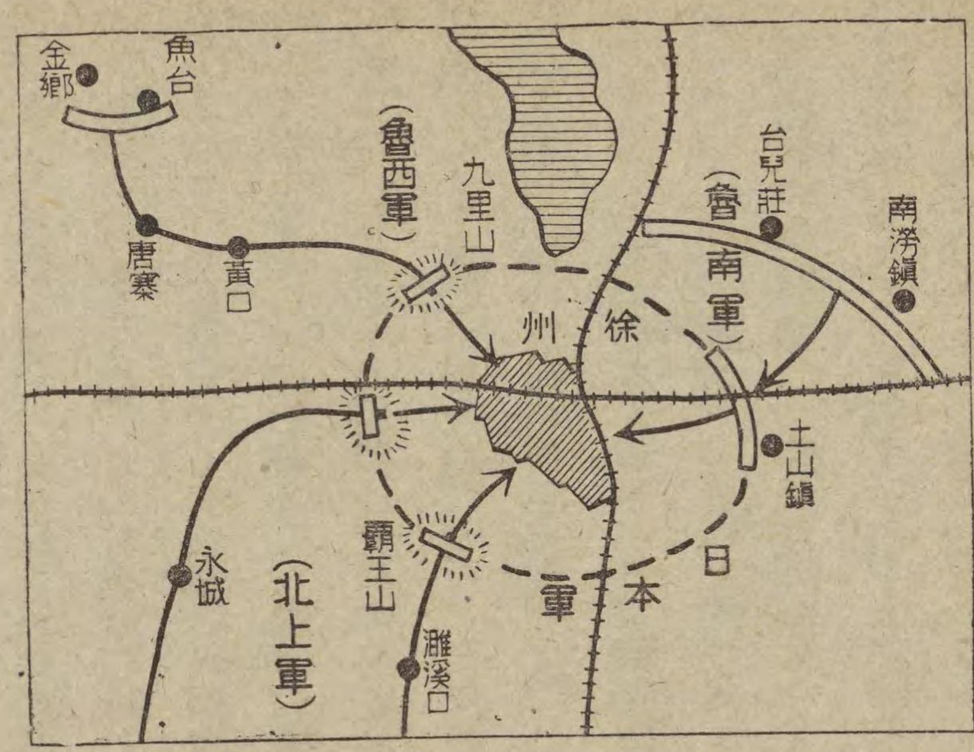
明くれば五月十九日、之ぞ世界戰史に不滅の金字塔を刻んだ日である。此の日早朝から猛烈なる突風吹き卷くり、黃塵萬丈、寸前暗黑を極めた。所が此の突風は我が陣地より徐州へと吹き付ける追風であつて、我軍に取つては天佑の神風であつた。此の機を利用して突つ込めと精鋭は喊聲を揚げて城內目がけて殺到して行つた。

此の時先陣を承はつたのは有名な岩仲戰車隊であつた。同隊は去る十四日碭山の東方に於て隴海線上の鐵橋（長さ百五十米）を眞二つに爆碎した殊勳部隊である。今又此の重任に當り將兵の勇氣百倍し、十九日の午前八時、臥牛山麓を猛進し、幅六米の石疊の街路を徐州城の西郊に向ひ驀進又驀進した。其の後から水も漏らさぬ協同作戰をもつて、進擊して行く突擊步兵決死隊と、城門破壞用の爆彈を抱いた工兵決死隊とが、其の石疊道を續進した。やがて徐州の西門が嚴めしく眼前に現はれて來た。

然るに、何事ぞ其の西門の大扉が開いてゐたのである。是れ敵は餘りの周章狼狽に、最後の固めである大扉を閉めることを忘れてゐたのだつた。此の時岩仲戰車隊長の激勵物凄く、戰車隊を先頭に城內に突入した。後れじと續く兩角部隊の決死の肉彈突擊隊は敵兵の必死となつて打ち出す彈雨の中を潛つて、五月十九日午前九時十分西門に突入して城頭高く感激の日章旗を樹立し、引き續き城壁を奪ひ返さうと、果敢に反擊し來る敵の大部隊と又もや幾たびか屍山血河の激戰を繰り返して之を擊攘した。斯くして徐州城は玆に陷落したのである。

【魯西軍の徐州進入】 魯西方面よりの南下軍は五月十四日金鄉、魚臺の線に於て大いに敵を破り、十七日には碭山東方地區に於て敗退する敵の大部隊に殲滅的打擊を與へ、今田戰車隊を先頭とし唐寨から黃口に至る附近一帶、敵の死屍累々として凄慘を極める其の中をグン〳〵東進し、十九日徐州北側に在る九里山の敵陣攻擊となつた。

九里山は、なだらかな丘陵で全山はトーチカと塹壕で覆はれ、到底彈丸だけでは占領出來るものではない。蔣介石は「徐州は絶對に陷落せぬ」と豪語したのも決して彼一流の强がりではない。それを日本軍の肉彈と忠勇義烈なる熱血とを以て攻略したのである。而して此の隊の徐州に入城したのは十九日の午後二時で、北上軍の西門占領後約五時間であつた。



徐州の陷落
(五月十九日)

【魯南軍の徐州進入】　臺兒莊北方の線に據り、巧みに敵を牽制抑制して、魯西、江北兩軍の包圍作戰を容易ならしめた魯南軍は、五月十四日其の正面に在る敵退却の兆あるや、直ちに追擊に轉じ、其の挺進騎兵隊は此の日直ちに新安鎭附近に突進して隴海線を爆破遮斷した。

主力は十五日臺兒莊及び南澇溝に亙る線を占領し、十九日には敵を追擊して土山鎭を略し、二十一日徐州に進入した。

以上の如く鮮血と哨煙に包まれ、阿鼻叫喚の巷と化した徐州は陷落して、屍體の累々たる死市となり、敵は算を亂して西方の沼澤地或は南方の山地帶或は東南の錯雜地へと潰走した。之に對し日本軍は毫も急追の手を緩めず、各方面に分進して殲滅的打擊を與ふるに努めた。

た。

以上の如く鮮血と哨煙に包まれ、阿鼻叫喚の巷と化した徐州は陷落して、屍體の累々たる死市となり、敵は算を亂して西方の沼澤地或は南方の山地帶或は東南の錯雜地へと潰走した。之に對し日本軍は毫も急追の手を緩めず、各方面に分進して殲滅的打擊を與ふるに努めた。

此の歴史的徐州攻擊の進展中、我が北支派遣軍の最高指揮官寺内大將及び中支方面最高指揮官の畑大將は何れも征馬を陣頭に進め或は飛行機に搭乘して空より晴の戰線を視察して忠勇なる將兵の勞苦を慰めると共に奮鬪を激勵された。而して輝く徐州入城式は五月二十日威武堂々と行はれ、兩軍司令官の歴史的會見は同二十五日徐州の西飛行場で行はれた。此の日大陸の大空は此の意義深き會見を祝福するが如く、青一色に晴れ渡りて、一片の雲さへ止めず、五月の爽かな風が今日だけは匂やかに香ほり、空も野もひとしほ榮光に躍動し、明朗感激の調は天地に溢れた。やがて寺内大將の發聲で「天皇陛下萬歳」を三唱し奉りて衆皆之に和し、次いで戰歿勇士の英靈を弔ひ、今後の武運を祈つて乾杯し、茲に永久に記念さるべき會見が目出たく終了したのである。此の間各方面に於ては一分一刻の休みもなく猛追擊が行はれたのである。

第三節　徐州攻略後の狀況

徐州會戰に敗れた支那軍は、其の一部を以て我が包圍圈の間隙を突破し、歸德以西地區に退却したが、其の他の大部は退路を遮斷せられ、逐次我が包圍圈内に窘縮せられて徐州東南方地區に於て大混亂を起し、四分五裂して脱出せんと奔命するのであつた。唯此の會戰中、漢口方面より增派せられた黄杰の指揮する第八軍は其の前進

途中に、魯西及び徐州方面より敗走し來る味方の諸軍を合し、其の兵力約十個師を、歸德を中心として曹縣、單縣、碭山に亙る地區に集結せんとしたのであるが、之も亦後に述ぶるが如く忽ち擊破せられたのである。

【日本軍の追擊】 日本軍の追擊は大體に於て曹州、金鄉、沛縣、徐州、臺兒莊の五方面から行はれた。

其一　曹州方面からの日本軍は五月二十四日蘭封を占領したが、蘭封附近より約十個師の敵は逆襲に轉し來りて其の勢ひ頗る猛烈であつたが、日本軍の反擊に會ひ、六月一日頃より逐次西方に退却した。日本軍は之を急追して一擧開封に迫り同地を占據せる商震軍に對し攻擊を開始したが、敵の抵抗意外に頑强であつた爲め、更に步砲の密接なる協同の下に猛烈な攻擊を續行し、六月六日開封を陷れ、翌七日一部を以て中牟を占領し、又騎兵部隊を以て十日鄭州南方の京漢線を爆破遮斷した。

其二　濟寧方面からの日本軍は新來の部隊を以て金鄉を經て南進し五月二十六日虞城を占領し、二十九日歸德を攻略し、徐州方面より來れる部隊と相合して隴海線の南側を追擊前進し、六月三日杞縣を攻略し引續き西方に敵を急追し四日尉氏を略し、其の一部は同地西方十吉米の馬家砦を占領した。

其三　五月十九日微山湖西方沛縣を占領した部隊は其の主力を以て敗敵を急追して永城方面に進擊し、二十二日永城を占據し爾後同地附近に於て約一萬の敗敵を攻擊して多大の損害を與へ、二十五日朝、永城附近を出發、三十日亳縣を東、南、西、三方面より包圍攻擊して三十一日完全に之を攻略し、又一部を以て三十日渦陽を占領した。

亳縣を占領せる部隊は更に追擊を續行し、六月一日には鹿邑を三日には拓城を攻略し、一部を以て睢陽方向に前進した。

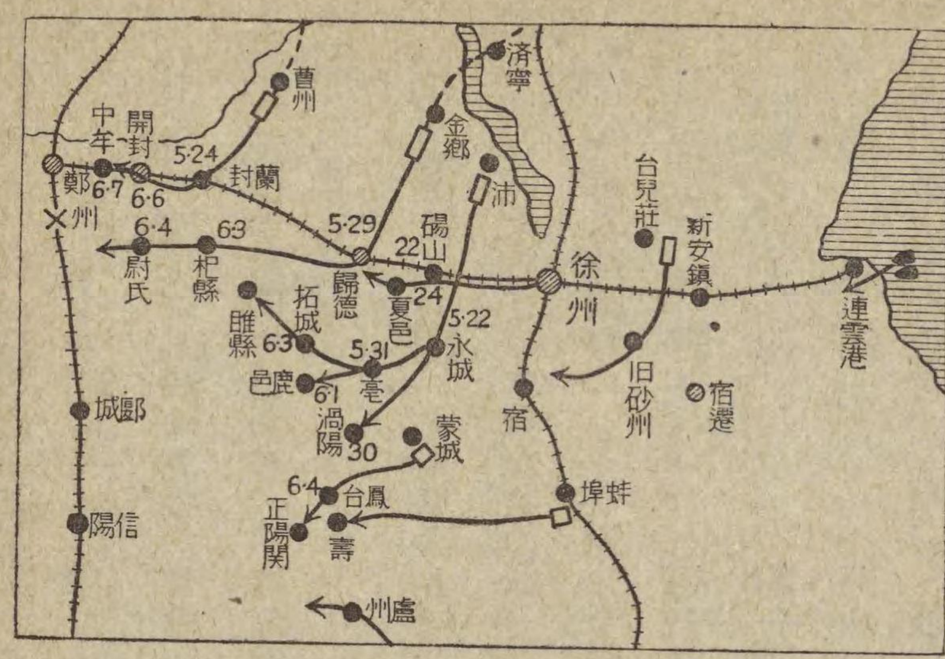
三十日亳縣を東、南、西、三方面より包圍攻撃して三十一日完全に之を攻略し、又一部を以て三十日渦陽を占領した。

亳縣を占領せる部隊は更に追撃を續行し、六月一日には鹿邑を三日には拓城を攻略し、一部を以て睢陽方向に前進した。

其四 五月十九日徐州に入城した軍の一部は更に前述した歸德附近に在る敵を撃滅する爲め、翌二十日徐州出發、隴海線に沿ふ地區を西進し、二十二日碭山附近に於て有力なる敵を撃退したる後、二十四日夏邑を占領し更に歸德を攻撃し、北方より來る友軍と協力して二十九日同地を陷れた。

其五 臺兒莊方面より追撃前進せる諸隊は宿遷北方地區より舊砂州附近に集結中の敵を掃蕩し、更に進んで宿縣東北方地區に混沌たる狀態を以て蝟集しある窮敵を猛撃して多大の損害を與へ、然る後逐次兵力を集結して爾後の行動に移つた。

以上五方面からの猛追撃により、徐州附近の敵は掃蕩されたが、尙ほ蒙城並に蚌埠附近に集結せる日本軍諸隊は六月四日より同六日の間に於て、其の西方鳳臺、壽縣にある約四個師より成る廣西軍を攻撃して之を西方に驅逐し、六月六日には正陽關を占領して、其の南方にある廬州との連絡を圖り、南京に通ずる津浦線の西側を安全



徐州攻略後の追撃

ならしめた。尙ほ海軍は一部を以て五月二十日隴海線東端の海港である連雲港に敵前上陸を敢行し陣地に據り抵抗する敵を驅逐して附近一帶を占領し、其の方面にある我が陸軍部隊と連絡して殘敵の掃蕩に努めた。

此の會戰間殊に追擊に於て、日本軍の陸海軍に屬する空軍は或は黃沙を冒し或は雷雨を凌いて偵察に從ひ、或は地上部隊の戰鬪に協力し、敵陣地並に徐州附近一帶、其の他要地の重要軍事施設を猛爆して多大の戰果を收めた。

【徐州會戰の成果】 支那軍は各級指揮官の逃走、戰意の喪失により全く潰亂して敗走を續けたのであつて其の損害は明瞭ならざるも概ね次の如くである。

支那軍全損害	約二十五萬
遺棄死體	約十二萬
戰利大砲	約一百門
同　小銃	一萬八千挺
重輕機關銃	一千二百挺

其の他無數にして、支那軍は此の大打擊により戰力の恢復は當分至難と見られた。日本軍の損害は戰死約二千名、負傷者八千六百、合計約一萬であつた。

名、負傷者八千六百、合計約一萬であつた。

第四節　評論

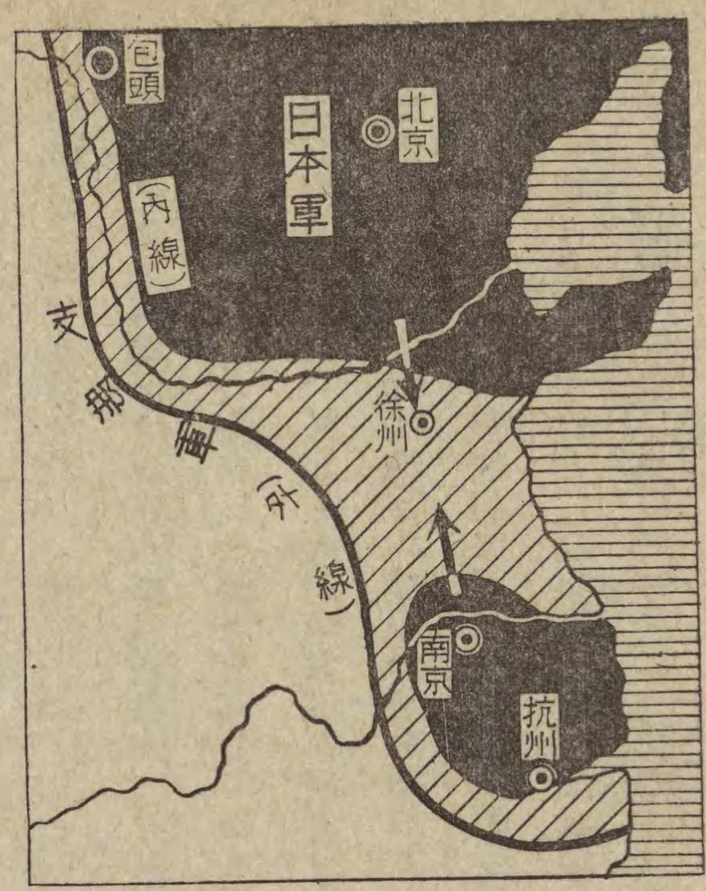
徐州會戰は政略上、戰略上、共に重大なるものがあつた。即ち政略的に於ては、北支政權と、中支政權とを一體化ならしむるの氣運を促進し、戰略的に於ては北支軍と中支軍との連絡を緊密ならしめ、以て津浦線を確實に掌握し得たことであつた。

北支と中支、南支とは地理的に、歷史的に、民族的に、元と〳〵相合はざる點が多い。それで今日まで、往々政治、經濟の上に於て分立した歷史を有つてゐる。北方族が北京に都すれば、南方人は南京や廣東に根據を置いて相對立するが如き。又北方人が南方族を弱者と侮れば、南方人は北方族を胡種なりと卑しむ等、同種同文とは云ひながら、心の底では相容れざる分子を持つてゐた。

それで今回の支那事變に於て、日本軍の優勢な爲め、支那側が蔣介石派と其の他の一派とに分かれ、此の一派は同じく親日を標榜すれど、北京に在る北支政權と、南京に在る中支政權との二つに分かれてゐた。親日派が此のやうに二箇所に分立してゐては、其の間隙に、敵の乘ずる所となりて離間せらるゝの虞があるので、早く此の二政權を一元化して親日政權の基礎を强固にするの必要があつた。

之が爲めには日本の北支軍と中支軍との連絡を圖るのが急務とされ、それで徐州會戰が起り、しかも其れが歷史的大勝利となつて玆に連絡が取れ、戰略的の成功を收めると共に政略的目的をも達することが出來たのである。

此のやうに戰爭の勝利は直ちに政略上の利益となることが多い。奈破翁が青年軍司令官として伊太利戰役に勝利を博した結果が、直ちに佛國革命政府の政略上に至大の好影響を及ぼしたことは其の著例として擧げることが出來よう。我が關ヶ原の戰の如きも亦然りである。



日支兩軍の大勢

【日支兩軍の作戰】　徐州會戰の作戰を廣義的に觀れば支那軍が外線に立ち、日本軍が內線に立つてゐるが、狹義的に觀れば之と反對に、日本軍が外線に在つて包圍作戰を取り、支那軍が內線に立ち徐州を中心に作戰した形である。然るに支那軍は緩慢にも廣義による外線作戰に出づることなく、日本軍に狹義による外線作戰の利を讓つたのは確かに一失である。

以上は單に學問上の內線、外線の利害問題であるが、又他の一方から論ずれば、日本軍は北支、中支の二作戰基地よりして徐州の敵を挾擊し得るの地位を占め、支那軍は徐州方面より北支、中支の二個所に分立してゐる日本軍を各個に擊破し得る有利な地位に在つたのでもある。

故に徐州會戰の運命を、日支兩軍の形勢や地位等からしてのみ豫め其の勝敗の數を斷ずることが出來ない。若しも一方が信玄、一方が謙信の如き名將であつたならば、此の會戰の結果が、どうなつたか分らないのである。川中島の戰に於て、謙信が、信玄の取つた挾擊作戰の裏を搔いて、信玄の旗本に斬り込み、之を蹂躙した戰法を、

ゐる日本軍を各個に撃破し得る有利な地位に在つたのでもある。

故に徐州會戰の運命を、日支兩軍の形勢や地位等からしてのみ豫め其の勝敗の數を斷ずることが出來ない。若しも一方が信玄、一方が謙信の如き名將であつたならば、此の會戰の結果が、どうなつたか分らないのである。

川中島の戰に於て、謙信が、信玄の取つた挾擊作戰の裏を搔いて、信玄の旗本に斬り込み、之を蹂躙した戰法を、若しも徐州の李宗仁が取つたならば、此の戰局は異なる結果を見たことであらう。然るに支那軍には謙信は無かつた。日本軍も亦それを見込んだのである。戰の勝敗は實に其の將帥の如何によつて決せられることが多い。故に兵書には「先づ敵將を知れ」と誨えてゐる。

日本軍の試みた徐州包圍作戰は、どこから見ても冒險作戰である。日本の中支軍が津浦線の西方地區から包圍部隊を大迂回的に挺進せしめた。南京と徐州間は百里である。此の間に於ける日本軍の配備は必ずしも强固でなく、寧ろ薄弱なものであつた。それにも拘はらず、此の大迂回挺進の放膽作戰を試みた所に、日本軍の敵軍を見縊つた所がある。見縊ると云ふよりは敵將を呑み込んだのである。敵將李宗仁は呑み込まれて作戰の手が痺びれた。斯くして勝敗の數は戰はずして既に決したのである。

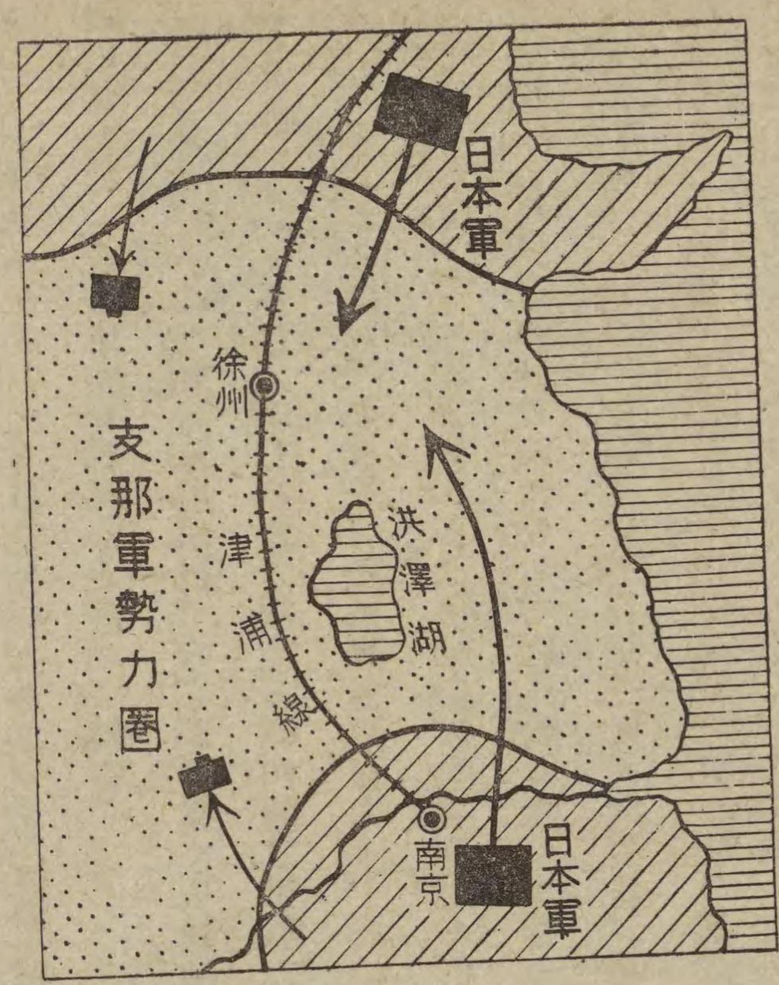
伊太利戰役に於て、奈破翁に呑み込まれた墺軍は、幾ら司令官を更へてもとう〳〵負け通しに負け續けた。日露戰爭に於ける露軍も亦此のやうなものであつた。戰の要訣は敵に呑み込まれぬことである。

普通の戰法からすれば、日本の中支軍は、其の一部を洪澤湖以西の地區に置きて左方を掩護せしめ、主力を以て同湖以東の地區卽ち海岸地區から徐州に向ひ前進するのが堅實な作戰と云へよう。何となれば、海上權を得てゐる關係上、此の作戰が容易に遂行し得られるのと、又斯くすれば、縱令徐州が取れなくとも、山東省方面にあ

る友軍と相連絡することが出來るからであつて、先づ定石的の作戰とも云ふべきである。

然るに日本軍は敵將李宗仁の腕前に對しては、以上の如き微溫的な作戰を取らずに、手つ取り早く、津浦線の西方より大迂回的な冒險作戰を取つても、大丈夫だと、算盤を彈いたのであらう。果して此の算盤は中つたのである。

しかし、日本軍が此の包圍作戰を强行するに當り、決して拔け目がなかつた。第一、此の包圍軍の行動を容易にする爲め、西方に對して盧州方面に一隊、蘭封方面に有力なる一隊を出だして、敵を牽制し、以て此の包圍軍の左側を掩護せしめ、尙ほ一部隊を、包圍軍の運動開始に先だち、海岸方面に出して、如何にも日本軍が此の方面から出動するかの如くに見せ掛けて敵を欺騙し、其の間に疾風の如く、包圍軍を挺進せしめたあたりは、實に神工的の作戰と云へよう。



徐州挾擊の假案

又臺兒莊に於ける日本北支軍が巧みに敵主力を誘致牽制した作戰工作は、啻に當面の敵を窮地に陷れたのみならず、それが又中支軍の包圍作戰を容易ならしめた主因ともなつたのである。

尙ほ魯西作戰に於て、一は以て徐州攻擊に向ひ、一は以て黃河を渡りて直ちに蘭封を突き、該方面に敵を牽制

作戰と云へよう。

又臺兒莊に於ける日本北支軍が巧みに敵主力を誘致牽制した作戰工作は、啻に當面の敵を窮地に陷れたのみならず、それが又中支軍の包圍作戰を容易ならしめた主因ともなつたのである。

尙ほ魯西作戰に於て、一は以て徐州攻擊に向ひ、一は以て黃河を渡りて直ちに蘭封を突き、該方面に敵を牽制して徐州の包圍作戰を容易ならしめたあたりは、實に机上の作戰を其の儘現地に施したるの妙あるを見る。

以上の如く日本軍の作戰は冒險であつたが、此の冒險をして成功せしめたのは、固より如上の戰略的工作の妙にも因るが、其の主なるものは大膽にして敏速なる行動と、將兵の志氣熾にして敵を呑むの慨があつたからである。つまり戰略には少しく無理の點もあつたが、戰術に於て到る處絕對的の優勝を占めたのが、全勝獲得の素因をなしたものである。

一方支那軍の作戰計畫を見ると、決して不合理なものではなく、單に形式からすれば上の部類に屬するものである。しかし其れは丁度繪に書いた餅の如くで實行の上に、一向其の效果を現はさなかつた。

それは何故かと云ふに、彼等の頭には「迚も日本軍には勝てぬ」と云ふ先入感を有つてゐたからである。故に如何に作戰のお膳立てがよく、配備が合理的であつても直接戰鬪に從事する將兵が弱くては勝利は得られなかつたのである。支那軍の將、李宗仁は廣西省第一の頭領で、幾多の戰歷を有する勇將であり、今回擢でられて此の大會戰の總帥に任じ、必ずや從來に於ける支那軍の不名譽を挽回して其の英名を轟かさんと期したるも、如何せん、其の手足たる將兵の劣弱なるに於ては敗れざらんと欲するも遂には及ぶことが出來なかつた。

故に支那軍の敗れたのは其の作戰計畫の罪にあらずして、其の戰鬪精神卽ち戰術的缺陷の致す所であると云ふ

べきである。古來戰略の不備は戰術を以て補ふことは出來るが、戰術の缺陷は戰略を以て補ふことが難かしい。奈翁は戰略の名手でもあるが、戰術は、より以上の達人であつた。故に彼の勝利は殆んど皆此の戰術的の優勝によつて獲られたものである。手足の無い哲人は恐ろしくないが、手足のある狂人は恐ろしい。

【徐州の古史】　徐州の古戰史で有名なのは項羽と劉邦（後の漢高祖）との決勝戰たる垓下の戰である。垓下の地點に就いては色々の說があるが、徐州の西南約三十里亳縣、鹿邑附近のやうである。今其の大體の戰況を述べて見る。

支那の周末は春秋戰國の時代となつて亂れ、戰國七雄を生じたが、其の中、秦の始皇帝に至つて六國を滅ぼし、天下を統一した。然るに秦の二世皇帝の代となるや、其の暴政に對し、四方に革命軍起り、楚の項羽、沛の劉邦等も亦其の一黨の領袖であつた。項羽は徐州附近を經て北の方、河北省に進み連戰連勝、秦の名將章邯の大軍と鉅鹿に戰つて大いに之を破り、勝に乘じ西方に途を轉じ秦の地盤たる陝西省に向ひ前進中、かの有名な鴻門の會が開かれたのである。

先きに項羽の北方に進んだ時、沛の劉邦卽ち漢高祖は西方に進んだ（沛縣は徐州の北方近くに在り、今回の徐州會戰に日本軍の占領した所である）然るに此の西の方は秦軍の配備が薄弱であつたので、高祖は案外容易に前進が出來、遂に秦の都咸陽を陷れ、自ら關中の王と稱した。

之を聞きたる項羽は、弱將劉邦に先んぜらたるを憤り、彼を倒さんと四十萬の大軍を以て鴻門に陣し、使を以て劉邦を自分の陣營に呼びつけた。劉邦は怖れて逃げんとしたが、張良の計に聽きて鴻門の會場に至り、將に殺されんとする危機を、張良の智と樊會の勇とにより僅かに身を以て遁れた。

進が出來、遂に秦の都咸陽を陷れ、自ら關中の王と稱した。

之を聞きたる項羽は、弱將劉邦に先んぜらたるを憤り、彼を倒さんと四十萬の大軍を以て鴻門に陣し、使を以て劉邦を自分の陣營に呼びつけた。劉邦は怖れて逃げんとしたが、張良の計に聽きて鴻門の會場に至り、將に殺されんとする危機を、張良の智と樊噲の勇とにより僅かに身を以て遁れた。

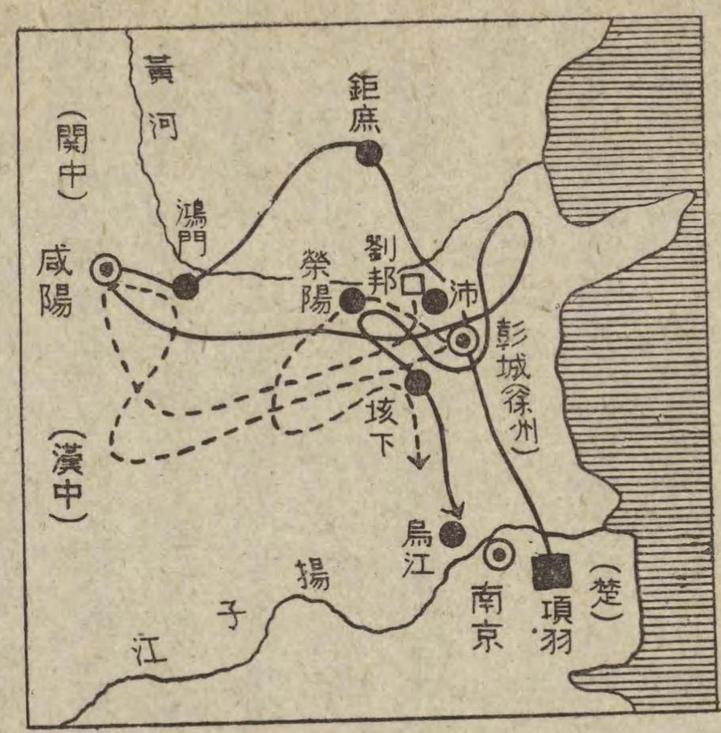
それより項羽は大擧咸陽を陷れ、掠奪暴行を恣にしたる後、彭城卽ち今の徐州に凱旋し、此處を都と定めた。劉邦は鴻門の會より遁走したる後、南方の漢中に退き徐ろに勢力を養ひ、屢々出でゝ項羽と戰つたが、常に敗る所となつた。されど天下の諸侯は漸く項羽の强暴を憎みて之に背き、劉邦に應ずるやうになつた。

其の內、山東省の北部に叛亂が起つたので、項羽は兵約五十萬を率ゐて之が征伐に出發した。之を見たる劉邦は好機乘ずべしと、項羽の留守せる徐州城を襲擊して之を占領した。項羽は北征の途中に之を聞いて大いに怒り、精兵三萬を率ゐて徐州に歸り、疾風迅雷の勢ひを以て劉邦の軍を擊破し追ふて滎陽卽ち今の鄭州附近に至り爾後久しく相對峙したが、其の內に媾和談判が成立し、滎陽以東を項羽の、以西を劉邦の勢力範圍と定め、項羽は兵を引いて垓下に至り陣した。

然るに劉邦は張良等の勸めに從ひ、約を破りて垓下に在る項羽を包圍した。其の兵力約六十萬、項羽の軍は約十萬と號された。此の包圍戰は暫くの間續いた。包圍戰の無聊を慰むる爲めに、夜になると、思ひ〳〵に各兵士が、其の出身鄕土の俗謠などを歌つて樂しむのが例になつてゐた。

或夜項羽が、愛妃の虞美人と一緖に酒を飲んでゐると、左右の者は「敵陣の各方面から楚歌の聲が聞えて來る」と云ひ出した。楚は項羽の鄕土であつて彼の根據地である。其處の靑年は先きに項羽が革命軍を起した時皆彼に

馳せ參じた者である。然るに今は敵軍に寢返つたのかしら。項羽は半信半疑の態で、自ら戰線を視察して見ると果して四面の敵包圍陣から楚歌が聞えて來る。然かも其の歌はだん〳〵高まる許りである。



項羽と劉邦

流石英雄の項羽も、自分の鄕土の者まで敵に廻るやうでは最早駄目であると感じたが、さて果して楚國全體が予に背いたかどうか、一つ此の敵圍を脫出して楚國に至りて之を檢し、出來得れば擧兵再起の道を講ぜんと決し、玆に最後の訣別の宴を開いた。

項羽は虞美人を常に從へて愛してゐた。又騅と名づける駿馬に常に騎乘してゐた。今や圍を脫するには騅の厄介にならねばならぬ。騅に一と度び跨れば虞とは此れで別れねばならぬ。恐らく永遠の別れとなるかも知れぬ。此れを思ひ彼を思ひては、何とも云はれぬ氣持がした。

酒宴が始まつた。歡樂極つて哀情生じ、項羽自ら一詩を作つて歌つた。

力山を拔き氣世を蓋ふも
時利あらずして騅逝かず
騅逝かず、奈何にかすべき
虞や虞や汝を如何にせん

力山を拔き氣世を蓋ふも
時利あらずして騅逝かず

騅逝かず、奈何にかすべき
虞や虞や汝を如何にせん

此れが垓下の歌と稱せられるもので、後世の英雄が敗北して最後の破局に歌ふ歌となつてゐるものである。項羽は大聲もて之を二、三回歌つた。すると虞美人は平素の幸愛に對へ、かねて項王を激勵せんと欲し、自ら一詩を作り相和して歌つた。

漢兵已に地を略し
四方に楚歌の聲あり
大王の意氣盡き
賤妾何ぞ生に安んぜん

項羽は虞美人が此處で別れても己れと死を俱にする心意氣あるを聞いて思はず泣いた。涙は數行下つた。戰に死するも戀に生きた氣がした。やがて項羽は騅に跨り、八百餘騎を從へ、深更圍を破つて南東に駈け出した。漢軍は項羽ともあらうものがマサカそんなに、あつさり投げ出すとは思はなかつた。それで夜明け頃に始めて、それと察して追擊に移つた。

項羽は逃げ走ること約百里、南京の少し上流、揚子江の北岸烏江と云ふ河畔に於て、急追せられて遂に自刄した。虞美人は敵兵の爲めに殺されて、其の遺骸は烏江の北、定遠縣の山深くに葬られたが、誰が手向けたのであ

るか、毎年春になると、其の墓畔には眞赤な芥子の花が咲く、芥子の花を一名虞美人草と呼ぶやうになつたのは、から云ふ譯からである。

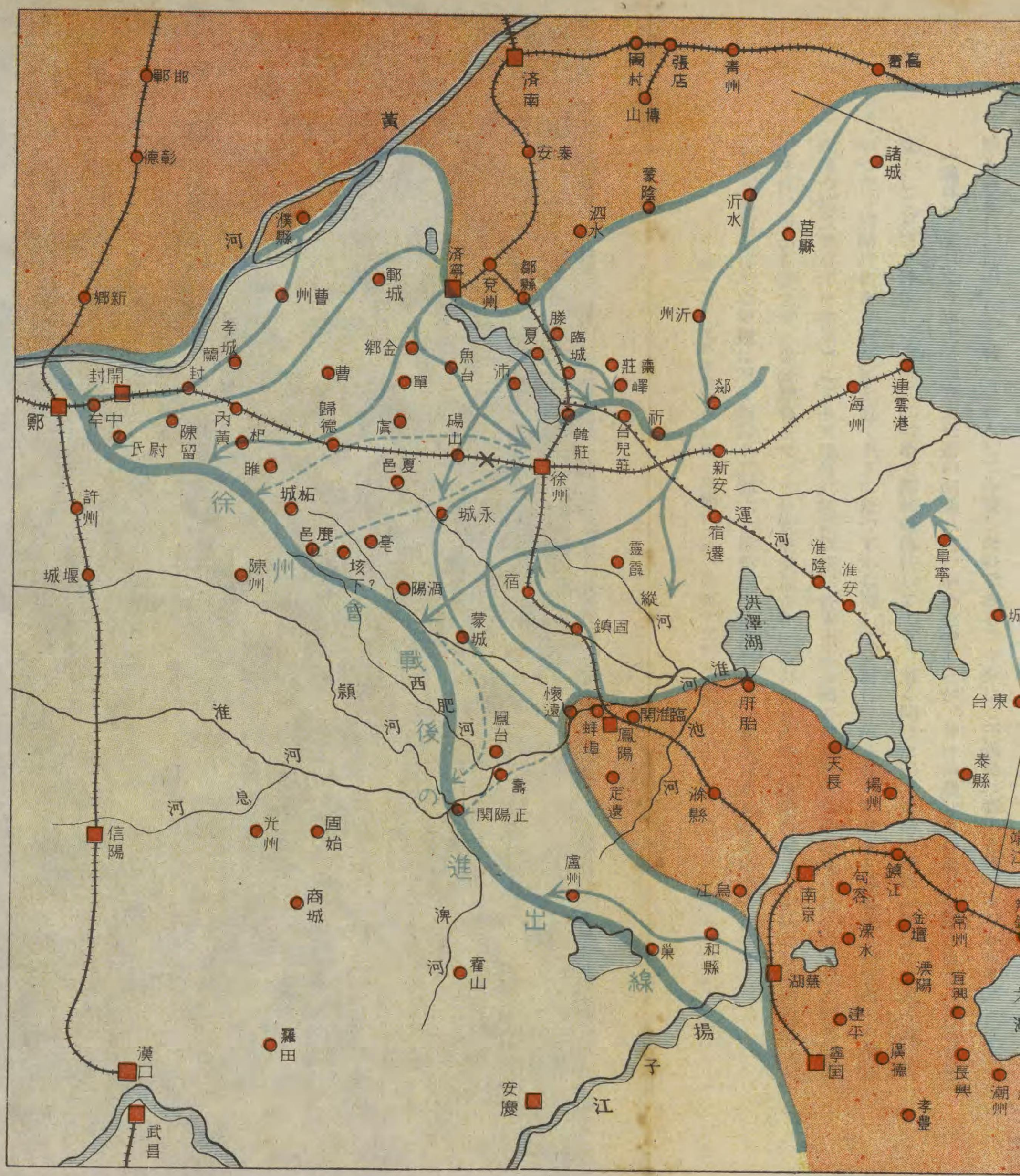
以上垓下の戰は後卷東洋史の漢楚戰爭の篇章に詳述するであらう。要するに徐州附近は古來、天下分け目の激戰が幾度となく、繰り返されて來た所である。今回日本軍が、此の會戰に勝を制し、徐州を通ずる津浦線に沿ふ一帶の地を占領して北支軍と中支軍とを連結することにより、日本軍の勢力範圍は非常に大となつたのは勿論、其の戰線は北は包頭から南は杭州に亙り、蜒蜿約六百里の長きに及び、しかも其の形は敵の本據武漢三鎭を抱擁するの隊勢を示した。勢ひ既に斯くの如し、武漢攻略戰の起る、作戰上固より當然である。

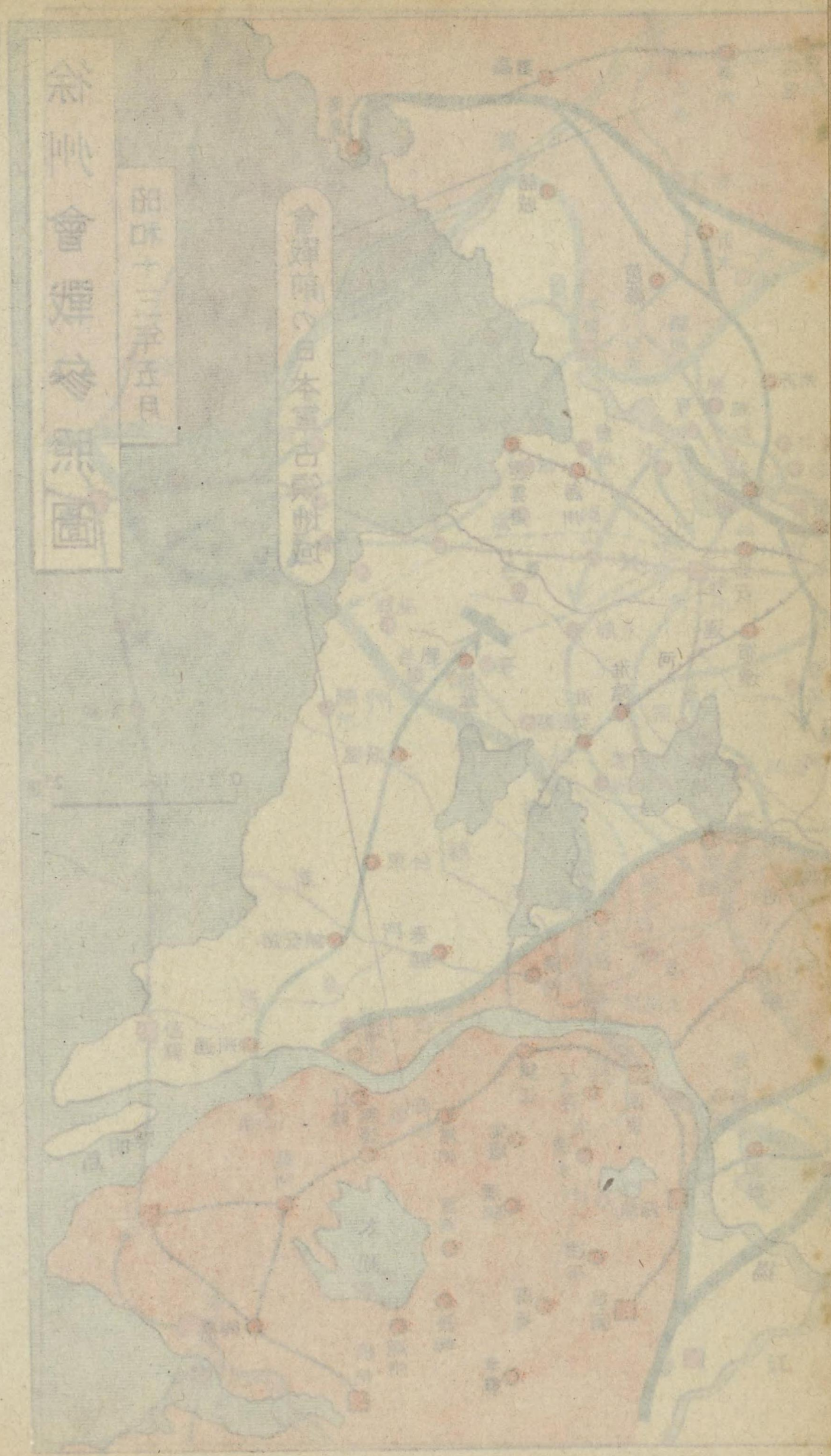
附圖第八

徐州會戰參照圖

昭和十三年五月

會戰前の日本軍占領地域


鄆邯
德彰
鄉新
黃
河
僕縣
州曹
鄆城
孝城
蘭封
封開
鄭
牟中
氏尉
陳留
內黃
杞
雎
許州
城堰
徐州
城柘
邑鹿
亳
陳州
垓下?
陽涸
會戰
西肥河
後
潁河
淮河
息河
信陽
光州
固始
商城
羅田
漢口
武昌
濟南
安泰
濟寧
兗州
鄒縣
滕
臨城
夏
沛
魚台
金鄉
單
曹
歸德
虞
碭山
邑夏
韓莊
徐州
莊
嶧
台兒莊
郯
祈
新安
宿遷
運河
淮陰
淮安
阜寧
泗水
蒙陰
沂水
州沂
莒縣
諸城
高密
青州
張店
博山
岡村
連雲港
海州
靈霞
縱河
宿
鎮固
蒙城
懷遠
鳳台
壽
關陽正
進出線
盧州
巢
和縣
蚌埠
鳳陽
臨淮關
定遠
滁縣
洪澤湖
盱眙
天長
揚州
泰縣
台東
江烏
南京
句容
溧水
鎮江
金壇
常州
湖蕪
溧陽
宜興
建平
寧國
廣德
長興
孝豐
湖州
安慶
揚子江


昭和十三年五月
金漢鐵道沿線圖
金漢會戰參謀部

丙　武漢攻略戰（昭和十三年六月—十月）

武漢とは世の所謂武漢三鎭のことである。

上海を遡ること、九百六十粁、我が約二百五十里、揚子江に漢水が合流してT字形をなしてゐる所に、漢口、武昌、漢陽の三つの都市が鼎の足の如く、一體をなしてゐる、之が武漢三鎭と云ふ名で呼ばれてゐる。

支那では昔から「武漢を制するものは中國を支配する」と謂はれ、又「兩湖稔ればる天下餓ゑず」と唱へられてゐるので、此の地は軍事上並に産業上重要な點を占めてゐる。それで古來此の地は英雄共の爭奪の巷となり、今回も蔣介石が此處を抗日戰の重點として作戰したのである。今少しく三鎭史の概要を述べるであらう。

【漢口】 漢口は今は水陸兩方面交通の四通八達の中心點であるが、昔は沼澤林叢の地で交通開けず、苗族の根據として夏汭（ビイ）と呼ばれ、秦時代に始めて漢族の移住してより、漸く開けたが、武昌や漢陽の繁榮には遠く及ばなかつた。清時代に至り巡撫司を置くやうになつてから俄かに發展し、一八五八年アロー號事件（前卷白人の世界政策の篇章並東洋史參照）により天津條約締結以來、資本主義諸國の利權獲得の中心地と化して列國の租界が設定され、而かも張之洞が湖廣總督となつて鋭意商業都市化に盡力したので、漢陽の工業、武昌の政治都市に對する商業都市としての發達は忽ち對岸の二都市を凌駕し、東洋のシカゴなる別名を得るに至つた。

長髮賊の亂及び民國十六年（皇紀二五八七年）の漢口事件、其の他大小の兵火に見舞はれたが、依然支那本部の中心點として其の成長過程にあつた所に、今回の支那事變勃發して歷史的戰火の焦點となり、日本軍の攻略する所となつたのである。人口約百萬、市街は城壁を有せず、長江に沿ひ細長く發達した近代的新興都市である。

【漢陽】 漢時代には安陸、東晉時代には石陽、南北朝時代に漢陽と呼ばれて今日に至る。昔し荊、鄂（湖北省を中心とする一帶の地方）の鎭護として軍事上、政治上に重要視せられ、南人之を得れば北方防禦の大據點としたこと、例へば三國時代に、吳の孫權が鄂城（武昌の東南約十五里の江畔）に都してゐた時、勇將魯肅をして漢陽に鎭せしめた如き、或は北人之に據れば武昌は終に自立するを得ざること、例へば唐代、漢陽の守將李恕が屢屢舟軍を以て對岸の鄂人を破つた如き、斯かる實例は枚擧に遑ない程である。近世に於ては長髮賊の亂に、慘澹たる兵禍を被むり、又宣統三年（皇紀二五六一年）革命軍と淸軍との激戰地ともなつた。

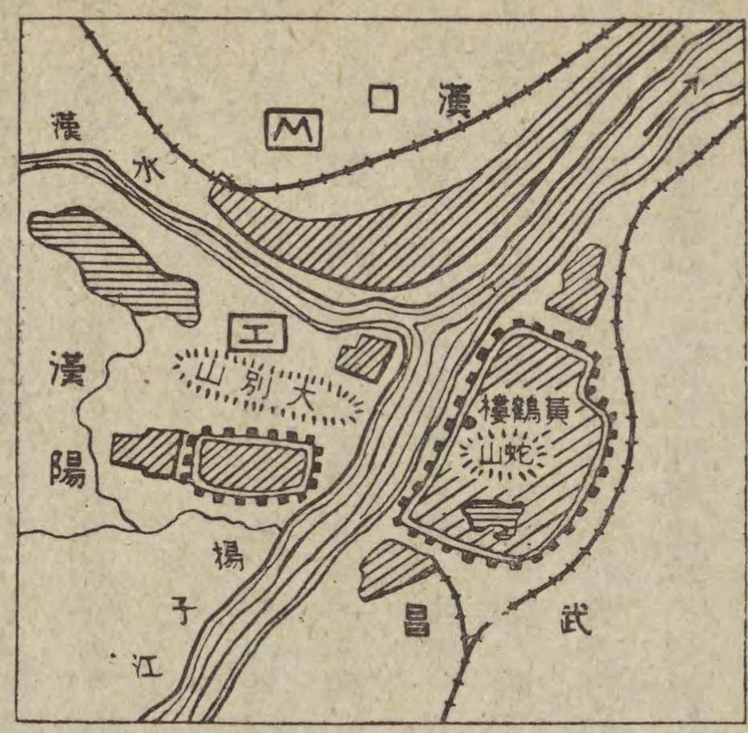
市の東北にある大別山は名山で一に魯山とも呼ばれ、三國時代、山上に魯山城が築かれ、爾來有事の際は重鎭となつた處。又附近には岳飛の戰つた古蹟もあり、尙ほ市の西方約五、六里に在る蔡店鎭は元の勇將伯顏が、漢陽攻略の作戰を議する爲め諸將を集めた處である。

漢陽は新興軍需工業都市で、漢冶萍公司の經營に係る製鐵工場を始め、兵工廠、火藥廠などの大工場があり、使用職工約一萬、支那隨一の規模を有つものとして有名である。人口約十萬、城郭の周圍約一里、宋時代に洪水のために破壞したが、明時代に至り堅固に修築された。

【武昌】 漢時代には沙羨、三國時代には江夏、宋の鄂州、元の武昌として傳はつてゐる。古來險要の地として重視され、從つて亂世に際しては常に英雄の爭點となつた。卽ち後漢末の劉表は黃祖をして此の地を守らしめた

のために破壊したが、明時代に至り堅固に修築された。

【武昌】 漢時代には沙羨、三國時代には江夏、宋の鄂州、元の武昌として傳はつてゐる。古來險要の地として重視され、從つて亂世に際しては常に英雄の爭點となつた。卽ち後漢末の劉表は黃祖をして此の地を守らしめたが、吳の孫權の猛攻に會ひ陷落した。其の後孫權此處に築城して北方の魏に對し、前哨の任に當らしめ、自らは其の東南の鄂城に都した。宋の末期に蒙古の忽必烈、此の武昌城を圍んで一擧宋の社稷を覆へさんとしたが、憲宗の死により俄かに兵を引いたので、危く陷落を免れた。長髮賊（皇紀二五一三年）の亂に陸水からの攻擊を受けて一度陷落した以外、武昌は未だ曾つて揚子江對岸からの敵に陷れられたことは無いと云はれる程、長江を扼し得る軍事上の要地である。



武漢三鎭

宣統三年（皇紀二五七一年）十月には民國辛亥革命の本據となり、當初革命軍に不利にして淸軍の重圍する所となつたが、長江の險と、市中に在る蛇山とに據つて善く之に耐へ、十二月孫文が臨時大總統就任を宣言する迄固守し、安徽、江西省方面の革命軍をして十分活躍せしめる基となり、革命成功に資する所頗る大であつた。一九二六年蔣介石は北伐軍を率ゐ來り南方から武昌を包圍攻擊して大勝を博した。然るに今度彼は此處を死守せねばならぬ身とな

つたのは何んたる運命の輪廻であらう。

人口約八十萬、市街の周圍には約三里半の城郭を繞らし、商工の施設もあるが、概して政治的都市である。城内にある蛇山は其の昔對岸漢陽の東に在る大別山と連なつてゐたのを、禹が治水の爲め之を切り開いて長江の水を通ぜしめたと云ひ傳へられてゐる。かの有名な黄鶴樓は此の蛇山の長江に洗はるゝ絶勝の高臺に立つた三層樓であつたが、長髪賊の亂に破壞され、今は俗惡な赤煉瓦作りの測候所と化してゐる。左のやうな有名な詩が殘つてゐる。

昔人已に白雲に乘つて去る、此の地空しく餘す黄鶴樓、黄鶴一たび去つて復歸らず、白雲千載空しく悠々たり、晴川歴々漢陽の樹、芳草萋々鸚鵡の洲、日暮れて鄕關何の處ぞ是れなる、煙波江上人をして愁へしむ。

清末の傑物張之洞が湖廣總督として十餘年文化の施設に努力した所が此の武昌で、武昌大學は共産抗日學生の巣窟として有名である。それが今度の戰で日本軍の攻略する所となつた。

以上三鎭史の概要を述べたが、此の序に中部支那史の輪廓を附記して置く。

【中支那史要】　漢族が黄河流域に發展しつゝある間は、揚子江流域は苗族其の他の蠻人の地であつた。此の蠻人は上流地方のものを楚蠻と云ひ、下流地方のものを荆蠻と云つた。

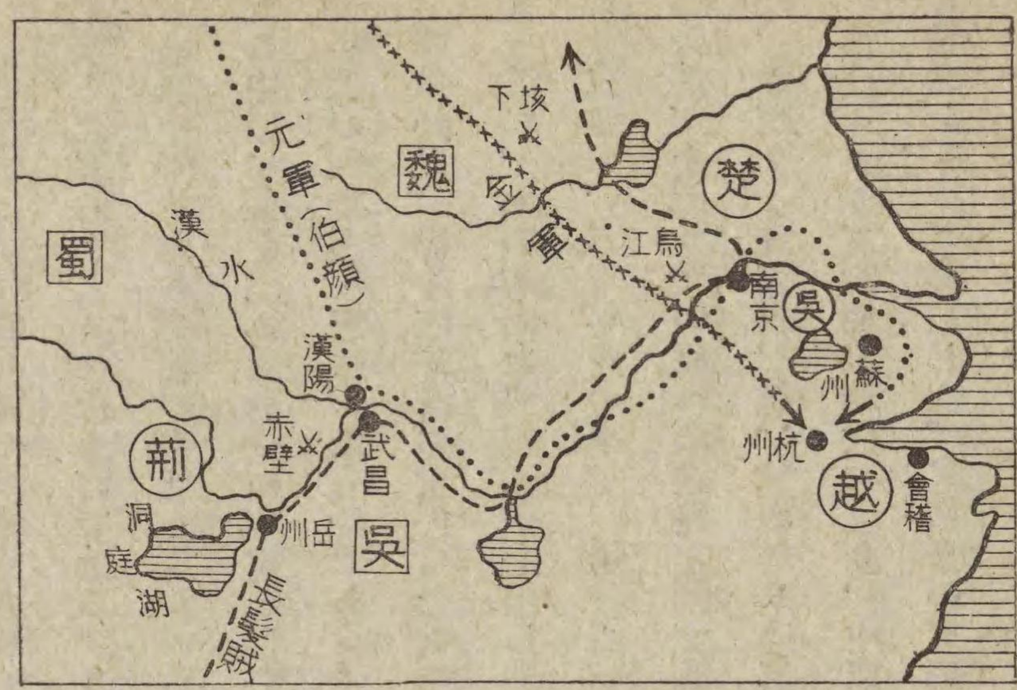
支那人の善く謂ふ所の「中原」とは概稱であつて地理的にはハッキリした線を引くことは出來ないが、大體今の徐州平地から西安に及ぶ地域のことで、此の地方は夏、殷、周の太古時代から漢民族の發達した據點で、支那文化の淵叢であり、政治、經濟の中心であつた。從つて此の地域よりも開けた沃野は支那には他に求められない。故に古くから「中原」と稱せられたものである。

支那人の善く謂ふ所の「中原」とは概稱であつて地理的にはハッキリした線を引くことは出來ないが、大體今の徐州平地から西安に及ぶ地域のことで、此の地方は夏、殷、周の太古時代から漢民族の發達した據點で、支那文化の淵叢であり、政治、經濟の中心であつた。從つて此の地域よりも開けた沃野は支那には他に求められない。故に古くから「中原」と稱せられたものである。

「中原」は漢民族自慢の地域であつて、彼等は此の中原以外を東夷、西戎、南蠻、北狄と稱した。前記の楚蠻、荆蠻も之から命名されたものである。されば此の中原は支那歷朝諸豪の爭奪の地域で、西安(長安)、洛陽、開封等は四千年前から歷朝の帝都となり、從つて中原卽ち天下の意味にさへ用ひられた。それで一世の英雄豪傑は皆此の中原に鹿を逐ふを男子の本懷としてゐる。かの「中原還た鹿を逐ふ、筆を投じて戎軒を事とす」と云ふ詩は善く此の氣持ちを表はしたものである。

春秋時代、揚子江下流の蠻民も漸次漢族文化に同化し、玆に吳(蘇州に都す)及び越(杭州附近に都す)の兩國を建て、かの有名な吳越戰爭を起して、「會稽の恥を雪ぐ」とか、「臥薪嘗膽」の故事を貽した。其の時代は今より二千七、八百年前の事で、隨分古いことである。吳王夫差の如きは漸次國力を揚子江の北方に伸張し、後世の大運河を作りて中原への進路を開き海軍の力を以て一方の雄たる實を示した。しかし戰國時代を經て漢代までは、まだ〳〵此の吳、越、楚あたりは眞の中國とは考へられず、依然半野蠻國と見られてゐたのである。

後漢末より三國鼎立時代に亙り、中原に於ける漢族同士の爭亂が北邊の守りを緩ふしたので、北狄は續々北支に侵入し來りて雜居した。又西晉の武帝は三國を併せて、兎も角、中原を統一したが、遊宴に耽りて武備を怠り、士人は又老莊虛無の說に溺れて淸談を好み、國事を憂ふるものなきに至り、匈奴の一族劉演は遂に山西省の



中支那歷史地圖

汾陽（太原の西南）に據り始めて北狄の國家を建てゝ漢王と稱した。之を契機として匈奴、羯、鮮卑、氐、羌の所謂五胡は相次いで中原に進入し來り、所謂五胡十六國の大爭亂となり相攻伐してゐる間に、漢族固有の西晉は遂に亡ぼされた。是れに於て漢人は長安、洛陽の都を棄てゝ南京（當時の建業）に東晉を建てたので、江北一帶の中原地方は悉く北狄の蹂躪に委して了つた。此の狄人の壓迫により漢族は揚子江流域に移り來り、茲に漢文化を形成するに至つたのである。

以後南北朝對立の形勢となり、隋之を統一し、唐之に次ぎ、茲に漢民族最高潮時代を現出し、長安卽ち西安に都して大いに其の勢力を發揮したが、其の次ぎの宋に至るや北方の金の爲めに、首府汴京（開封）を追はれて今の杭州に遷都し、續いて元の爲に亡ぼされた。其の後漢族の明國は都を北京に定めたとは云へ、支那文化の中心は遂に北方に非ずして長江流域の漢族に移り以て今日に及んでゐるのである。

以上のやうに揚子江流域は昔野蠻地であつたが、其の後、漢族の移住繁殖を見て其の文化の隆盛を來たし、從つて武漢三鎭の如きは、殊に軍事上重要な地位を占めるに至り、武漢を制するものは中國を支配すると云ふ語も生じて來たやうな譯である。

は云へ、支那文化の中心は遂に北方に非ずして長江流域の漢族に移り以て今日に及んでゐるのである。

以上のやうに揚子江流域は昔野蠻地であつたが、其の後、漢族の移住繁殖を見て其の文化の隆盛を來たし、

從つて武漢三鎭の如きは、殊に軍事上重要な地位を占めるに至り、武漢を制するものは中國を支配すると云ふ語も生じて來たやうな譯である。

それで蔣介石も北支を失ひ、上海、南京を奪はれ、徐州に敗れても、此の武漢三鎭の險要に據つて戰勢を挽回せんと、「保衞大武漢」のスローガンを掲げ、揚子江の南北に亙り廣大なる防禦線を張つて此處を死守するの態勢を取つた。日本軍は又徐州戰の勝に乘じ之を屠らんと、玆に歷史的な武漢攻略戰が起つたのである。先づ開戰前の狀況を述べるであらう。

第一節　武漢攻略戰前の狀況

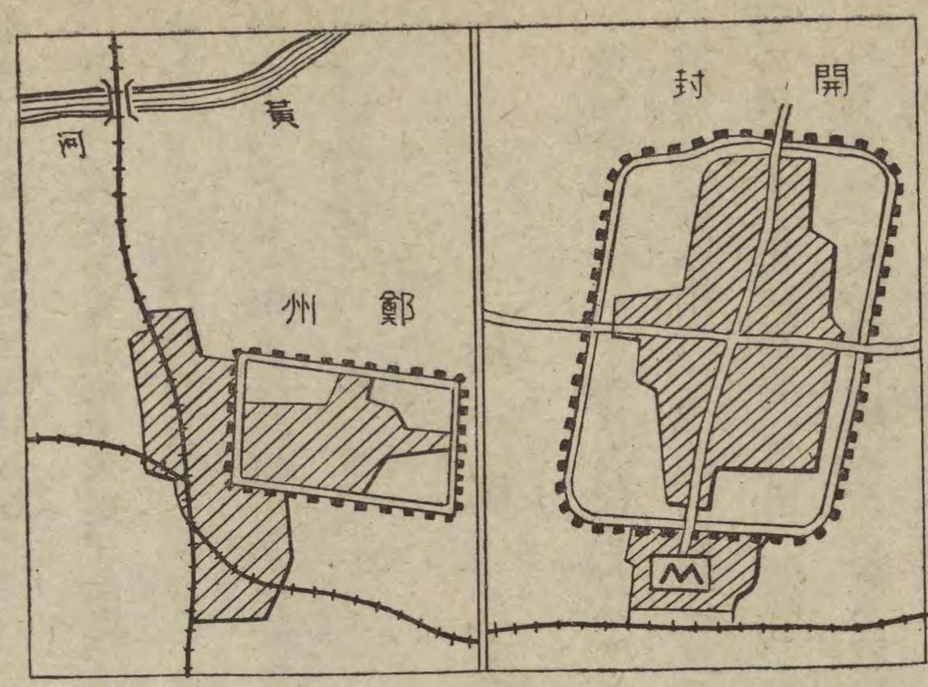
徐州會戰に敗れた敵は雪崩を打つて西方に潰走し、其の約十個師は鄭州西方地區に、約二十個師は京漢線西方の南陽及び葉縣附近に、約八個師は京漢線の東側周家口（商水附近）附近に夫々集結して部隊の整理、組織の回復に努むると共に新鄭、禹州、葉縣、商水附近に陣地を構築中である。

日本軍の一隊は隴海線に沿ひ敵を追擊し、六月七日には開封の西方中牟を占領し、又其の挺進部隊は六月十日、十二日の兩日に於て新鄭の南北二箇處に於て京漢線を爆破遮斷し、又他の一隊は尉氏及び太康を占領して鄭州に迫らんとした。

【開封と鄭州】 開封は河南省の首府で、隴海線の要衝に當り古來歷史的に著名な都である。戰國の時、魏は國

都を此處に營んで大梁と名づけ、よく秦に對抗する大國を形成したが、遂に秦將王賁の水攻めに遭つて陷落滅亡した。其の後の宋の太祖此の地に定鼎して中原に君臨し汴京と稱して極盛時代を現出した。然るに此の榮華も武備を怠つた當然の結果として西夏、遼、金等の北方異民族の爲めに侵略され、西紀一二三四年には蒙古の領域に入り數百年の間蠻風の洗禮を受けた。

しかし軍事的要地たるには古今變り無く、明代は勿論重兵を駐屯せしめ、清代にも駐防八旗兵を置き、民國になつてからは數次の內亂に爭奪が繰り返へされた。其の榮枯盛衰を見るに、自然的に黃河の氾濫によつて破壞されること十五回、大火に因つて全滅すること六回、外敵に依つて掠奪殺戮されること十一回、それにも拘はらず、人口は二十五萬で中原の商業貿易の中心となり、城市は黃河々床より低きため、其の氾濫に備へ、支那各地に比類なき高層堅固な城壁を廻らし、城周約三里に及んでゐる。今回の戰に支那軍は徐州敗戰後直ちに此の地に抵抗を試みんとしたが、日本軍の進擊疾く、遂に六月六日を以て陷落した。



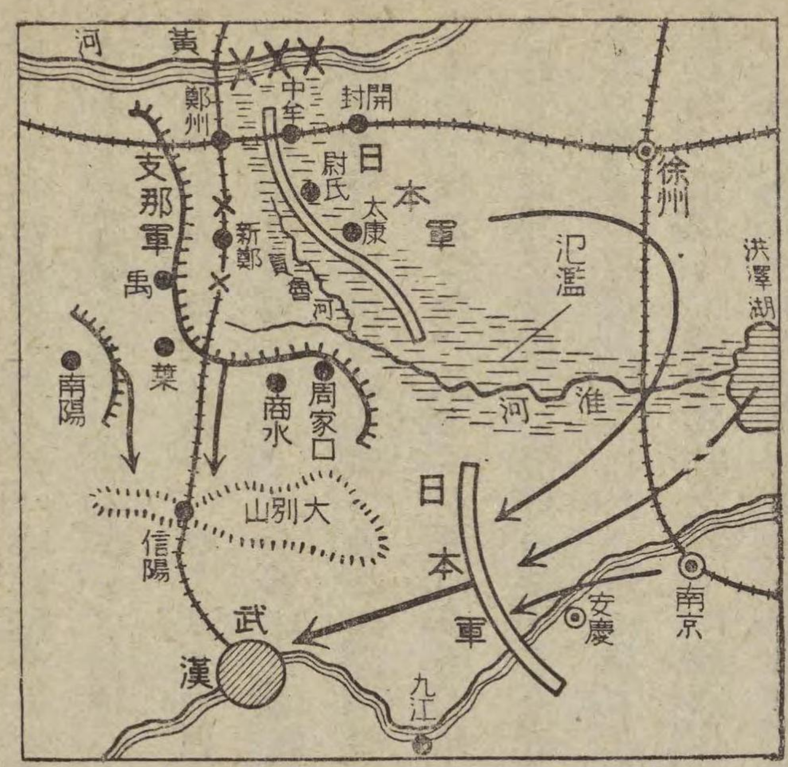
開封と鄭州

鄭州は昔の滎陽で、洛陽と開封とに挾まれてゐる爲め、既に春秋戰國時代より幾多の戰火を蒙むり、天下を爭ふもの皆此れに着目した。近世に至り、隴海、京漢兩線の交叉點となつてからは益々戰略的要點と化した。城郭

試みんとしたが、日本軍の進擊疾く、遂に六月六日を以て陷落した。

鄭州は昔の滎陽で、洛陽と開封とに挾まれてゐる爲め、既に春秋戰國時代より幾多の戰火を蒙むり、天下を爭ふもの皆此れに着目した。近世に至り、隴海、京漢兩線の交叉點となつてからは益々戰略的要點と化した。城郭は長方形にして周圍約一里半。北方三吉米に黃河の鐵橋あり其の長さ約三千米である。

其一　黃河の決潰



徐州戰より武漢戰

以上の如く日本軍は開封を陷れ鄭州に迫ると共に、南方揚子江方面に於ては安慶、舒城方向に進軍を開始して長驅武漢を衝かんとするの態勢を示した。若しも京漢線と隴海線の交叉點に當る要地鄭州が日本軍の手に歸せんか、武漢と西安との連絡を斷たれ、武漢の防衛は絶望となるを以て、支那軍は鄭州の防備に死物狂ひとなり、六月十一日遂に鄭州の北方三箇所に於て黃河の堤防を破壞し、黃河南方の平原を濁流の氾濫に委した。黃河は恰も增水期に當り、水勢强大にして「嵐の河」の本性を發揮し、決潰口の幅約四百米に及び、濁流滔滔として河南、安徽、江蘇三省の住民幾千萬に恐るべき水禍を與へた。

元來支那には堤防破壞の戰術が昔から存してゐる。史に依れば、宋の杜充は金の大軍來攻の時、黃河の堤防を決潰して其の進擊を阻んだ。今回蔣介石は杜氏の故智に倣つたものであらう。しかし此の暴虐な洪水戰術は一時は日本軍の進擊を阻止したものゝ、大局には影響しなかつた。日本軍は却つて此の氾濫を利用し其の東方地區より兵力を南方に移動し揚子江畔より大擧西方武漢の本據に向ひ驀進することが出來た。

若しも此の氾濫なくば、日本軍は京漢線と、其の東方地區と、揚子江の三方面から包圍的に武漢に向ひ得て、形の上に於ては如何にも理想的な分進合擊の作戰を爲し得るやうであるが、其の後方に對する顧慮は決して容易なものでなかつた。然るに氾濫のお蔭で此の後顧の患が省かれ、却つて僥倖に惠まれた譯である。

蔣介石は焦土戰術或は淸野の策に名を借りて氾濫の暴擧を敢てし、多數無辜の良民を犧牲に供し、桀紂も啻ならざる慘虐の行爲を逞うした。是に於て北京に在る臨時政府、南京の維新政府は、蔣政權の此の餘りな非人道的な行爲に憤慨して彈劾宣言を天下に發表した。其の要旨を述ぶれば、

「蔣介石の率ゐる國民黨が小兒病的亡國政策を執りて同文同種の隣人たる日本と戰禍を交へて鷸蚌の爭を起し、開戰三箇月を出でずして朔北の名城を委し、四箇月ならずして首都南京を失ひ、近くは徐州を守る能はず、武漢亦危地に瀕するや、禍心を抱く餘り、黃河を決潰して數千萬の生靈と財物とを犧牲となす、是れ釜を破り舟を沈むるの暴擧にして天人共に憎む所なり。近世長髮賊の亂は人民の元氣を凋落せしめ八十年に亙るも尙ほ未だ其の瘡痍を醫せず、今日の如き假に直ちに干戈を止むるも豈克く百年にして恢復し得んや。

黨軍は徒らに血氣の勇を恃みて豪語を放ち、政權を固守して自家の利を圖り毫も國家永遠の計を樹つるなし、淺薄の徒輩何んぞ善く政治を談じ得べけんや。東隣日本は切身の痛を以て義を扶け言を發し禹域の怪類

るも尙ほ未だ其の瘡痍を醫せず、今日の如き假に直ちに干戈を止むるも豈克く百年にして恢復し得んや。

黨軍は徒らに血氣の勇を恃みて豪語を放ち、政權を固守して自家の利を圖り毫も國家永遠の計を樹つるなし、淺薄の徒輩何んぞ善く政治を談じ得べけんや。東隣日本は切身の痛を以て義を扶け言を發し禹域の怪類を驅除しあり、彼の國には賢達の士尠なからず、黨軍の中に果して英雄あらば宜しく立所に矛を收めて自ら敗北を承認し、有能達見の士に國事を一任すべし。斯くして徐ろに收拾を圖らば中國の蘇生を期し得ん、若し尙ほ非望を覦覬し、負嵎の志を發揮せんも大勢の赴く處、今や全く望みなし、斯くの如きは過去の事實に徵して明々白々なり。吾等新政權樹立以來、日尙ほ淺しと雖も、金融日に固く人心日に安んず、黨軍の中には憂國の賢豪尠なからず、何すれぞ速に來りて力を戮はせ、俱に民人の爲めに計らざる。徒らに蔣政權に盲從するは天下に忠なる所以の道にあらず、云々」

其二　支那軍の防備

黃河堤防決潰に基く氾濫は開封と鄭州との間を、賈魯河を主流とする三條の水流に沿ひ東南流して淮河に合し、それより東して洪澤湖まで走り、最後に揚子江に合流するやうになつたが、狹い所で幅約一里半、廣い場所は湖のやうになつて了つたので、之を渡つて作戰するのは却々容易でない。日本軍としては、武漢攻略は、徐州會戰に引續いてすぐにも決行するつもりであつたらう。然るに此の氾濫により聊か遲延せざるを得なくなつた。されど、南方揚子江兩岸に於ては水陸共に著々武漢攻擊の歩を進めてゐたのである。

支那軍は氾濫によつて日本軍の急追を阻止し、退却する部隊を集結整理すると共に、揚子江の南北に亙つて廣

大なる武漢防禦陣地を作つた。

一、揚子江北方に於ては

本防禦線を左よりすれば南陽、信陽、英山、廣濟の線に設け、大別山々系の天險を利用して堅固に構築し、

前進陣地をば、北は信陽、商城、六安の線、東は霍山、桐城、潛山、黃梅に連る線に設けた。此の線によりて、武漢の北から東を揚子江岸まで、ぐるりと取り圍み、揚子江南の廬山々系の陣地と相俟つて武漢防衛の天然の要害を成形した。そして此の地帶に二十個師、十數萬、後には增强して四十個師、三十萬の大軍を配し、之が指揮を白崇禧に委ねた。

白崇禧は李宗仁と並んで廣西派の首領で、當時四十五歲の働き盛りであつた。彼は保定軍官學校を卒業し、蔣介石の北伐の際には國民革命軍參謀長として活躍し、蔣の下野の後は何應欽等と協力して革命軍の統制に當り、後ち蔣介石派と不和となるや、李宗仁と共に廣西省に立て籠り蔣に對する一敵國を形づくつた。有數な戰術家として定評がある。のみならず政治家としての手腕も凡庸でない。蔣介石との間に妥協が成つたが、蔣に取つては聊か煙たい位の外樣大名である。蔣が今回武漢防衛の一方の將として白を起用したのには、無論他の意味もあつたであらうが、如何に此の一戰を重大視してゐたかが判るのである。

二、揚子江南方に於ては

本防禦線とも云ふべきものを左よりすれば、大冶、陽新、瑞昌、德安の線に設け、廬山の險を利用し

ゐたかが判るのである。

二、揚子江南方に於ては

本防禦線とも云ふべきものを左よりすれば、大冶、陽新、瑞昌、德安の線に設け、廬山の險を利用して堅固なトーチカ陣地を形成した。之により江西省の首都南昌と武漢とを併せ防禦せんとした。

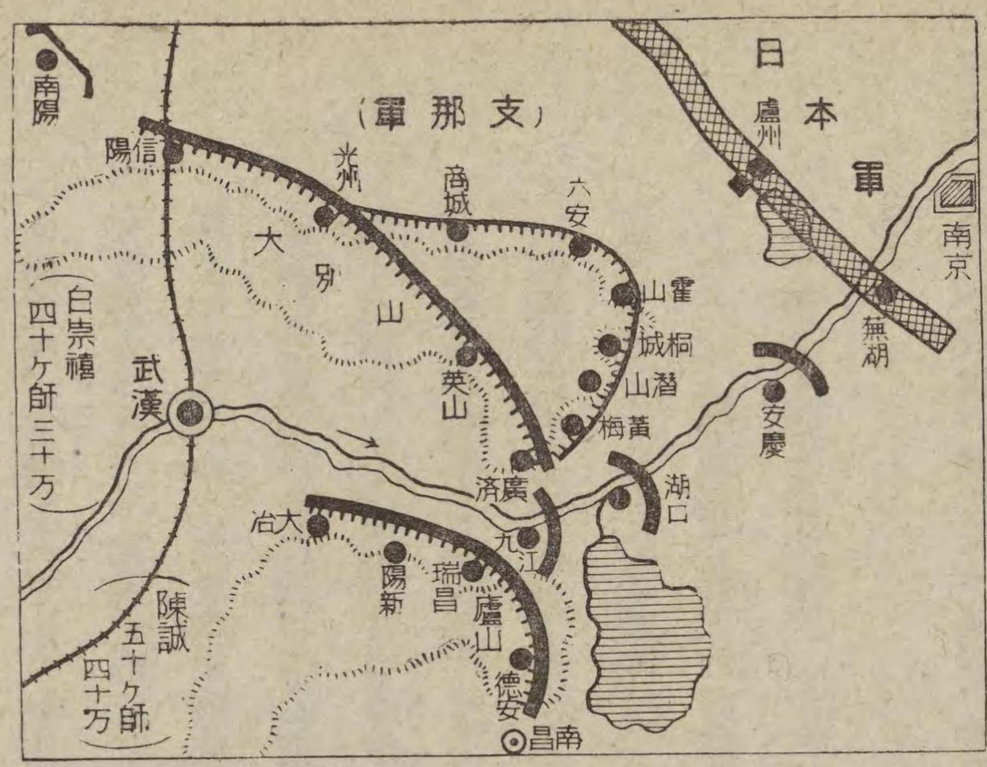
而して鄱陽湖の咽喉を扼する湖口を其の前進據點となして九江を掩護し、下つて安慶に及ぶ揚子江上には隙間もない位に機雷群を敷設し、且つ江岸の砲臺堡壘の防備を堅固にした。そして此の地帶に、四十個師、二十數萬、後ち增强して五十個師、四十萬の大軍を配し、しかも其の主力は蔣介石直屬の精鋭なる中央軍を以てし、そして之が指揮を陳誠に任じた。

陳誠は蔣介石の片腕であり且つ蘇聯派の巨魁である。當時四十二歲の壯年で、保定軍官學校を出て直ちに有名な廣東の黃埔軍官學校教官となり校長蔣介石の信任を得、爾來蔣の股肱として重きをなしてゐた。支那事變以後、何應欽等親日派の勢力低下するに從ひ、蘇聯派の急先鋒たる陳誠の位地は愈愈堅固なものとなつた。だから彼は蔣の身代りとなつて江南の大軍を指揮したと見なしてもよいのである。

以上の如く蔣介石は前線に九十個師、約七十萬を配置し、尙ほ直轄として約十六個師、十萬を武漢に控置し、餘力のあるだけを擧げて武漢を死守しようとした。否な泡よくば此の一戰によつて、日本軍に一大打擊を與へ、一擧に頽勢を挽回しやうとした。

これに對して、日本軍の態勢はどうであつたか。日本軍も亦中支軍總指揮官畑大將の指揮下に、江北、江南の二手に分かれて之に當ることになつた。即ち江北軍は畏くも東久邇宮大將殿下を始め奉り各兵團長の指揮する部隊が先づ廬州に集結し、江南軍は岡村司令官を始めとし各兵團の諸部隊が揚子江を遡つて逐次廬山の天險に迫まつた。

斯くして武漢大作戰の幕は切つて落されたのである。



支那軍の武漢防禦陣

其三　遡江作戰

揚子江は全長三千二百哩、世界第五位の大河である。源を西藏に發し、汪洋として東支那海に注いでゐる。今試みに江上の重要都市を下流から逆に數へて行くと、先づ河口に上海がある。少しく遡ると南京がある。それから蕪湖あり、安慶あり、九江を過ぎて更に遡れば、目ざす漢口である。漢口即ち武漢から上流は岳州、宣昌、沙市を經て重慶に至る。水は急であるが、河幅が廣いから自由に舟を浮べることが出來る。故に之が中支那を東西に貫く一大輸送路であつて、武漢作戰に於ける敵味方攻防の大動脈となつたのは當然である。

簡單に云へば揚子江を制壓しさへすれば、武漢三鎭の死命を制したも同樣なのだ。だから敵も揚子江の確保には、凡ゆる努力を拂ひ、水上には隈なく機雷を敷設し、兩岸の要地には要塞或は陣地を構築した。それ故、我が

作戰に於ける敵味方攻防の大動脈となつたのは當然である。

簡單に云へば揚子江を制壓しさへすれば、武漢三鎭の死命を制したも同樣なのだ。だから敵も揚子江の確保には、凡ゆる努力を拂ひ、水上には隈なく機雷を敷設し、兩岸の要地には要塞或は陣地を構築した。それ故、我が海軍江上部隊の水路啓發作業の苦心は一通りのものではなかつた。

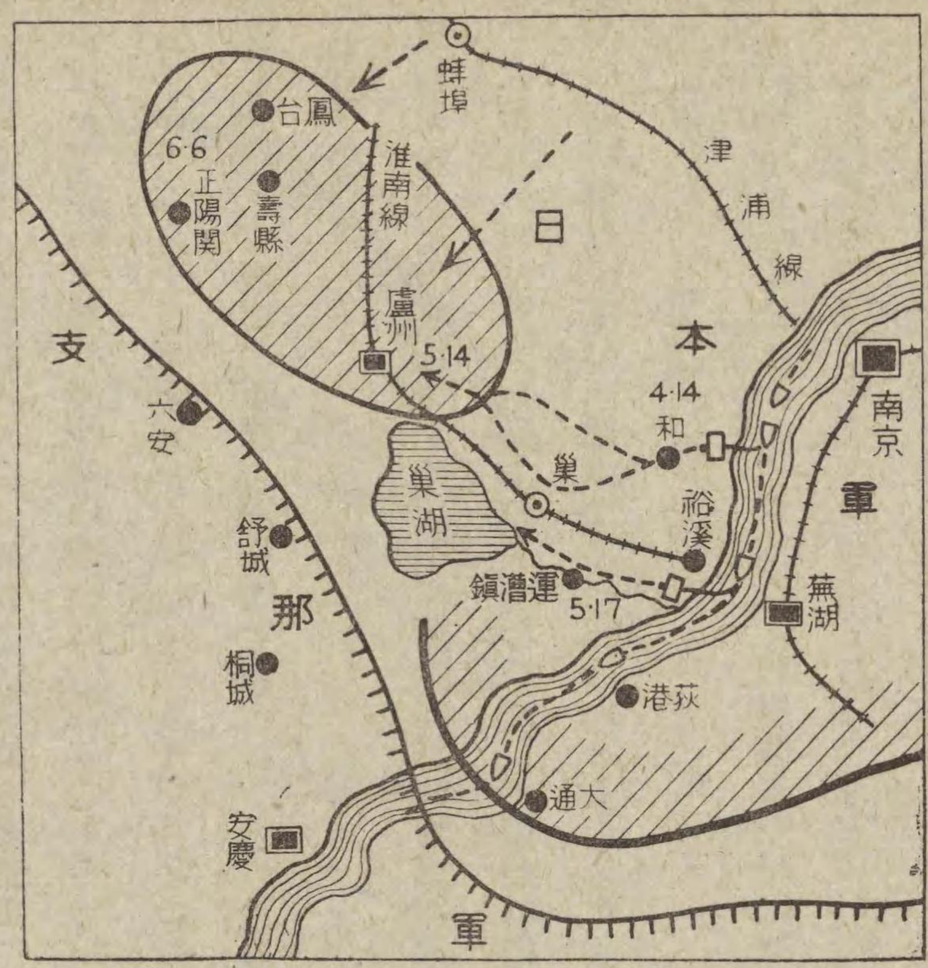
去年の十二月十三日南京を占領して間もない今年の一月十一日には、日本艦隊は早くも蕪湖の上流四十吉米の荻港を突破して敵前の水路啓開作業を强行し、十六日には大通附近まで遡江を斷行し、安慶の下流まで敵情の偵察を行つた。

四月になると陸軍部隊を掩護して蕪湖の下流對岸に敵前上陸せしめた。此の部隊は、同月十四日和縣を占領し、二十九日には淮南鐵道上の巢縣を攻略して廬州に向つた。當時徐州の支那軍は完全に包圍されてゐたので、廬州の守將廖磊麾下の三個師は之を救はんと北上した。恰かも其の虛に乘じ日本軍は廬州を襲擊して五月十四日之を占領した。（前章徐州會戰參照）

「廬州」一名合肥と稱し、東南近くに周圍五十里に亙る巢湖あり、揚子江に通ずるので水陸交通の要點を占めてゐると共に軍事、經濟上の中心地である。古來淮右の噤喉、江南の唇齒として重視され、揚子江より北して此の地を得れば西は信陽、汝南、北は壽縣、徐州掌中に在りと云はれ、又南して此の合肥を得れば南京を制して江南を制肘し得ると唱へられた。三國時代、吳魏間に爭奪が繰り返へされ、魏は之を頑守した爲め、吳は遂に淮南に於ける尺寸の地を取ることも出來ず、常に魏に壓迫され勝であつた。南北朝時代以後も兵家必爭の地となつた

ことは枚擧の煩に堪へぬ程である。宋の南遷後、宋は南下する金を防ぐ爲に此の地に重兵を駐屯せしめた。金に代つた蒙古軍が怒濤の如くに迫つた際にも宋將杜果は善く此處を死守して屢々之を破つた。明の太宗は此の地を手にしてから天下を取り、爾後南京を目差し或は北京を窺ふ者の爭奪點となり、清末の長髮賊の亂にも官賊兩軍の激戰地と化した。城郭の周圍約四里半、人口約三萬。近世の英傑である李鴻章、劉銘傳、段祺瑞等は皆此の地の出身である。

尙ほ久しく蕪湖に英氣を養つてゐた有力なる一部隊は、五月に入ると突如運動を起して揚子江を渡河し、其の對岸の運漕河に沿ひ前進し、十七日には運漕鎭を占領した。又東方津浦線方面からは他の一軍は西進し六月四日には鳳臺、五日壽縣、六日正陽關等と淮河々畔の要衝を相次いで攻略し該方面にある敵を一掃して盧州方面に在る軍と連絡した。



長江と盧州附近

故に徐州會戰後の六月初旬に於ける日本軍の戰線は開封より渦陽、正陽關、盧州、運漕鎭、蕪湖の對岸裕溪に亙り、艦隊は既て蕪湖の上流大通附近迄も水路を啓開しつゝ遡江してゐた。又蕪湖の東方所謂江南の地には殘敵

畔の要衝を相次いで攻略し該方面にある敵を一掃して盧州方面に在る軍と連絡した。

故に徐州會戰後の六月初旬に於ける日本軍の戰線は開封より渦陽、正陽關、盧州、運漕鎭、蕪湖の對岸裕溪に亙り、艦隊は既に蕪湖の上流大通附近迄も水路を啓開しつゝ遡江してゐた。又蕪湖の東方所謂江南の地には殘敵の蠢動あるも、日本軍は之が掃蕩に努めてゐたから、武漢進軍には後顧の憂ひは先づ無いと云ふ方であつた。是に於て盧州附近に在る陸軍部隊と、蕪湖上流に在る海軍とは相携へて武漢進擊を本格的に開始することゝなつたのである。盧州附近に在る部隊は六月六日前進を開始したのであるが、之は後述に讓る。

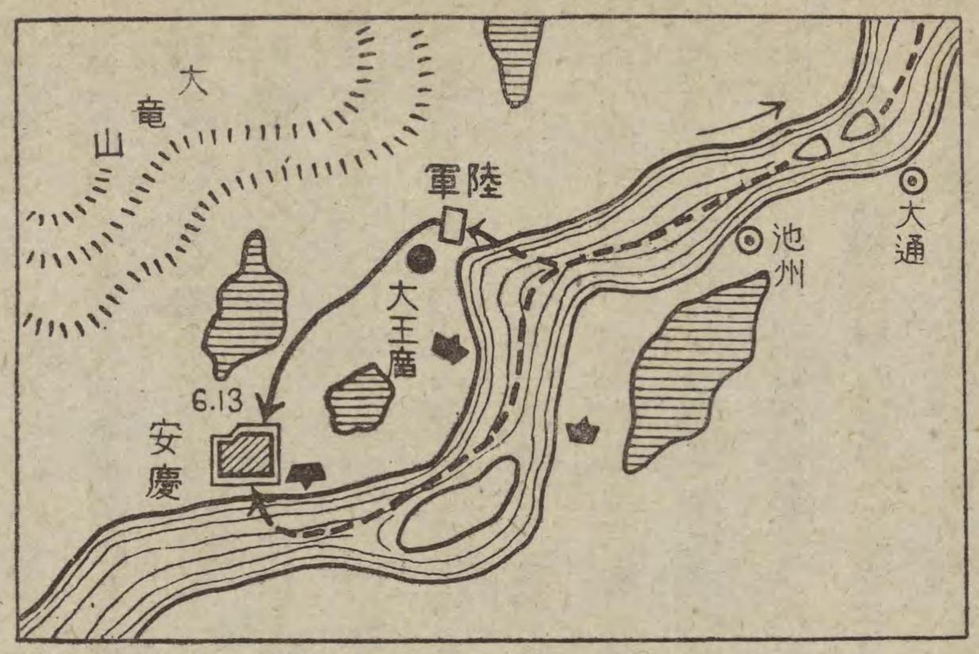
【安慶迄の遡行】 六月十一日日本海軍は、本日を以て武漢への進攻作戰を開始する旨を聲明し、蕪湖より上流、湖口までの區域からの第三國艦船の立退きを要求した。それで蕪湖附近の江上に集結してゐた日本軍の精鋭は舳艫相含んで遡江の壯途に就き、十一日の晝より夜にかけて長江の濁流を遡つた、船上の將士は肅として聲もない。十二日の午前一時頃には海軍の一部は安慶埠頭を占領したが、運送船に在る陸軍部隊は同夜午前三時頃安慶の下流約七里の左岸なる大王廟附近に上陸した。此の地より安慶まで陸路約四里である。是等の陸兵は揚子江に沿ひ直ちに西進し、豪雨と泥濘の中で激戰を交へ、潰走する敵を追ふて突進し遂に同夜其の先頭を以て安慶城内に突入し、翌十三日朝完全に城内を掃蕩して此處に一の立脚點を占めた。

「安慶」は安徽省の首府であるが、どう云ふものか、安徽の支配者は此處に居らず、東北方の蚌埠に居る關係上、政治重心は名目のみで實質的には長江交通の一要點として存在する商業都市に過ぎない。

同地は揚子江上、漢口への一つの重大な門戸を爲してゐる關係上、今次の事變に、漢口の前進軍事據點として

重視され、空軍、陸軍の根據地が作られ、更に之より東北方盧州、六安方面並に長江流域の蕪湖方面に對する支那軍作戰の重心點をなして來た所である。

昔三國時代より戰守の地として重視され、元代は此處に水軍を置き、明代亦守備を嚴にして南京の防禦地としての役割を演じた。故に「南京の門戸は安慶なり」と云はれた。清代には一世を震撼した長髪賊の亂に、其の占領する所となり九年間其の治政下に立つたが、上海官紳の軍に猛攻されて陷落した。清末革命の當初には其の運動の中心地となつた。城の周圍約一里半、人口約七萬、比較的學校が多く文化の一中心をなしてゐるのが特色である。三國時代吳の名將周瑜の夫人の生地と傳へらる。



安慶までの遡江

【湖口迄の遡行】　六月十三日安慶を占領した日本軍は直ちに次の進擊に取り懸かつた。此の時揚子江の北側盧州から潛山、太湖を經て黃梅に通ずる道路上には他の日本軍が此の遡江部隊と競爭的に西進を敢行してゐた。

翌六月十四日安慶の上流十五哩の地點に進出して航路の啓開、敵陣地の偵察、並に飛行機による爆擊等に從事し、愈々六月二十三日を以て一齊に遡江進擊に移り、連日の豪雨にて濁流は浪を上げて我が將兵の壯志を阻まうとするかに見えた。二十四日の拂曉、香口の東方右岸に猛雨を突いて敵前上陸を決行し、雨中泥濘の間に白兵戰

翌六月十四日安慶の上流十五哩の地點に進出して航路の啓開、敵陣地の偵察、並に飛行機による爆擊等に從事

し、愈々六月二十三日を以て一齊に遡江進擊に移り、連日の豪雨にて濁流は浪を上げて我が將兵の壯志を阻まうとするかに見えた。二十四日の拂曉、香口の東方右岸に猛雨を突いて敵前上陸を決行し、雨中泥濘の間に白兵戰を演じて頑敵を擊破し正午頃香口を占領し、河岸に沿ひ西進し、越えて二十六日には早くも沿岸の敵砲臺を拔き夕刻には敵が揚子江の護りと賴む馬當鎭の要塞を占領した。此處より湖口まで約十二里、今や湖口の死命は既に制せられたも同然となつた。

二十八日には袁家壠の敵陣地が攻略され、二十九日には馬當鎭西南約三里の彭澤が占據された。此の次は愈々湖口である。

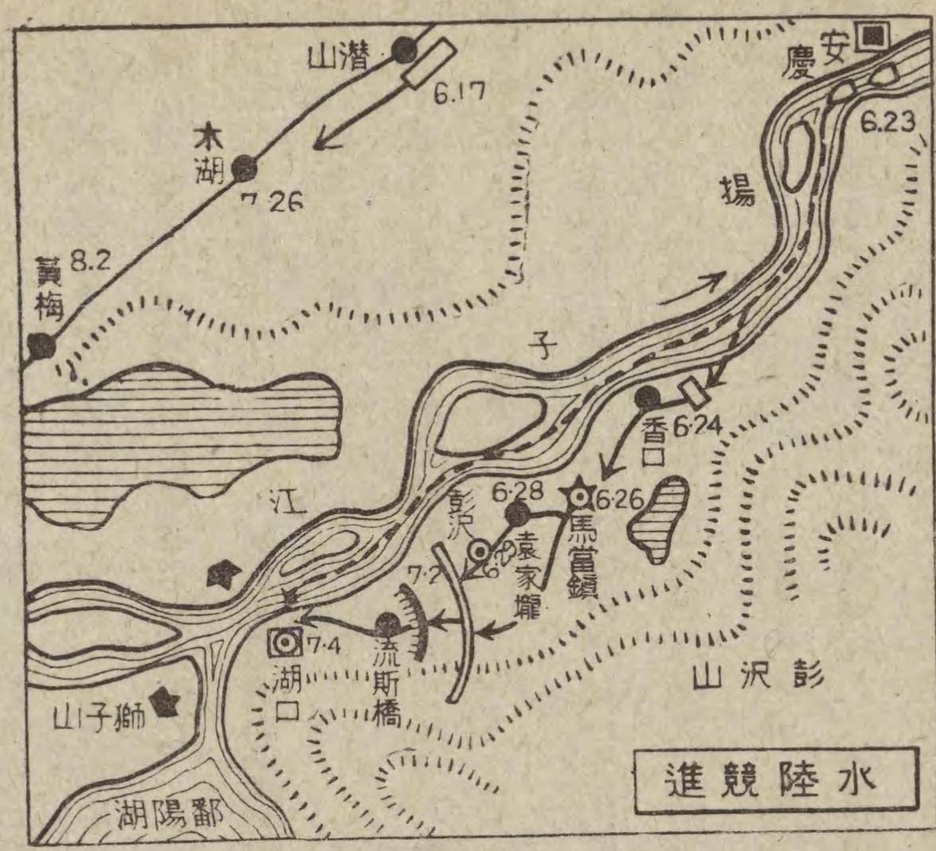
「湖口」は揚子江南岸の要地で鄱陽湖の入口に當り支那海軍の根據地であつた。此處から敵の作戰根據地九江まで僅かに八里、敵空軍の據點南昌は湖水を隔てゝ三十餘里の後方にあり、目指す漢口へは七十里である。

湖口城は後に山を負ひ、北は長江に臨み、對岸の小さな森は大王廟の要塞で、湖畔に突き出てゐるのが獅子山の砲臺である。獅子山の南に奇峯亂立してゐる美しい山塊は有名な廬山である。

城壁は高さ七米、厚さ五米にして周圍約二里に亙り東、西、北に三門を構へ、人口約一萬。蔣介石政權となつてから、中央海軍第二艦隊の根據地となり造船所が建てられた。しかし九江、南昌間の鐵道開通後は、九江の發展に押された。されど軍事的要地たるには變りはない。

六月二十九日彭澤を占領した日本軍は屢々逆襲し來る敵を擊攘しつゝ前進し、七月二日鶴翼の陣を張つて攻擊

前進し、流斯橋のトーチカ陣地を奪取し、戰ひは其の夜を徹し、三日拂曉には壯烈な突擊が敢行された。約一里半に亙る敵陣地は突破され、七月四日には湖口まで約一里となつたが激戰は續いた。敵も善く戰ひ、炸裂する砲彈の中から幾度となく逆襲を繰り返へした。日は長江の波に沈まうとする頃遂に湖口は日本軍の突擊によつて陷落した。翌五日北門から堂々と入城式が行はれ、萬歲の聲が廬山の空の方に谺した。



安慶・湖口間の遡江

是等日本軍は長江沿岸約三十餘里を長驅して頑敵を擊滅しつゝ百三十度の炎熱と豪雨とを冒し、勇猛果敢なる作戰を續けた其の勞苦たるや、實に筆舌のよく盡くし得る所ではない。

湖口は落ちた。次は九江である。

【九江迄の遡行】　七月四日湖口を占領してから同二十六日九江に突入するまで、二十日間もかゝつてゐる。僅か八里に足りない此の行程を辿るのに、どうして其れ程の日子が懸かつたのか。言ふまでもなく、猛烈な敵の逆襲を退けねばならなかつた、困難な揚子江の水路啓開作業を續けねばならなかつた、鄱陽湖畔への敵前上陸を準備するの必要もあつた、殊に七個師七萬の敵大軍が天然の要害を死守してゐるのに對し味方は寡兵を以て之に當らねばならなかつた、それに霖雨が上がると、今度は連

業を續けねばならなかつた、鄱陽湖畔への敵前上陸を準備するの必要もあつた、殊に七個師七萬の敵大軍が天然の要害を死守してゐるのに對し味方は寡兵を以て之に當らねばならなかつた、それに霖雨が上がると、今度は連日百三十度の酷暑が來て陸軍も海軍も異常な辛苦を嘗めねばならなかつたからだ。

「九江」は其の昔し潯陽と呼ばれ、北は揚子江に面し南は廬山を控へ、古來江上の要地として著れ、漢代には附近に潯陽城を築いた。揚子江が戰略的に重視された三國時代に、吳の孫權が先づ眼を此の地につけて都督を置き魏と蜀に對立した。隋が陳を亡ぼして天下一統を成就する時にも兩軍激戰の地となつた。唐、宋以後は上流の武昌と共に江畔の二大重鎭として軍事的施設怠りなかつた。近世に入り長髮賊の亂には官軍の防禦苦もなく敗れて賊手に陷り、民國十五年（皇紀二五八六年）には蔣介石の率ゐる北伐軍が破竹の勢ひを以て、當時支那第一の精兵を以て聞えた孫傳芳軍と此の地に大會戰を演じて擊破、後年の全支統一の基礎を築いた。

市街の城壁は高低曲折し極めて堅牢、周圍約二里、人口約五萬五千、兵營は城內に、飛行場は城外にあり。唐の白樂天、此の地に流謫、傑作「琵琶行」を作りて千年の哀れを止めた。

攻擊を準備中であつた日本軍は七月二十三日午前二時、海軍の決死隊が先づ鄱陽湖岸に敵前上陸を開始して有力なる據點を確保し、次いで陸軍部隊は姑塘北方地區に上陸し、楮橋舖附近の敵陣地を攻擊して之を奪取し、翌二十四日には岑上一帶の高地線を攻略し、二十五日には掛拷山の高地を陷れ、敗敵を急追して二十六日朝九江城門に突入し、續いて市內の掃蕩を完了した。

襲を退けねばならなかつた、困難な揚子江の水路啓開作

此の時海軍は此の陸上の突入よりも早く二十五日の正午頃港口に突入して決死の敵前上陸に成功し、其の一部を以て九江飛行場を占領した。全市は火災に罹り住民は殆んど殘つてゐなかつた。占領部隊は直ちに一部を以て九江西方の徐庄附近を占領し又他の一部は東方獅子山砲臺附近の殘敵を掃蕩した。

【九江南方高地の攻略】　以上九江を占領したのは第一回の鄱陽湖上陸部隊であるが、之に次いで第二回の上陸部隊は七月二十七日姑塘南方地區に上陸し、直ちに上楮橋を經て西進し、二十八日には九江西南方高地に據る敵を攻擊して之を擊破し、爾後廬山を右翼に數線に陣地を占領せる敵を擊攘しつゝ前進し、七月三十一日には沙河鎭を占領し、尙ほ八月二十四日には其の南方南潯線に跨る高地線を占領して執拗に抵抗する有力なる敵を壓迫してゐる。

尙ほ第三回の鄱陽湖、渡湖部隊（飯塚部隊等）は八月中旬星子北方地區に上陸し、同二十一日星子附近を攻略後、直ちに西面して玉筋山の險に據る敵を攻擊し、同二十四日頃には東孤嶺の線に進出し爾後德安東北方の山岳地帶に據る數個師の敵を壓迫してゐる。

【九江西方の瑞昌攻略】　九江を占領した諸部隊は八月上旬同地を發し揚子江と湖沼との間の隘路を縫ふて西に向ひ、百四十度の酷暑を冒し、且つ敵が長江を決潰したるにより生じた氾濫の中を、難行に難行を重ね、到る所頑强に抵抗する敵陣地を攻略しつゝ前進し、愈々八月二十四日を以て瑞昌の總攻擊となつた。

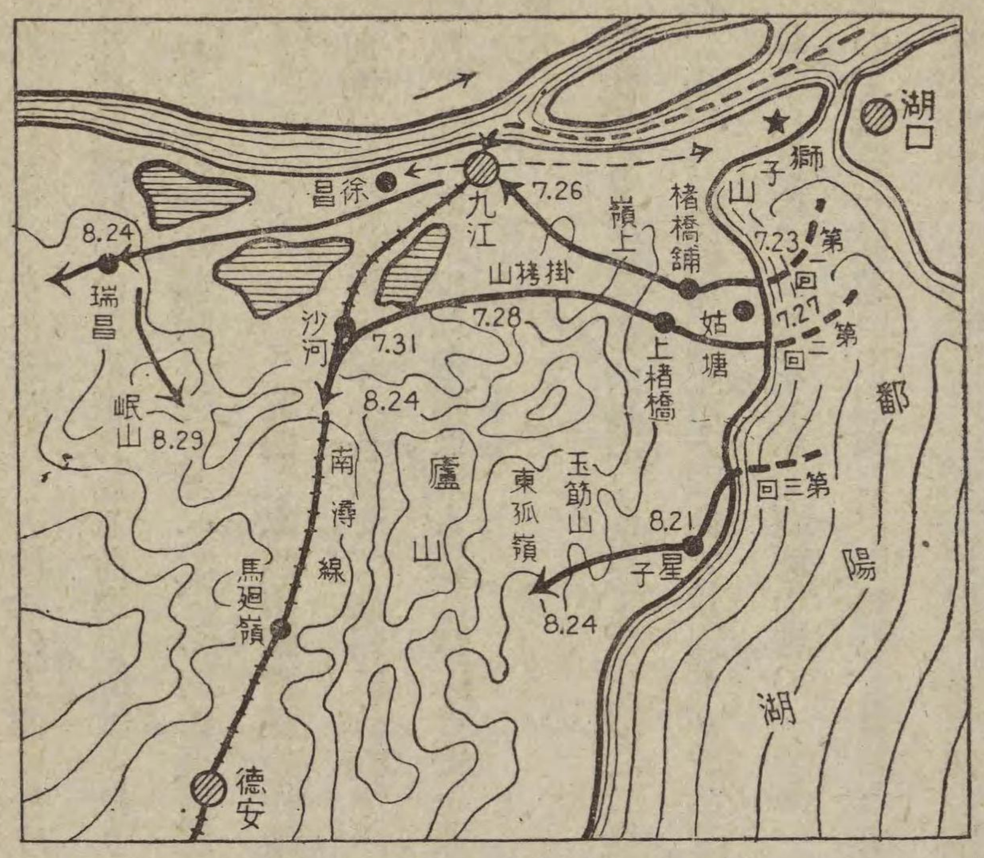
瑞昌は揚子江岸の一要地で、三國時代吳の孫權が魏の曹操の南下を防ぐため、此の地に程普の指揮する軍を駐屯せしめた。其の時赤色の烏が飛來して瑞兆を示したので此の名がある。小なる城郭が存在してゐる。今はトーチカ陣地により圍まれて此の附近の據點となつてゐる。壯烈なる突擊が始まり容易に勝敗は決しなかつたが、北

屯せしめた。其の時赤色の烏が飛來して瑞兆を示したので此の名がある。小なる城郭が存在してゐる。今はトーチカ陣地により圍まれて此の附近の據點となつてゐる。壯烈なる突擊が始まり容易に勝敗は決しなかつたが、北方の高地を迂回した一隊が敵の退路に迫るに及び始めて敵は動搖した。攻擊諸隊は一齊に城外に殺到し、日沒頃東門を爆破して城内に突入之を占領した。

瑞昌占領後其の一部隊は瑞昌南方に轉進し附近の高地に在る敵を擊攘し八月二十九日岷山の險を突破し德安に向ひ强壓を加へた。

斯くして九江は落ち、星子も瑞昌も落ちた。此の方面に在つた敵は廣東軍と吳奇偉軍約七、八個師であつたが我が神速果敢な攻擊に遭ひ多數の死體を遺棄して德安並に西方に走つたが、廬山の險には尙ほ敵大軍が立て籠つてゐた。

以上遡江部隊が六月十一日蕪湖附近を出發して八月下旬九江附近の高地占領に至る迄に、敵に與へた損害は頗る多數で、其の遺棄したる死體のみでも約一萬に上つ



九江附近の攻略

たであらう。

斯くして九江を占領したことは此の方面に於ける武漢攻略の作戰基礎を完了したことゝなつたのである。爾來九江は武漢攻略の爲め重要なる前進根據地となり、大なる役割を負ふことゝなつた。

以下此の遡江部隊と轡を並べて、大別山東南麓を競爭的に前進した部隊の行動を述べるであらう。

其四　大別山東南麓の作戰

前述の遡江作戰と睨み合はせて盧州に待機中の日本軍は猛運動を起し、大別山の東南麓を縫ふて九江方面に向つた。是れに於て此の軍は恰も遡江部隊と轡を並べて競走する形となり或は前となり或は後となつて前進を續けた。

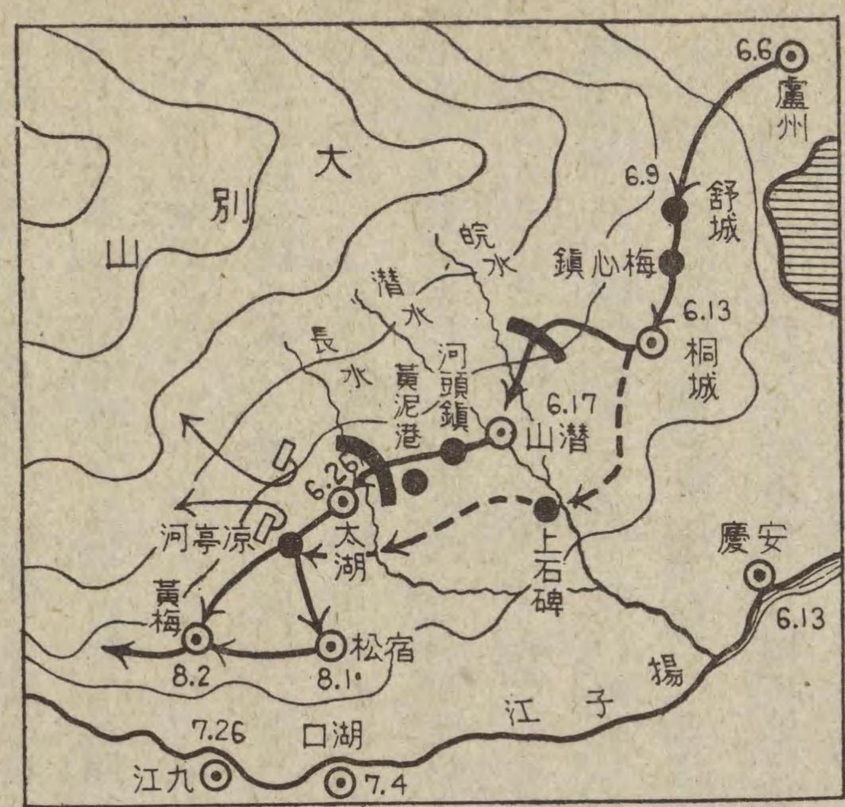
【盧州より潛山迄の前進】　かねて盧州附近に集結してゐた日本軍は六月六日運動を起し、同九日先づ舒城を陷れ、十三日には梅心驛南方に於て數線より成る敵陣地を擊破し、同夜半桐城に突入して之を占領した。

桐城は盧州と安慶とを繫ぐ要衝の地で、舒城、桐城、安慶は武漢防衛の第一線を以て任じてゐた。今之を失つたので蔣介石は大いに狼狽し、山地戰を得意とする廣西軍を急遽潛山方面に增派し李品仙の指揮下に入れて日本軍を拒守せしめんとした。然るに日本軍は敵の機先を制し息つく暇もなく潛山の攻略にかゝつた。

總攻擊は六月十六日の拂曉を以て開始された。日本軍は主力を以て潛山の東北方より、一部を以て遠く其の南方に迂回し、折からの豪雨に濁水轟々たる皖水の强行渡河を決行して對岸の敵陣地に突入し、一時間に亙る雨中の白兵戰を展開し、終夜戰ひを續け翌六月十七日天明と共に完全に潛山を占領した。潛山は敵が不落を誇つた要害であつたが、遂に敗れ、敵は一時其の西方の山地に潛んで逆襲の機會を覗つてゐたが、日本軍の猛追擊に敵し

方に迂回し、折からの豪雨に濁水轟々たる皖水の強行渡河を決行して對岸の敵陣地に突入し、一時間に亙る雨中の白兵戰を展開し、終夜戰ひを續け翌六月十七日天明と共に完全に潛山を占領した。潛山は敵が不落を誇つた要害であつたが、遂に敗れ、敵は一時其の西方の山地に潛んで逆襲の機會を覗つてゐたが、日本軍の猛追擊に敵しかね、逐次太湖方面に退却した。我軍は勝に乘じ潛水の濁流を渡り一氣に河頭鎭の堅陣並に潛山南方の上石碑を奪取し、泥路を西方に向つて追擊戰に移つたが、恰かも二十日餘りも降り續いた雨が漸く晴れ上がり、殘敵亦四方より襲ひ來るので暫らく潛山附近に駐止し、來るべき太湖、黃梅の攻略を準備することゝなつた。

此の時南方揚子江上の遡江作戰は著々と進んで六月十三日には安慶を陷れ、更に其の上流湖口に向ひ進擊中であつて、之れまでは兩者殆んど齊頭面に在つたが、此の方が潛山滯陣中、遡江部隊はどん〳〵進んで魁するやうになつた。



大別山東南の進攻

【潛山から黃梅までの前進】 潛山から黃梅までは約二十五里の距離であるが、此の間の攻略に四十六日間を費した。それだけ戰は困難であつた。潛山の次は太湖、それから黃梅であるから、先づ太湖の攻擊から述べる。

潛山の要衝が六月十七日に落ちたことは既に述べた。日本軍は此處に約四十日駐屯し、殘敵の掃蕩と共に、英氣を養ひ、近く南方を進む遡江部隊の進擊振りと睨み合せてゐたが、七月二十五日の朝に至るや、突如行動を起し、先づ太湖の前面に在る黃泥港の線に展開し、同夜の中に長水河畔を占領し翌二十六日早朝を期して總攻擊を開始し奮戰激鬪の後、正午頃敵を擊破して城內に雪崩れ込んで完全に之を占領した。

太湖占據の後、息つく暇もなく宿松、黃梅に向つて猛追擊に移つた。此の黃梅を拔き、其の西方の廣濟を突けば武漢防衛の一方の關門は破れるのである。故に敵は急遽後方より援兵を送り、太湖の西方涼亭河驛西側の高地線に於て我を阻止し、主力を以て太湖西北方より我が側背を突きて戰勢を挽回せんと圖つた。敵の此の計畫は適當である。されど時機は已に後れてゐた。此の狀況を觀たる我軍は直ちに太湖西北方の高地を奪取して反擊に出でたので、敵は機先を制せられ、其の企圖を放棄して西方及び西北方に遁走し、我軍は依然追擊を續行した。

太湖、黃梅附近は重要な地點であるので、敵は死物狂ひの砲擊と逆襲とを繰り返し、二十七日夜から二十九日の夜に至る三晝夜の間に殆んど三百回に近い逆襲を反復した。我は奮戰之を破り、然る後二手に分かれて宿松、黃梅の攻擊に取りかゝつた。

涼亭河驛より分かれて宿松に向つた一隊は八月一日猛烈なる掩護射擊の下に宿松縣城に迫り濛々たる黑煙を潛つて突擊し、遂に同日午後六時日章旗を宿松城頭に翻がへした。宿松を拔いた部隊は一齊に其の西方の黃梅に迫つた。

黃梅には第三十一軍を中心とする敵の約六個師がゐた。そして堅固に構築されたトーチカ陣地を其の北方高地に擁し太湖、黃梅道を追擊前進する日本軍に對し頑强に抵抗してゐた。其の處へ宿松で敗れた敵が潰走して來て

つた。

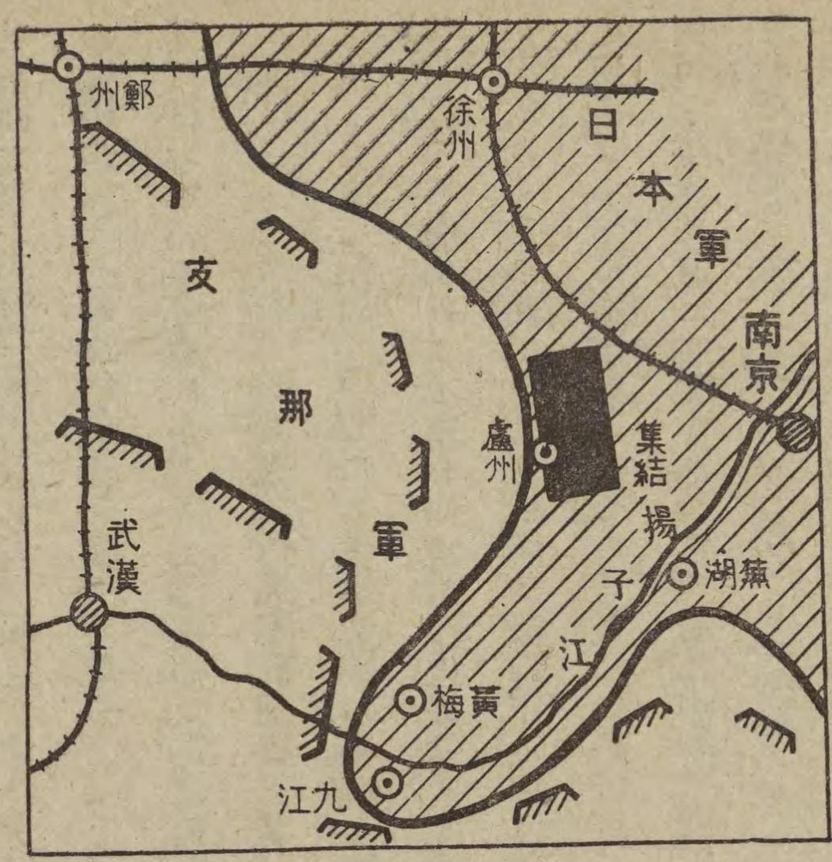
黄梅には第三十一軍を中心とする敵の約六個師がゐた。そして堅固に構築されたトーチカ陣地を其の北方高地に擁し太湖、黄梅道を追撃前進する日本軍に對し頑強に抵抗してゐた。其の處へ宿松で敗れた敵が潰走して來て黄梅の友軍を混亂に陷らしめた。既にして日本軍は北方及び東方より包圍的に猛攻し、それに航空部隊の空からの猛爆が加はつて攻撃が益々激烈となつたので、敵は遂に堪え得ずして西方に潰走した。斯くて八月二日黄梅は遂に日本軍の手に歸した。遡江部隊の九江占領七日後である。

其五　作戰基礎配置完了

前にも述べた如く、若しも敵が黄河の堤防を決潰せず、從つて氾濫も起らなかつたならば、日本軍は徐州會戰後、直ちに有力なる一軍を京漢線に進め堂々と武漢へ攻略の陣を進めたことであらう。然るに氾濫の爲め、それが出來なくなつた。そこで武漢攻略の作戰地區は自然と制限せられて、東方から大別山系及び揚子江に沿ひ武漢に向ふより外に道が無くなつた。是れに於てか、徐州方面にある兵團を此の方面に移動する間、茲に作戰の基礎配置を整へて置く必要があつた。それが卽ち前段に說述した所の遡江作戰と、大別山東南麓の作戰の二つであつたのだ。

然るに此の二つの作戰は一は陸上、一は水上であつて非常な困難を豫想されたが、それが又意外に容易く完遂され、其の間大なる兵力を盧州附近に集結し得て、之からする本格的攻撃作戰を活潑有利に發展せしめることが出來た。

此の作戰の基礎配置の終つた時期に於ける態勢は凡そ挿圖の如くであつて、武漢に對し全く側面陣地を占めた形となつた。



基礎配置完了時

日本軍の此の大別山南麓及び九江方面に電擊的作戰の手を伸ばすや、敵は之に牽かれて逐次其の兵力を江南前線に增加して頑强なる抵抗を試みると共に、九江以西揚子江上並に其の兩岸の地區には到る處堅固な陣地を構築し、防材、機雷を設け、且つ武漢周邊には數線に亙り複廓的に堡壘を連接し民衆を賦役して陣地の增强を圖り、以て眞面目の戰ひを試みんとした。

第二節　作戰開始

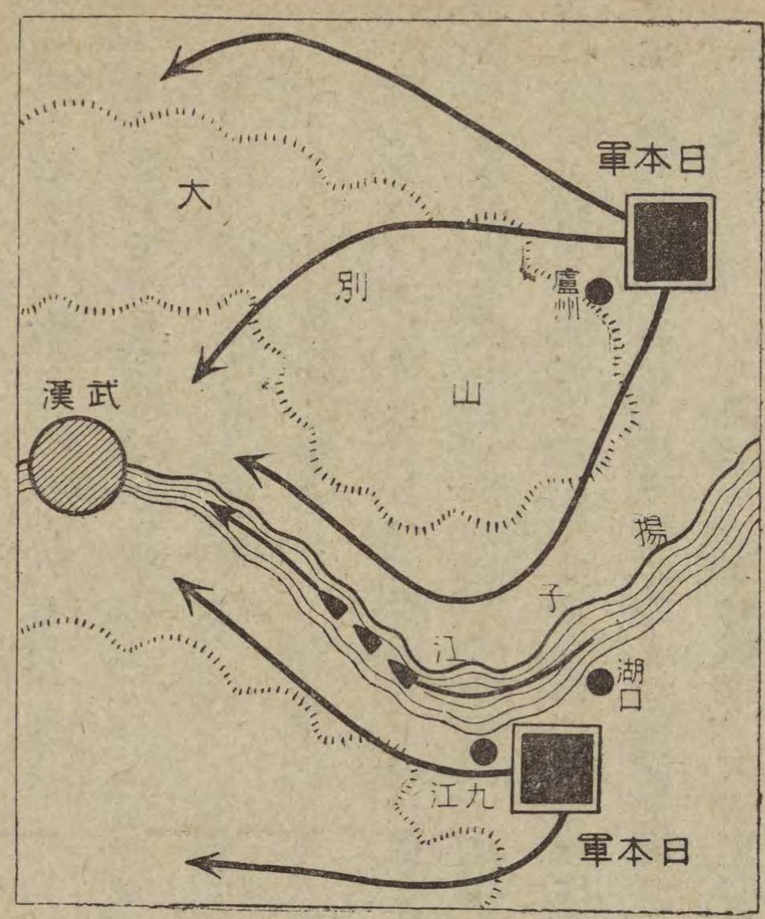
電擊戰は近頃獨軍の專有のやうに謂はれてゐるが、それは寧ろ日本軍の特色である。何事も早きを貴ぶは日本の民族性である。日本の戰史は皆其の早業の記錄である。今回の事變に於ても杭州灣上陸の如き徐州の包圍の如き、廣東奇襲の如き皆其の表はれであつて、支那人は「日本軍百萬、忽然として現はる、是れ天より降つたものか、地より湧いたものか」と恐れた程であつて、武漢攻略戰の如き又其の內の尤なるものである。

徐州會戰後、前述の如くに武漢攻略の基礎配置を進めつゝあつた日本軍は、八月二十日前後其の完了を見る

の如き、廣東奇襲の如き皆其の表はれであつて、支那人は「日本軍百萬、忽然として現はる、是れ天より降つたものか、地より湧いたものか」と恐れた程であつて、武漢攻略戰の如き又其の內の尤なるものである。

徐州會戰後、前述の如くに武漢攻略の基礎配置を進めつゝあつた日本軍は、八月二十日前後其の完了を見るや、豫定の如く江北、江南の二方面から一齊に電擊戰を開始した。此の作戰こそは、其の局面の廣大なことに於て、其の構想の雄大なことに於て、內外の戰史に嘗つて見ざる所の大作戰であつて、前古最大の近代戰と謂はれた第一世界大戰の大を遙かに凌ぐべき空前の大記錄を作つたものである。

其の作戰の構想は、武漢を中心とする半徑八十里の圓周上に於て東、南、北の三方面から武漢を包圍して袋叩きにしようと云ふのである。之が爲め大體軍を六道から進め、競走的に「武漢へ、武漢へ」と突進せしめたのである。此の勢威の前には、敵の設けた氾濫も、揚子江の濁流も、百四十度の炎熱も、覆盆の豪雨も、沒脛の泥濘も、何ものでもなかつたのである。其の六道とは何んぞ。



武漢への前進

一、大別山北麓より信陽に進むもの
二、大別山北麓より麻城に進むもの　江北軍
三、大別山の南麓より進むもの
四、揚子江々上を遡江するもの
五、揚子江南岸に沿ひ進むもの　江南軍
六、右の南側を進むもの

大體以上のやうな體勢であつて實に天下の壯觀を極めたものである。之に對し蔣介石は凡ゆる手段を盡くし、名將を選み勇將を擢んで丶戰線の指揮に任じ、彼れ是れ百萬の精兵を驅つて運命戰を賭せんとした。そこで到る所に激戰が起り、支那軍としては最大の努力を傾けたのであるが、本格的の作戰開始後約二箇月にして武漢三鎭は遂に落ちたのである。以下順に各道の戰況を述べるであらう。

其一　江北戰線、大別山北麓進擊軍の狀況

既に盧州、桃溪鎭附近に集結してゐた、我が北麓戰區の兵團は畏くも東久邇宮殿下御統率の下に命令一下將兵一體となつて、連日百四十度の酷暑と戰ひ、豪雨と泥濘とを冒して峻嶮なる天然の要害に據る敵に對し、息をもつかせぬ猛攻を開始した。

【六安、霍山の攻略】　敵は我が進擊を拒止せんと、戰車の通れぬやうに、殆んど三十米毎に道路を破壞し、山岳地帶の嶮岨を利用して、六安、霍山の線に宋哲元、馮治安の率ゐる數個師を配置して、此處を第一防禦線とし、第二線を其の後方固始、葉家集、富金山の線に、第三線を光州、商城の線に構築して、それ〴〵中央直系の

岳地帶の嶮岨を利用して、六安、霍山の線に宋哲元、馮治安の率ゐる數個師を配置して、此處を第一防禦線とし、第二線を其の後方固始、葉家集、富金山の線に、第三線を光州、商城の線に構築して、それ〴〵中央直系の數個師を配し、更に其の後方信陽方面に張自忠、孫連仲の率ゐる數個師を集結せしめ、所謂數線陣地を天險に托し極力日本軍を拒止せんとした。しかし此の方面の敵將は何れも皆徐州會戰其の他の戰ひに於て敗れた所謂敗軍の將であれば果してどの位の抗戰を爲し得るであらうか。

八月二十五日盧州を出發した兵團は右道を先づ六安に、桃溪鎭を出發した兵團は左道を先づ霍山に向ひ前進した。六安は古より江北の要地として著れ、戰國時代楚と吳との戰場となり、秦末には項羽が英布を此の地に封じた。三國時代、吳は全琮をして此處に魏を攻めしめたが勝たなかつた。城郭の周圍約三千米、人口約三萬、淠河に臨み丘陵が錯雜して自然の要害をなしてゐる。

「霍山」は太古黃帝が南岳として祀つた所、南北朝の時、北齊と陳との激戰地となり。此處から大別山を越えて漢口へ通ずる大道あり、長髮賊の亂に際し、曾國藩は先づ此處を陷れ、それより大別山を越えて漢口を陷れた。故に蔣介石も之に鑑みてか此處を重視し、附近に無數のトーチカを構築し馮治安をして之を守らせた。城郭の周圍約二千米、人口約七千、山間の要害である。

左右の兩軍は出發以後、隨所に激戰を交へ附近の山野を血腥い修羅の巷と化して前進し、右軍は二十八日遂に六安城の南門より突入して之を陷れた。

【六安、霍山の攻略】敵は我が進擊を拒止せんと、戰車の通れぬやうに、殆んど三十米毎に道路を破壞し　山

左軍は二十八日を以て霍山附近の總攻擊を開始し、標高一、五〇〇米の重壘たる嶮峯に據る敵陣に對し壯烈極まりない山岳戰を展開したが、城内の敵は頑强に抵抗を續け、戰鬪は二十九日に及び、急峻絶壁の高地に據る敵の陣地を一つ一つ肉彈を以て奪取しつゝ東、北の兩方面より城壁に肉薄し夜に至り北門の一角を占領し續いて東門をも奪取し、後ち東、北の兩門より雪崩を打つて城内に突入し徹夜殘敵の掃蕩を行ひ翌三十日拂曉に至り完全に霍山を占領した。

霍山の攻略は實に二晝夜に亙る激戰であつた。斯かる頑强な敵の抵抗は、彼等が北支に於て散々な敗戰を續けた馮治安の軍隊であつて、此の一戰に敗退すれば、最早行く處もない狀態におかれてゐた爲め、全軍捨鉢的の抗戰に出たことにも由るが、一つには共産軍の參加によつて無暗に抗日氣勢を煽られた結果でもあつた。

六安、霍山の攻略によつて北麓方面に於ける敵の第一線防禦陣地は玆に全く潰滅した。兩戰場に於ける敵の遺棄死體約三千。次は第二線防禦陣地の攻擊である。

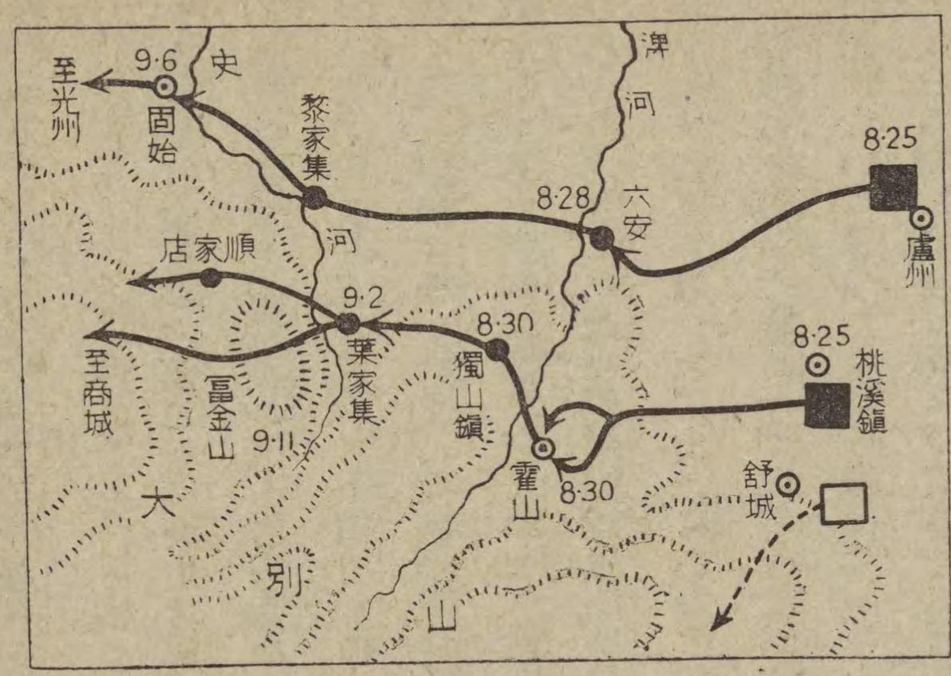
【固始、葉家集、富金山の攻略】　固始、葉家集、富金山を結ぶ敵の第二線防禦陣地は史河の流に沿ふて構築され、頗る堅固なものであつた。

六安を攻略した右軍は八月三十一日六安を出發し、黎家集の險を拔き、炎暑と泥濘の難行軍を續けて九月四日史河の敵前渡河を敢行し、同日夕刻固始城壁近くに肉薄した。かくて總攻擊に移り、頑强なる敵の抵抗を制壓して城壁の一角を占領し、續いて凄絶なる市街戰が展開され、炎々と燃え上がる火焔の中に彼我入り亂れての肉彈戰が繰り返へされ、六日漸く之を攻略した。

て城壁の一角を占領し、續いて凄絶なる市街戰が展開され、炎々と燃え上がる火焔の中に彼我入り亂れての肉彈戰が繰り返へされ、六日漸く之を攻略した。

「固始」は古來淮南の一重鎭であり、南北朝時代には南齊と後魏との爭奪地となり、近世に至り武漢防禦の前進據點となつた。城の周り約一里、人口一萬餘。今此の固始の陷落は其の南方據點たる富金山の敵陣地に大なる動搖を及ぼすことゝなつた。

次は左軍の行動である。左軍は八月三十日霍山攻略と共に獨山鎭をも陷れ、附近の要地を席卷して史河右岸の要地葉家集に迫つた。敵は同方面の守將馮治安を郤けて光州にある于學忠を遣はして之に代らしめた。我軍は斯かる混亂に乘じて突進したが、敵は敗走に際し葉家集に放火したので一夜の中に市街の三分の二を燒き盡くした。我軍は消火につとめ、漸く町の三分の一を兵火の禍から救つたのであつた。かくして九月二日を以て葉家集を攻略し、次は其の對岸にある富金山一帶の敵陣地の攻擊である。



盧州より固始まで

「富金山」は葉家集の對岸に屹立する標高千五百米の山で、之を中心として大小の嶮山がずらりと嶺を並べ、前には史河の流れを帶びた險要である。蔣介石の軍事顧問である外

國武官が、此の地點こそ百萬の日本軍を喰ひ止めることが出來ると言つて、何回ともなく攻防の實地演習を行ひ、塹壕、トーチカ、掩蓋等を構築して堅牢無比の要塞として今や蔣介石直系の中央軍三個師が之を頑守してゐる。

我軍は富金山の占領こそ大別山北麓の死命を制すると、九月二日午後馬腹に達する史河の濁流に飛び込み、壯烈なる敵前渡河を敢行し直ちに前面の高地を奪取し翌三日より富金山攻撃の火蓋を切つた。

三日、四日、五日、六日と四日間にわたり大激戰を續け山頂まで僅か三百米と云ふ所にまで迫つたが、容易に拔くことが出來ない。それは我が猛突擊により一旦陣地を捨てゝ敗走した敵も、後方に控へてゐる督戰隊に追ひ返されて再び逆襲に出て來るので、我軍は肉彈又肉彈の突擊を以て蝸牛のやうな攻擊前進を續けるのであつた。

其の內六日には敵の要鎭固始城陷り、且つ友軍の一隊が順河店を陷れたので、此の附近の敵陣地は只一つ富金山を殘すのみとなつた。山上にある望樓は一層眼に立つ、敵兵は之を核心として頑强に抵抗するので、其の後の攻擊は益々悽愴を極めた。此の時我が荒鷲飛行部隊は爆彈の雨を降らせて、連日敵のトーチカを爆碎した。斯くて意氣大いに昂つた地上部隊は、敵の十字猛火を冒し、逆襲を退け、一歩一歩胸を衝く峻嶮を猿の如く攀ぢ上りて敵と格鬪し、遂に恨みの望樓を占領したのは九月十一日の夜であつた。富金山の攻擊を開始してより玆に十日間、全くの晝夜連續の死鬪で、日露戰役旅順二〇三高地の苦鬪も斯くやと思はしめる。

富金山々頂の占領によつて、敵の史河抵抗線は全く潰滅した。此の固始及び富金山一帶の戰鬪に於て敵の遺棄した死體約五千を算した。

以上の如く六安、霍山の第一線、固始、富金山の第二線の陷落は、漢口背面の敵の防禦に深刻なる不安を與へ

棄した死體約五千を算した。

以上の如く六安、霍山の第一線、固始、富金山の第二線の陷落は、漢口背面の敵の防禦に深刻なる不安を與へた。茲に於て敵は光州、商城の第三線に兵力を集結して陣地を強化し、道路、橋梁を悉く破壞して我軍の進擊に備へた。

【光州、商城の攻略】 九月六日固始城を陷れた我軍は一刻の休息もせず、野を吹く旋風のやうな凄じさで光州へと向つた。

「光州」は古來淮西の藩屏としてのみならず揚子江北岸制壓の要衝として重視され、南北朝時代に齊、魏の爭奪戰あり、五代には周と淮南との戰場となり、蒙古の大軍が南宋に侵入する時、此の邊を通過して武漢地方に進擊したこともある。市は人口約一萬、城郭は市内を流るゝ潢河によつて南北の二城に分かれてゐる小都市であるが、南には大別山の嶮岨を負ひ、北には河南省の大平野を控へてゐるので軍事的に見れば京漢線の要衝信陽の重要據點である。六安、葉家集、固始と、次ぎ〳〵と敗れた敵は、此處に約十萬餘の大軍を集めて我が軍の進擊を喰ひ止めんとした。

我軍は行く〳〵敗敵を擊退し、十二日には早くも光州東方四里の黃崗寺に達し、次いで河幅五十米、深さ七十珊の潢河を徒渉し對岸の敵を驅逐して十四日には光州外防禦陣地に進出し、同時に一隊は光州の北方に迂廻した。然るに何んぞ圖らん、淮河の流れを、日章旗を翻がへした何百隻とも知れぬ一大船團が、川一杯を掩つて、

ぐんぐん遡つて來るではないか。天から降つたか、地から湧いたか、此の邊に作戰して居る部隊は無い筈だ。一體何處から、やつて來たのであらうか?。

是等の部隊は去る八月三十日、此の大船團を編成して遠い津浦線の蚌埠を出發し、そして蔣介石が決潰した新黃河の流れ込んだ淮河の遡江を始めたのである。所が今までとは違つて氾濫の爲め河幅が何倍となく廣くなり又水深も深くなつて、從來よりも舟行が容易になつたので、舷側に機關銃を据えて兩岸に在る敵と戰ひ乍ら航路を啓きつゝ進み、壽縣、正陽關、三河尖などを過ぎ、四百吉米（約百里）に近い航程を僅か十日內外で光州北方に達して同地攻略に參加し得たのである。之で此の淮河による兵站線が確保され後方補給の心配は無くなつた。敵が我軍を苦しめんと、黃河を決潰して大氾濫を起したのが、却つて日本軍の利用する所となりて彼れ自ら其の禍を受けるに至つたのは何んたる天罰覿面の因果であらう。

九月十六日には光州攻擊の配備を完了し、東、北、西の三方面より總攻擊を開始することになつた。戰鬪は戰車、飛行機の協力によつて華々しく展開された。敵は水濠に圍まれた二重の城壁に據り必死に抵抗するので、戰は翌十七日に及んだ。

此の朝我が挺身決死隊の西門爆破が行はれた。しかし西門一箇所から突入するのでは掃蕩にも時間がかゝり又それだけ損害も多いから、城壁を破壞し、そこより同時に城內に突擊せんと、濠と城壁との偵察を行つた所が、濠の幅は約七十米であるが、蓮が密生してゐるので深さが分からず、城壁には敵が銃眼をあけて盛んに擊つてゐて、これも其の厚さが不明だと云ふのである。

濠の幅は約七十米であるが、蓮が密生してゐるので深さが分からず、城壁には敵が銃眼をあけて盛んに撃つてゐて、これも其の厚さが不明だと云ふのである。

是に於て當面の部隊長は、蓮が生えてゐる以上、人の背丈より深い筈がない。又銃眼を開けてゐるからには山砲でも大丈夫壊れると、鋭い觀察の判斷をなして直ちに泥濠を冒しての總突擊に移り、梯子を以て城壁に駈け上り銃劍の切先を揃へて城内へ雪崩れ込み遂に十七日暮方光州を攻略した。敵は最後には例の焦土戰術に出て市内の各所に火を放ち、天を焦す火炎の中を一方の血路を開いて退却した。我軍は豫め敵の退路に待ち構へ十字砲火を浴せて多大の損害を與へた。

北方の光州城は落ちたが、其の南方の商城はどうであるか、之も九月十六日の朝、城の東門に日章旗が飜がへつたのである。

「商城」は他の都市よりは遙かに後れて開發し、武漢三鎭を北方勢力より保護すべき要地として僅かに知られ、元時代には土豪余思銘の據城であつた、市街には周圍一里の城郭を繞らされてゐる。其の位地が、北は光州、信陽に通じ、南は大別山々脈を横斷して麻城、漢口に通ずる交通上の要驛に當るので、恐らく漢口防衛の軍事的見地から觀れば、信陽に次いで最も重要な地點であらう。

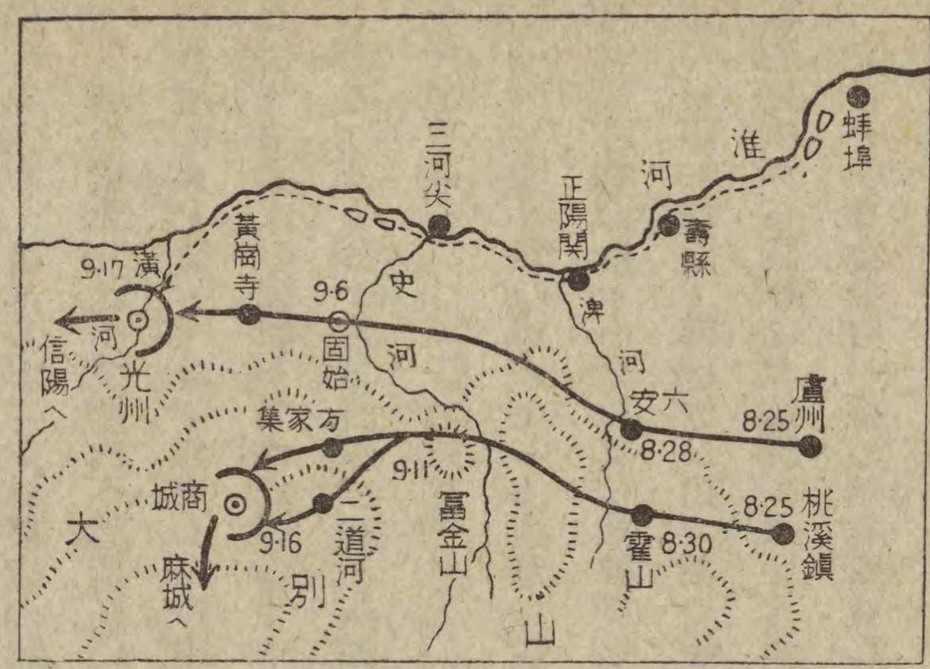
九月十一日富金山一帶の敵を擊破した我軍は二縱隊となり直ちに轡を並べて大追擊戰に移り、途中方家集、二道河附近の陣地に據る頑敵を擊攘し、十五日夕刻には商城の北、東、南の三面に迫り、翌十六日拂曉、朝霧を破つて總攻擊を開始した。此の時友軍の飛行機は思ひ切つた低空飛行を行つて城内の敵に向ひ機關銃の掃射を浴せ

かけ、之と相呼應して待機してゐた戰車隊は猛烈に城門に殺到して東門を破り、次いで歩兵の突入となつて午前九時之を占領した。

以上を以て敵の第三防禦線の北部據點たる光州も落ち、又南部據點たる商城も落ちたので、大別山系北麓の重要點は陷落し殘るは信陽のみとなつた。八月下旬盧州出發以來光州、商城陷落に至る間戰場に遺棄せる敵の死體は約一萬二千に上つた。

是に於て日本統帥部に於ては豫定の如く作戰路を二つに分け、一は光州攻略の軍を以て信陽に向はしめ一は商城攻略の軍を以て大別山脈の中央を突破し麻城を經て漢口に向はしめた。是れに於てか、今迄相並んで大別山北麓を西進した日本軍は西と南に分かれて作戰することゝなつた。先づ信陽への軍から述べよう。

此處に一寸挿說して置くことは、他方面に於ける諸軍の行動である。是等の諸軍は矢張り北麓進攻軍と同樣、萬難を排して頑敵を到る所に擊破し、著々其の功を收めてゐる。



固始より光州まで

即ち大別山南麓にありては要衝廣濟を攻略し、揚子江畔では武穴、馬頭鎭の要塞を陷れ、江南に於ては陽春、德安の險に迫りつゝありて、大凡各軍が其の頭を揃へてゐる。南北に亙る是等各軍の戰線正面は約八十里に亙つてゐる。此の間に揚子江を中心として北には大別山々脈巍峨とし

北に亙る是等各軍の戰線正面は約八十里に亙つてゐる。此の間に揚子江を中心として北には大別山々脈巍峨として横たはり、南には廬山々脈が我が妙義山の如くに峙つてゐる。此の廣大にして複雜せる地域に、百萬の敵を向ふに廻はして作戰する日本軍の統帥力は蓋し歷史的の記錄と云ふべきである。

【信陽攻略】「信陽」は北には古代の所謂中原、南には湖廣の沃地、東には淮西の饒土を控へ、特に南北交通の要路に當り南支の襟喉を扼するものとして古來頗る重視され、春秋戰國時代に於て楚は全力を盡くして之を固めた。南方にある平靖、武勝、九里の三關が信陽の爭奪戰に於ける攻防の第一線として有名である。宋の南遷後は此處を守りて金の南下に備へると共に北支奪還の第一梯梯とし、又蒙古の南下も此の地の陷落から始まつて武漢の攻略へと進展した程であつた。城郭の周圍約一里半、人口約四萬である。

今回の役に蔣介石が武漢防禦線の左翼據點となしたのも當然で、敵は此處に大部隊を集結し、飛行機、戰車砲、野山砲、迫擊砲など、凡ゆる近代兵器を裝備して鐵壁の護りを固めてゐた。

九月十七日堅城光州を陷れた我軍は、一部を以て西南の光山を、又他の一部を以て西北の淮河々畔の要點息縣を占領し、主力は一路信陽街道を西進して、二十一日信陽東方約十二里の要地羅山を占領した。

羅山は信陽防禦の最前線で、此の地を失ふことは敵の本據を危くすることになるので、敵は之を奪還せんと、三個師の精鋭を以て、二十六日より二十九日まで四日間を要して包圍陣を完成し、北、西、南の三方面より猛烈なる逆襲に轉じ、彼等に比し十分の一にも足りない程の我軍を一呑みにする勢ひで殺到して來たのである。我軍

は態と敵を近づけ、最近距離に迫るを待つて猛射を浴せかけた。敵には銃劍突擊の戰法がないので忽ちの内に死屍累々となり遂に潰走し始めた。敵が四日がゝりで完成した包圍陣を、我軍は僅か三時間で打ち破つて了つたのである。

これより先き我軍の一部は既に羅山の前方に進んでゐたが、今此の羅山包圍の報に接するや、直ちに廻れ右して敵の背面を衝き、城内の友軍と呼應して敵を完全に殲滅せしめた。支那軍の作戰は大局から觀れば如何にも合理的であるが、何處かに拔けた所があつてボロを出すことが多い、是等も其の一例である。

是れに於て我軍は本格的に信陽攻擊の部署を整へ部隊を三つに分け、九月三十日三道より並び進んだ。

即ち本道南側地區を急進した左方部隊は、猛進擊を續け、十月六日夜信陽南方二十吉米柳林鎭驛を襲擊して京漢線を遮斷し、尙ほ其の附近の敵を擊攘しつゝ十月十日信陽の西方高地に向ひ突進して之を占領し、信陽を眼下に見下しながら猛烈なる砲火を浴びせた。

又本道北側地區を急進した右方部隊は行く〳〵敵陣地を奪取して猛進し、十月十一日頃信陽北方十五吉米大洋河鎭附近に進出して京漢線を遮斷し南下の態勢を整へた。

中央の信陽街道を前進せる主力も亦左右兩側の部隊と相呼應して猛進し十月二日以來羅山西方三里の欄杆舖の敵陣地攻擊を開始し猛攻二晝夜の後之を擊破して西進を續けた。

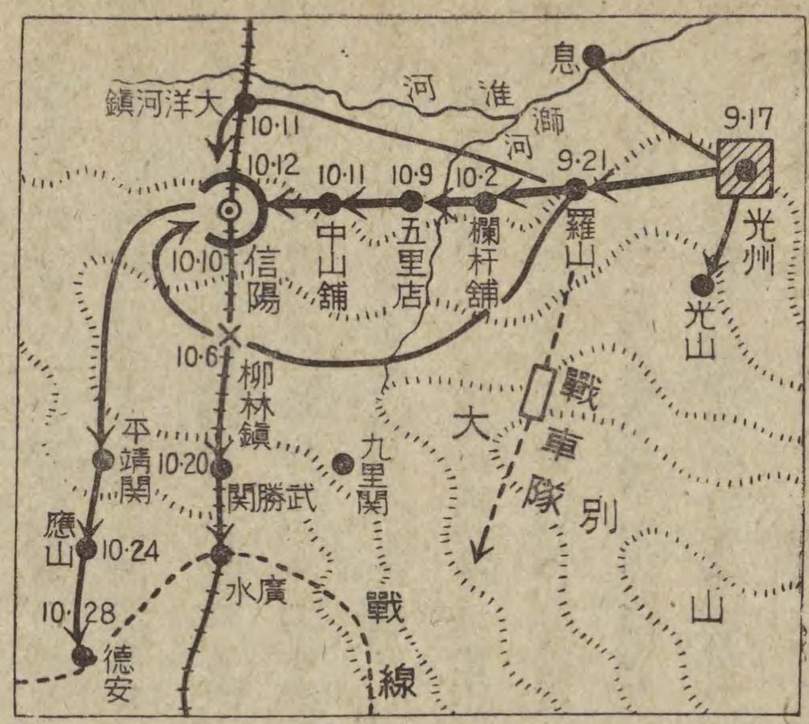
曩に羅山陷落により信陽危しと見た蔣介石は支那第一の猛將と云はれる胡宗南に直系中央軍の三個師と四川軍の三個師と都合六個師の援軍を與へ、支那には珍しい科學兵團まで繰り出して來て我軍の進擊を拒止せんと五里

の三個師と都合六個師の援軍を與へ、支那には珍しい科學兵團まで繰り出して來て我軍の進擊を拒止せんと五里店の要地に、上海の大場鎭にも劣らぬ程の防禦工事を施して我を迎へた。

我軍は十月六日欄杆舖を出發し一擧に瀙河を渡りて五里店の敵陣地を攻擊した。流石に猛將胡宗南の指揮する直系中央軍だけあつて、近代兵器の粹をあつめ、武漢攻略戰に、他に是れ程の戰鬪はなかつたと云はれる程の大科學戰を展開し、裝甲自動車や毒瓦斯までも登場し、彼れの戰車は我が戰車と衝突して、鐵牛同志の一騎打が始まり、それに敵の編隊飛行機が飛んで來るなど、全くの立體戰で、敵の抵抗は目醒ましきものがあつた。然れども如何せん時機は既に失して、前述の如く我が南方迂回隊は深く信陽南方に進出し京漢線を遮斷して敵の退路を脅し、北方迂回隊亦信陽の北方に迫りつゝあつた。故に此の際敵は頑强に抵抗すれば、する程包圍せらるゝの形勢に陷るので、彼れは遂に退却するに至つた。よつて我軍は九日を以て五里店を占領し、十一日には其の後方の堅陣、中山舖に據る敵を擊滅し、勝に乘じ快速戰車隊を先頭に、嵐の如く信陽に向ひ突進した。

以上の如くして信陽を北、東、南の三方面より包圍するの態勢が取れたので愈々十月十一日早曉を期して總攻擊は開始された。敵は城外の丘陵地帶を利用して幾重にも堅固な陣地を繞らし、必死の防禦を續けた。我軍は飛行機、戰車の協力によつて步砲の攻擊をヂリ押しに進めて行くのであつた。爆擊の音、砲彈の響、劍戟の聲、信陽城の內外に轟き渡り、城は忽ちの裡に濛々たる白煙に包まれて、敵味方の區別も分らない亂戰の巷と化してしまつた。

激戰は徹宵續き翌十二日の天明を待つて我軍は三方より一齊に城壁に向ひ肉薄し、先づ北門の一部が崩れ、挺身隊は其の破壞口に突進して城壁に躍り上り、次いで南門破れ、我兵は怒濤の如く城內に殺到する、全くの津波だ、歡呼の嵐だ。斯くて武漢北方の堅要信陽は十月十二日正午を以て陷落した。丁度此の日は我が廣東に向つた南支作戰部隊がバイアス灣に上陸した吉日であつた。



信陽攻略前後

【信陽より南下】　信陽攻略後、我軍は大體に於て二團となり直ちに南下を始めた。卽ち其の一は京漢線を、他の一は其の西側の地區を前進したのである。（別に羅山より南方に戰車隊を進めた）然るに信陽南方五里の武勝關は前述した如く古來三大關の一で、峨々たる天嶮を占め、敵は此處に最後の兵力を集結して、死者狂ひの抵抗を試みた。我軍は惡戰十日凡ゆる辛酸を冒して此の敵を擊破し、更に南下して廣水附近まで進出した。又京漢線以西地區を進んだ兵團は十月二十日平靖關を陷れ、二十四日には應山を拔き、敗走する敵を急追して漢口西北の要衝德安に向つて進擊を續け、二十八日には此處を占領して漢口より西北に向ひ敗退する敵の退路を遮斷せんとした。此處より漢口までは約二十里である。

漢口は之より三日前、卽ち十月二十五日を以て陷落したのであるが、此の信陽方面より南下せる軍が、武漢の敵を牽制したるの偉功は蓋し大なるものである。漢口に一番乘りした部隊は大別山南麓を西進した軍であつた。

漢口は之より三日前、即ち十月二十五日を以て陥落したのであるが、此の信陽方面より南下せる軍が、武漢の敵を牽制したるの偉功は蓋し大なるものである。漢口に一番乗りした部隊は大別山南麓を西進した軍であつた。信陽軍が同地を占領したのは十月十二日であつて漢口から約四十里隔てゝゐた。此の時一番乗部隊も矢張り漢口より約四十里離れた廣濟附近に在つた。故に此の兩軍は漢口入りの先陣爭ひの位置にあつたのである。然るに信陽南下部隊は古來有名な武勝關、平靖關の難關に當面し且つ優勢な敵を引受け約十日間難戰苦鬪してゐる間に、南麓軍は其の機に乘じ案外容易に漢口に進入して先登第一の榮冠を獲たのである。是れ即ち協同作戰の美果と謂ふべきもので、日本軍の誇りとする所である。

其二　江北戰線、大別山脈中央突破軍の狀況

既記の如く九月十六日商城の要衝を攻略した我が軍は、それから二方に分かれ、南を指して、一兵團は右方の沙窩へ、一兵團は左方の新店へと猛進を續けた。

もう此の邊からは、そろ〳〵大別山脈だ、死の山と云はれる大別ラインである。支那では昔から「大別山を攻めるものに勝利なし」と云はれて、事實、何千年の歴史にも此處を突破した軍隊はない。蔣介石でさへ曾つて僅かな共産軍に此の山中に逃げ込まれて、二年もかゝり大軍で追ひ廻はしても、中々に殲滅が出來なかつたと云ふ程の非常な天嶮である。しかも今回は此の中央の天嶮に加ふるにトーチカ陣地を以てし且つ蔣介石の直系中央軍四個師と傍系中央軍十二、三個師と、約十五萬の大軍を配置し、孫連仲を總司令として日本軍の進擊を拒止せん

としてゐた。

之に對し日本軍は極めて少ない兵力を以て、此の天嶮大別山脈を突き破つて漢口に突入し、支那五千年の歷史をひつくり返すと云ふのである。

流石に豪勇無比の我軍も此の地帶を突破するには、實に一箇月餘の時日を費やした。八月二十五日盧州附近を出發して以來大別山北麓に於ける敵の第一、第二、第三の防禦線を突破して商城に入るまで僅かに二十四五日しか要しなかつた我が精鋭は、此の附近の山岳地帶だけに、それ以上の日數を費したのだから、苦戰の程も察しられるのである。

左右に分進した兩兵團は、何れも直面せる敵の堅陣を攻擊し、競爭的に瘤山を取つては進み、進んでは取ると云ふ有樣であつた。先づ右方兵團から述べよう。

【右方兵團】　商城を發した右方兵團は九月十九日以來沙窩東方地區にある敵の數線既設陣地を攻擊突破して二十二日沙窩を占領した。すると其の前方に斷然四邊の山々を睥睨する九五〇米の高地あり、此處に敵の二個師が立て籠り、我兵力の寡少なるを侮つて頻りに我れに挑戰して來る。我軍隱忍自重、全部隊の到著するを待ち、愈々同二十九日を以て總攻擊を始め、三方より包圍して壯烈なる白兵戰を繰り返し、之を奪取して其の前面を見ると愈々大別山連峯の表はれである。

大別山系は山として見れば、アルプスのやうに、そんなに高い恐ろしい嶮岨なものではないが、一千米の白雲山といふのが最高峯で、只非常に嶺の數が多いのである。

山といふのが最高峯で、只非常に嶺の數が多いのである。

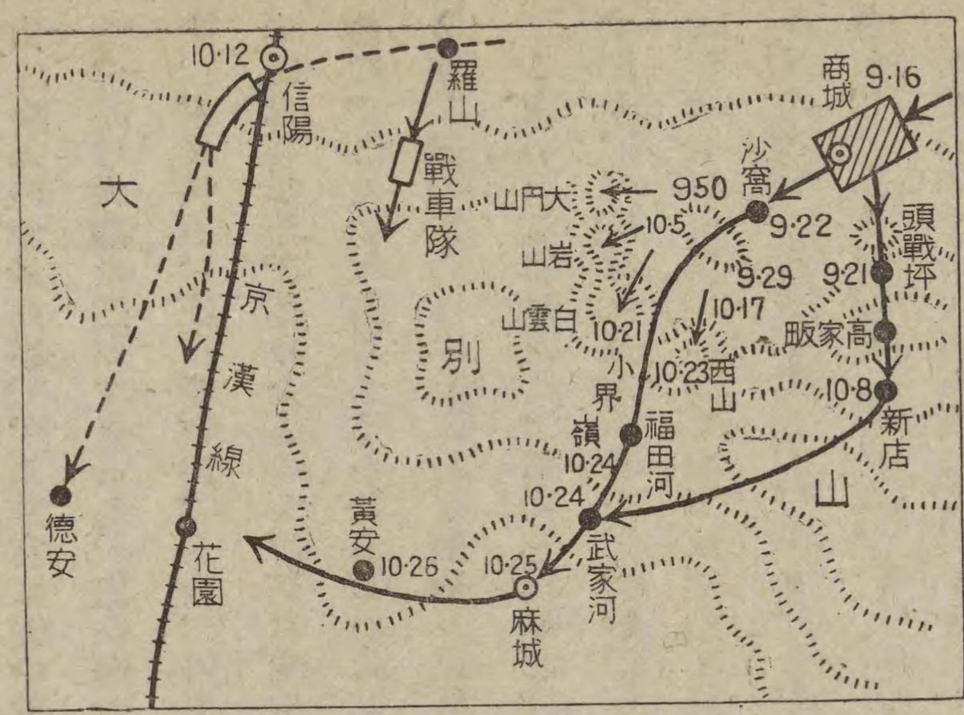
今其の大體を述べて見ると、遙か向ふの白雲山を中心にして、右に岩山、一文字山、大圓山、小圓山、大別富士、鉢卷山等、左に磨盤山、西山、屏風山、天王山、鐵兜山などと青海波のやうに魚鱗形に並んでゐる。是等の名前は皆我軍で附けたもので、何れも七八百米或はそれ以上で、ざつと三四十はある。それ以下の二三百米級の瘤のやうな山は何百あるか分らない位だ。かう云ふ山々嶺々が沙窩から麻城に至る約十里ばかりの間に、ぎつしり並び重つてゐる。故に全く瘤取り戰爭の活劇である。

十月五日我軍は進んで岩山を攻擊し、此處にも九五〇米高地攻擊同樣の凄絶慘絶の死鬪を繰り返して之を奪取するや、今度は大圓山の攻略、次いで西山の攻擊である。此の西山の戰は全く斷崖と鐵條網とを挾んでの手榴彈の投げ合ひ合戰であつて我軍は猛烈な銃砲火の掩護下に十三回の突擊を反覆したと云ふ記錄の惡戰であつたが、「七生報國、生きては山は下らぬ」と誓ひを立て十月十七日神嘗祭の佳日の拂曉に行つた決死の突擊は遂に功を奏して西山を日章旗で埋めた。

斯くの如く山又山を取つて、十月二十日には愈々最高峯の白雲山に迫つた。此の猛攻擊も壯烈極まるものであるが、我が砲彈が頂上の岩角に當つて火を發する樣は實に天下の壯觀であつた。山頂に廟あり、此の廟を繞つて彼我決死の爭奪が行はれ、容易に勝敗決しなかつたが、翌二十一日夕刻遂に我軍の攻略する所となつた。

大別山脈の屋根である白雲山は遂に征服された。支那五千年の歷史は、見事、日本軍によつて覆へされた。

「大別山を攻めるものに勝利なし」と云はれた諺は「大別山を攻めるものにも勝利あり、それは日本軍だ」と訂正されたのだ。實際、此の大別山脈突破も白雲山までが、ヤマで、それから先は、道路も戰鬪も下り坂で、「麻城へ、麻城へ」と、もう逃げる敵を追ふだけだ。二十三日白雲山の麓を縫ふて、峠の頂上に達した。此處は大がかりな切り通しで、兩側の絶壁の下に數軒の家があり、双門關といふ昔からの關所で、河南省と湖北省とを分かつ峠で、小界嶺と云ふのがそれのことである。



大別山中央突破軍

峠を降りると、今まで北へ流れてゐた河が、今度は南へ流れだした、兵の足並も元氣になつた。二十四日には福田河を經て午後武家河に進出した時、左方兵團と合した。

【左方兵團】　左方兵團も前述右方兵團と同じく商城を南下して以來、山岳突破の難戰苦鬪を經て九月二十一日には頭戰坪北方高地を占領し、更に攻擊を續行しつゝ同日中に其の南方の瘤山を奪取した。十月に入るや高家畈附近の敵陣地を力攻中であつたが、戰況有利に進捗し、十月七日新店附近を占領して引續き敵を追擊した。

新店は商城南方約十里、大別山脈東北登口の要衝にして敵は其の西南にある麻城の背面防禦點として執拗に抵抗したが、遂に敗れて大別ラインの一角は崩壞するに至つた。それより敵を急追して武家河に達した時、合もよ

新店は商城南方約十里、大別山脈東北登口の要衝にして敵は其の西南にある麻城の背面防禦點として執拗に抵抗したが、遂に敗れて大別ラインの一角は崩壞するに至つた。それより敵を急追して武家河に達した時、恰もよく右方兵團と相合したのである。

【兩兵團の南下】 十月二十四日武家河に於て兩兵團は合して一隊となるや、晝夜兼行麻城街道を南下し、二十五日には麻城を拔き、二十六日には麻城の西南七里なる宋埠に至ると、大別山南麓を西進せる一部隊と握手した。此の時二十五日に漢口が陷落したのを知り、道を西方に轉じて二十六日黃安方面に進擊を續け、附近に彷徨する敗殘の敵を掃蕩し、漢口よりの敵の退路を遮斷しつゝ京漢線方面へ前進したのである。此の時丁度信陽方面より京漢線を南下しつゝあつた二兵團も德安附近に進出してゐたので、相呼應して爾後の行動に移つた。

其三　江北戰線、大別山南麓進擊軍の狀況

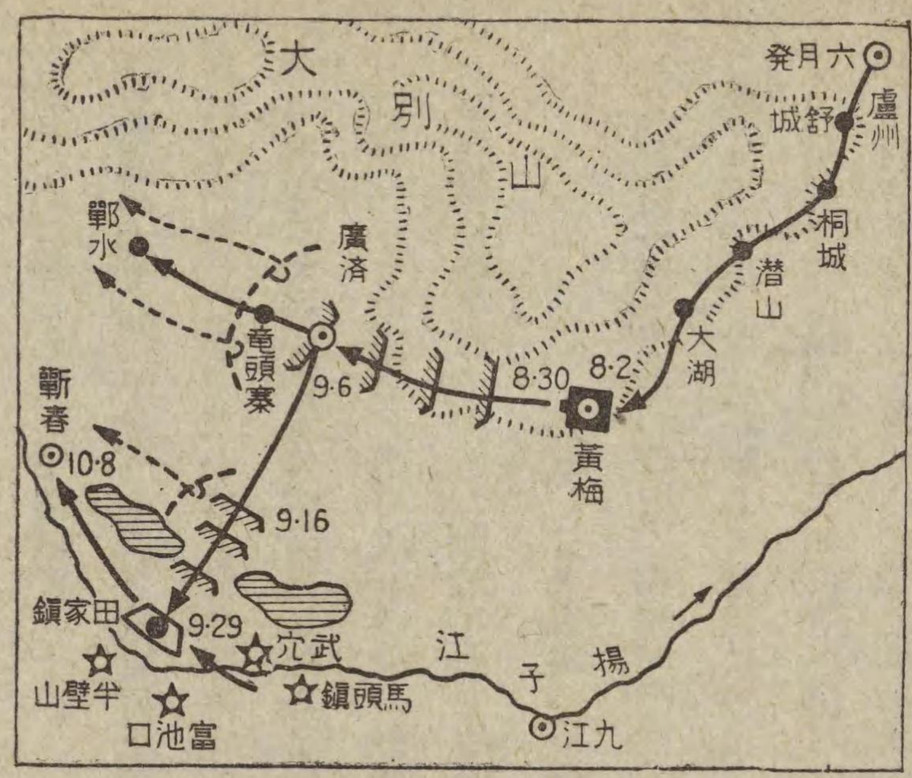
六月初旬盧州を出發し舒城、桐城、潛山、太湖と群がる敵を突破して八月二日黃梅を占領した大別山南麓作戰軍は暫く此處に軍隊を集結して爾後に於ける發動の機を待つてゐた。

此の軍の目的は揚子江の北岸に沿ひ漢口を衝くにあることは言ふを俟たぬ所である。然るに此の方面は武漢防衛上重要の關門であるので、江北支那軍の總帥白崇禧は、李品仙の指揮する十數個師の大軍を以て、如何なる犧牲を拂つても必ず日本軍を拒止せよと命じた。故に此の方面は山も丘も、畑も田圃も、クリークや沼の土手も、部落の內も外も皆敵の陣地で、鬼神ならでは、迚も突破出來まいと云ふ程堅固なものであつた。

【廣濟の攻略】 それを日本軍は突破せんと、八月三十日から攻撃運動を起して黄梅から廣濟を目差して西進を始めた。先づ黄梅西方山岳地帶に蟠踞せる數個師の敵を撃破しつゝ歩々に構築せる堅固なる數線陣地を攻略し、頑強に抵抗する優勢なる敵に連續果敢なる猛攻を加へ、夜襲或は拂曉攻撃を反覆し、遂に九月六日を以て蔣介石が難攻不落と豪語した廣濟を攻略し、引續き敵を追撃し其の一部を以て廣濟の西方約一里の龍頭塞を占領した。

八月三十日に行動を起してより九月六日まで、實に八日目である。黄梅と此の廣濟との距離は八里、一日平均僅かに一里の行程に過ぎない、之を見ても、どれ程の激戰行軍であつたかは判るのである。又此の八日間に於ける損害は、敵の遺棄死體約一萬六千、捕虜千二百、各種砲二十門等で、我は戰死百九十名、負傷八百九十名であつた。

廣濟が落つると田家鎮の要塞が危ふくなる。田家鎮が陷落すると漢口は保てなくなる。それで蔣介石は敗將李品仙に對し「必ず廣濟を奪還せよ」と嚴命を發すると共に大軍の援兵を送つて來た。それで敵の戰法は從來の守勢からして積極的の攻勢を取るやうになつた。



廣濟・田家鎮の攻略

九月十日敵は先づ廣濟へ向けて三千の逆襲を手始めに、夜となく晝となく逐次兵力を增加し全線に亙り攻撃し

軍の援兵を送つて來た。それで敵の戰法は從來の守勢からして積極的の攻勢を取るやうになつた。

九月十日敵は先づ廣濟へ向けて三千の逆襲を手始めに、夜となく晝となく逐次兵力を增加し全線に亙り攻擊して來た。斯う云ふことは支那軍としては珍らしいのである。我軍は善戰悉く之を擊退し、此の間に於て九月十四日一部隊を分派して田家鎭攻擊に當らしめた。

敵は益々猛烈なる逆襲を反覆し、一は以て廣濟を奪還し一は以て田家鎭に向つてゐる我軍の背後を脅かさんと、約四十日の間執念深く躍起に突貫し來り、爲めに兩軍が全滅をかけての大殺戮戰を演じて山河を紅に染めた。其の內田家鎭は陷落し敵勢衰へて漸次退却に就いたので、我軍は十月十七日廣濟を發して追擊に移り、爾來快速部隊を先頭に疾風の如く西方に向ひ進擊を續けた。之から此の隊は先登第一に漢口に突入するのである。

【田家鎭の攻略】 蔣介石は「漢口より田家鎭を大切にせよ」と嚴命し、李增志を守城司令とし最初一個師を以て其の守備に充てた。兵は皆獨逸式の鐵兜を被り、小銃は二千五六百米も屆く口徑の大なるものであり、機銃は一分間に百發も擊てると云ふ精巧なもの、其の他重輕砲、燒夷彈、手榴彈の準備は勿論、要塞其のものは堅牢無比、眞に日露戰爭の旅順、第一次世界大戰のヴエルダンにも劣らぬ河岸の鐵城であつて、「日本軍の攻擊に對し三年間を支へて見せる」と豪語した程である。

今ざつと田家鎭の地歷を述べて見ると、同地は漢口から百里の下流にあり、揚子江は洋々として湖廣平原を流れ來るが、此處のみが不思議にも左右から山巒迫り來りて對岸の半壁山と兩々相對し激流渦卷き、見るからの難所、兩岸の斷崖絕壁の高さは九十米から二百九十米に及び、しかも急に鍵の手に曲つてゐる其の岸壁には「鐵鎖

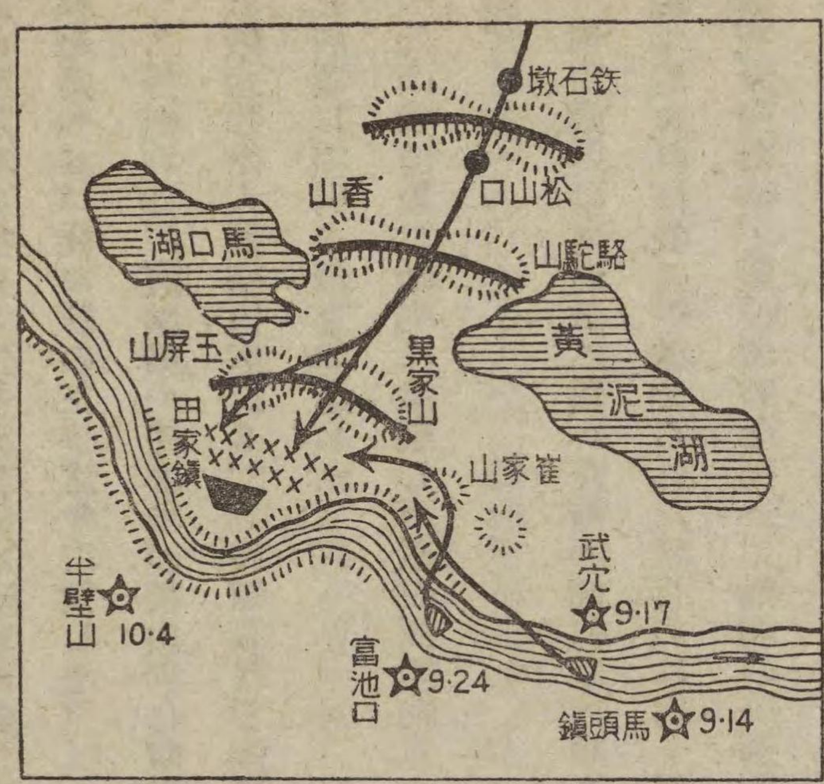
沈江、楚江鎖鑰」等の文字が刻まれて居る。尙ほ附近には對岸には馬頭鎭、富池口、半壁山、こちらの側には武穴鎭と云ふ四つの要塞がある。之に田家鎭を加へて「田家鎭要塞群」と云はれてゐる。其の外背面の陸上には馬口湖、黃泥湖等が、其の邊をうまく取り卷いてゐるから、田家鎭あたりは東西十里、南北六里位の島だとも云へる。而して其の湖と湖との間には三百米前後の擂鉢を伏せたやうな大小の山が二十ばかりある。駱駝山、香山、黑家山、玉屏山等は皆堅固な防禦陣地を構成してゐるから眞の難攻不落だと云つてもよいのである。故に此處は揚子江を遡つて武漢を制壓せんとする者の必ず先占すべき要地とされてゐる。

古く三國時代に、吳の名將周瑜が此の狹江を利用し、兩岸の山上から鐵鎖を連ねて水路を進攻する魏の大軍を破つて勇名を輝かし、其の後南北朝時代、唐宋以後、歷代駐兵の要鎭となし、淸代長髮賊の亂に官軍の將張亮基此に敗績し、賊軍は上流の蘄春に至る江岸に城を築き、周瑜の故智に倣つて鐵鎖もて防備したが、遂に官軍の主將曾國藩の爲めに大敗した。最近では民國十六年（一二五八七年）赤色派の武將唐生智が此處に據り、南京政府軍と戰ひ敗れて下野、日本に亡命した。今次の支那事變に際しては前述の如く、江中には機雷を敷設し陸上には完璧の陣を張り死力を盡くして日本軍を防がんとしたのである。

九月六日廣濟を攻略した日本軍は同十四日一部隊を分派して田家鎭の攻擊に當らしめた。此の部隊は今後暫く孤立を豫期して彈藥糧食を成るべく多く携行し悲壯の覺悟を以て前進した、此處より田家鎭までは約七里、敵の逆襲が頗る猛烈にして頻繁な時であつた。

行くこと約四里にして鐵石墩と云ふ所で、始めて敵と衝突し激戰の後之を破り、十六日には田家鎭要塞の第一防禦線である松山口の敵を破り、十七日には第二防禦線である駱駝山、香山の堅陣を陷れ、十八日には第三防禦

行くこと約四里にして鐵石墩と云ふ所で、始めて敵と衝突し激戰の後之を破り、十六日には田家鎭要塞の第一防禦線である松山口の敵を破り、十七日には第二防禦線である駱駝山、香山の堅陣を陷れ、十八日には第三防禦線である黑家山の陣地に迫つた。前日來の雨で泥濘深く、敵亦頗る頑强に抵抗するので、苦鬪を續けてゐる內、



田家鎭附近

二十一日に至り突如として蘄春方面より約五個師の敵大軍、後方松山口附近に向ひ一大攻勢に殺到して來た。

是れに於いて我軍は一部を以て田家鎭方面の敵に充て主力を以て反轉して此の大敵に向ひ奮戰亂鬪、二十一日より二十五日に及び遂に十數倍の敵を擊退した。此の間我飛行機は決死的の援助をなし、其の協力延機數約四百機、爆彈約二千五百個（約百噸）を敵の陣地、頭上に叩きつけて敵を震駭潰走せしめた。之が爲め後方の心配がなくなり、翌二十六日よりは再び田家鎭に向ひ本格的の攻擊を强行することゝなつた。

恰もよし、二十五日には遡江部隊の海軍陸戰隊の一隊が田家鎭の東方崔家山麓附近に、翌二十六日には同じく他の一隊が少しく其の下流の武穴鎭附近に敵前上陸をし

て一山又一山と攻略しつゝ田家鎭の東翼に迫り、陸軍部隊は二十七日には黑家山を陷れ、二十八日には玉屏山附近の堅陣地を拔き、二十九日には陸軍は北、西方面、海軍陸戰隊は東方面の三方より敵陣を包圍攻擊し殲滅的打擊を與へて、此の日の正午之を占領した。

九月十六日に防禦第一線陣地の松山口を擊破してから、攻略まで僅かに十三日、蔣介石が三年は支へて見せると豪語した大要塞田家鎭も、此の短日月で皇軍の手に陷つたのである。我軍は敗走する敵を追擊し十月八日蘄春を占領して引き續き前進した。

此の戰に於て戰場に遺棄した敵の死體約五千、各種砲十八門、其の他の戰利品無數、我が戰死者三百二十である。

田家鎭の陷落が敵に與へた精神的打擊は頗る大なるもので、之により武漢の敗色は愈々濃厚となつた。交戰の結果によれば我に擊破せられた敵兵力は約十個師に上り、其の損害も亦莫大なものである。我軍は爾來二週間、晝夜を分たず不斷の激戰を交へ、最初の一週間は連日暗雲低迷し、且つ降雨ありて我が飛行隊の活躍を許さず、食糧不足を告ぐるに至りたるも將兵の意氣更に屈せず衆敵に對し斷じて讓らず、之を所在に壓倒擊滅したる偉勳は實に戰史に未だ其の例を見ざる所である。

【漢口へ驀進】　前述の如く我軍は九月六日には大別山南麓の敵據點廣濟の堅陣を陷れ、同二十九日には難攻不落を誇る田家鎭の要塞を屠り、十月八日には田家鎭の西北四里の處に在る蘄春城を拔いた。此の城は田家鎭に次ぐ要衝で、江南、江北兩戰線の中央に位置し、武漢本陣の臍とも云ふべく、又各前線への軍需輸送の基點でもあ

ぐ要衝で、江南、江北兩戰線の中央に位置し、武漢本陣の臍とも云ふべく、又各前線への軍需輸送の基點でもあつた。

しかし是等の要衝を奪還せんと、支那軍の逆襲が執拗に反復され、四十日の久しき、我軍は此の數十倍優勢の敵に對し健鬪一日として息む時はなかつた。漸くにして時機は到來し、十月十七日敵の退却に乘じ直ちに追擊に移り快速部隊を先登に疾風の如く漢口街道を驀進した。途中一種、妙な敵團の突貫に會つたが忽ち之を一蹴して翌十八日漕家鎭に達した。

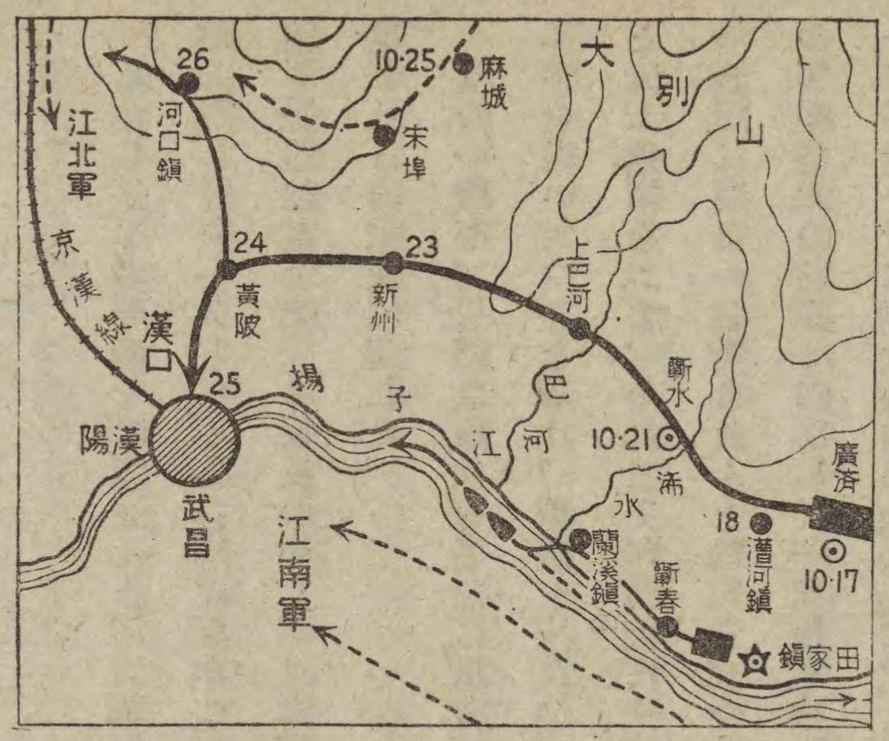
此の一種不可思議な敵は有名な紅槍會匪にして、頭を靑坊主に剃り立て、服裝は區々であつて胸に「佛」と云ふ字を書いた白布を着け、鐵砲を持たず、紅い房の附いた槍をしごき、何かしら呪文を唱ふれば銃砲彈に中らぬと云ふ迷信を以て、それこそ無鐵砲に突貫したものであるが、我が銃丸の好的となり忽ち死骸の山を築いた。

我軍は漢口一番乘りせんと殺氣を立たせ、黃塵を浴び〳〵一日約四十吉米を突破し十月二十日には早くも江北の要害蘄水の前面に肉薄し、一刻の猶豫も吳れず其の夜の內に城外を流るゝ浠水を徒涉して夜襲を敢行し翌二十一日拂曉までに蘄水城內に突入して之を占領した。

蘄水は城の周圍約二千五百米、人口數千の小邑であるが、昔三國時代吳の孫權が兵を赤壁に進めた時、此の蘄水附近に兵を駐屯せしめた。又宋と元との交戰した所でもある。今回の戰に廣濟方面で敗れた李品仙麾下の十數個師は遁れて此の邊まで退いたが、神速果敢なる我軍の急追に全く大混亂に陷り右往左往、附近の山間や棉畑を

落を誇る田家鎭の要塞を屠り、十月八日には田家鎭の西北四里の處に在る蘄春城を拔いた。此の城は田家鎭に次

潛つて逃げ廻るのを、我軍は之を蹂躙突破して急進し、丁度二十二日の晝過ぎ上巴河附近に達した頃、友軍飛行機からの通信筒により「去る十二日バイヤス灣に敵前上陸した日本軍は、猛進に猛進を續け二十一日廣東を占領した」ことを知り全軍の志氣大いに振ひ、翌二十三日には新州を攻略し二千五百の敵を屠り、野砲四門を分捕り、勢ひに乘じ益々急進、二十四日には黃陂を突破、二十五日午後四時三十分頃其の先頭を以て漢口東北部の一角に突入之を占領した。是れぞ武漢三鎭の一角を占領した先頭第一であつた。此の漢口突入は各方面を突進する部隊の競爭的目標であつたから、項を改めて其の活躍振りを說述する。



大別山南麓軍の突進

二十四日黃陂を占領するや、我軍の一部は、それより北方に轉進し二十六日河口鎭を攻略し、北方大別山系より南進する諸隊と連絡して漢口より退却する敵を遮斷せんとした。

又田家鎭を攻略した部隊は前述の如く江畔に沿ひ前進し十月八日蘄春を、二十一日蘭溪鎭を占領し爾後江上を遡航する部隊に加はり漢口方面に向つた。此の行動に就いても後述する。

要するに大別山南麓を進んだ此の部隊は、廣濟、田家鎭を攻略する頃は、堅固なる敵陣地であるのと、優勢なる敵の絕えざる逆襲に遭ひ、之を擊攘する爲め多大の日時を費し、一時他方面の諸軍よりは後れ勝ちであつたが、其の後追擊に移つてからは一瀉千里の勢ひを以て急追驀進、廣濟から漢口まで約七十里の途を九日間に突破